

われが 我が「夫、卅六」現六「他方の心を幽霊上人」みてしれわれ

われが 我が「夫、卅七」海鏡、海鏡「月多」(月多)をのれ心か

われが 我が「夫、卅八」我が「我が心は花魁す人」にてはた

われが 我が「夫、卅九」我が「我が心は花魁す人」にてはた

われが 我が「夫、四十」我が「我が心は花魁す人」にてはた

われが 我が「夫、四十一」我が「我が心は花魁す人」にてはた

てた。一 枝は折りてかへん

われが 我が「夫、四十二」我が「我が心は花魁す人」にてはた

われが 我が「夫、四十三」我が「我が心は花魁す人」にてはた

われが 我が「夫、四十四」我が「我が心は花魁す人」にてはた

われが 我が「夫、四十五」我が「我が心は花魁す人」にてはた

われが 我が「夫、四十六」我が「我が心は花魁す人」にてはた

われが 我が「夫、四十七」我が「我が心は花魁す人」にてはた

われが 我が「夫、四十八」我が「我が心は花魁す人」にてはた

われが 我が「夫、四十九」我が「我が心は花魁す人」にてはた

われが 我が「夫、五十」我が「我が心は花魁す人」にてはた

われが 我が「夫、五十一」我が「我が心は花魁す人」にてはた

われが 我が「夫、五十二」我が「我が心は花魁す人」にてはた

われが 我が「夫、五十三」我が「我が心は花魁す人」にてはた

われが 我が「夫、五十四」我が「我が心は花魁す人」にてはた

われが 我が「夫、五十五」我が「我が心は花魁す人」にてはた

われが 我が「夫、五十六」我が「我が心は花魁す人」にてはた

われが 我が「夫、五十七」我が「我が心は花魁す人」にてはた

われが 我が「夫、五十八」我が「我が心は花魁す人」にてはた

われが 我が「夫、五十九」我が「我が心は花魁す人」にてはた

われが 我が「夫、六十」我が「我が心は花魁す人」にてはた

われが 我が「夫、卅七」海鏡、海鏡「月多」(月多)をのれ心か

われが 我が「夫、卅八」我が「我が心は花魁す人」にてはた

われが 我が「夫、卅九」我が「我が心は花魁す人」にてはた

われが 我が「夫、四十」我が「我が心は花魁す人」にてはた

われが 我が「夫、四十一」我が「我が心は花魁す人」にてはた

われが 我が「夫、四十二」我が「我が心は花魁す人」にてはた

われが 我が「夫、四十三」我が「我が心は花魁す人」にてはた

われが 我が「夫、四十四」我が「我が心は花魁す人」にてはた

われが 我が「夫、四十五」我が「我が心は花魁す人」にてはた

われが 我が「夫、四十六」我が「我が心は花魁す人」にてはた

われが 我が「夫、四十七」我が「我が心は花魁す人」にてはた

われが 我が「夫、四十八」我が「我が心は花魁す人」にてはた

われが 我が「夫、四十九」我が「我が心は花魁す人」にてはた

詞の事記傳十七、五十四へんへん見合す

わじりて心入す... 源、梅枝、四十二... 人々の中をおしわけて出...

るをむすむ玉の... 世のわじり... 河のこなたなれば舟な... 御馬にてなりけり... 山家下...

わじり

源、梅枝、四十二... 人々の中をおしわけて出... 源、梅枝、四十二... 人々の中をおしわけて出...

世の煩ひなり... 源、若菜、下、十五... 世のわじり... 源、若菜、下、十五... 世のわじり...

水廿九「からびつたりもの...」

わづらばは

タマサカニ也「萬五卅」

十九丁に説あり

わげ分。わけ入るわけ参るの類わづらの下に附す

わけいかづち

「千載、神祇、正保」

わけがひ

「桑、衣の珠、四十六」

わけさら

わけ皿「桑、初巻、廿六」

わけめ

「狭、四、五十一」

わぶ

「萬、十五、卅一」

「源、關原、四」

わくむ

「宇津保、義明、上、廿八」

わくこのい

わくこの糸「夫、卅三、知家」

わけ

「同、八」

「玉葉、戀、一、院、御製」

わび... 同、同、廿七「それはわび人わびま... 侍り...」

わび... 秋はな... 同、同、廿七「わび...」

わび... 十六「大御形毛圓満天別好久大末之末世波...」

わび... 「分明ニコカカウト」竹取、六「かぐも姫のかは衣をみて...」

わび... 「月清、上」はくもなぐもな... 道に消なま...」

わび... 「月清、上」はくもなぐもな... 道に消なま...」

わび... 「月清、上」はくもなぐもな... 道に消なま...」

わび... 「月清、上」はくもなぐもな... 道に消なま...」

わびあがる 湧騰「神代紀下、廿」畫者如五月蠅而湧騰

わびあけのころも 蜀杉「和名、十二、十七、蜀杉和岐阿介乃古路毛

わび... 「萬、一、廿八」吾妹子をばみ濱風やまなる吾まつつ

わび... 「拾、哀傷」大和物「わび...」

わび... 「拾、哀傷」大和物「わび...」

わび... 「拾、哀傷」大和物「わび...」

わび... 「拾、哀傷」大和物「わび...」

わび... 「拾、哀傷」大和物「わび...」

わび... 「拾、哀傷」大和物「わび...」

わび... 「拾、哀傷」大和物「わび...」

わび... 「古事記上」故其日子連神和備皇...」

わび... 「古事記上」故其日子連神和備皇...」

わび... 「古事記上」故其日子連神和備皇...」

わび... 「古事記上」故其日子連神和備皇...」

わび... 「古事記上」故其日子連神和備皇...」

わび... 「古事記上」故其日子連神和備皇...」

わび... 「古、秋上、讀人しらす」大かたの秋くるからにわびみこそわび

わび... 「古、秋上、讀人しらす」大かたの秋くるからにわびみこそわび

わび... 「古、秋上、讀人しらす」大かたの秋くるからにわびみこそわび

わび... 「古、秋上、讀人しらす」大かたの秋くるからにわびみこそわび

わび... 「古、秋上、讀人しらす」大かたの秋くるからにわびみこそわび

わび... 「古、秋上、讀人しらす」大かたの秋くるからにわびみこそわび

わび... 「古、秋上、讀人しらす」大かたの秋くるからにわびみこそわび

わび... 「古、秋上、讀人しらす」大かたの秋くるからにわびみこそわび

法師「うかりける人の心のわすれ水などか、よらぬきりならん」
 「同、同、貞觀」契りしはさてちまの井のわすれ水わすれし後は見る
 かげもなし「新撰古、戀五、伊勢大輔」「落つも木葉がくれのわすれ
 水すも見よまたまのなみして」同、同、今出河前右大臣「なかく
 にたえぬるものわすれ水世にすむとたに人にしられじ「新後撰、戀
 六、舞臺法師」「昔見しふるの、澤のわすれ水なに今さらにおもひ
 つらん「散木」「おもたればふるかおをの、わすれ水おしひたすらにぬ
 ま江をぞ見る「輔親」いはれ野のま、か上の雨はわたえく見
 ゆるわすれ水かな「兼古、戀五」「萬代、戀四、修明門院大貳」「あは事は
 さへちやま田のわすれ水ぬれにし袖はひるよなげれや」月詠、五季
 經「なはしるたえくひきしわすれ水あせえにけり五月雨のこ
 ろ「同、六、賴輔」おもひまを山した陰のわすれ水たえまに袖をぬら
 すしとは「同」あり所をわする、戀をいふをよめる紀康宗「ま
 たしや宿をたどりてなく涙わすれ水もちながれ行らん「源臣月詠
 集の註に云わすれ水此頃の撰集にもおほく見えたり。八雲御
 抄に云わすれ水はちある水なり「壬、中」「夏野のしげみか下
 のわすれ水しのびく鹿やふすらん「同、上」「うき人の中よりいつ
 るわすれ水末やみつせの川とわたらん「歌仙落書、定長」「され石の
 上ちみこせしわすれ水駒もかよはずもみたれこのころ

わすれじの「新六、四、知家」わすれじのちきりもそなたのまねはな
 け、にひびひのこのこは「新古、戀三、能同、三司母」わすれじのゆく

末まではかたければかきざりののちともおな

かの部

か 明阿云、かの一言は處の古語也、たごは宿をヤトといふは屋
 處也、又家をヤカといふも屋處なることを相對して知へし、此外に
 床を下といひユカといふにても思ふよし、すてて奥力住力在力の
 類ひ皆處といふに同じすみかを住家の音語と思ふはひがごと也
か 「萬、四、十七」「秋のたのぼたのかりはかかよりあはるこもか人の
 わをこをとまらん「〇常の疑ひのか委く抄するに不及「源、葵、四十七」
 みつかひひつかにてあらんかし「按するに三にて少しは
 かりてよしの玉なるさし「同、須磨、四十九」ひぢがさ雨をかふ
 りきて「萬、四、十七、秋田のぼたのかりはか云々」を出せるは非な
 り此はかのかほにほはにはあらす「はか二はか三はかといふ語
 にて今俗にはかゆくはかゆかぬなどのはんなることを鈴屋翁の説略
 解に出せるが如し又「葵」四十七みつかひひつかにてあらんかしと
 いへるを出せるもたへり此詞の考は別にいふよし「後拾」戀一、
 能宣「まんとひし秋もなかはになりぬるをたのめかおきし露はいか
 にと此類のかは詞の玉緒に多く出たれば、には擧す

か カノ心「源、夕顔、廿七」人はなれたる所に心とけていぬる物か
 「同、横荷、十三」かゝる夜の月に心やう夢みる人はある物か

か 是は輕く添たる詞にて、いさゝか疑の心あり「同、紅葉賀、十一」四
 とせばかりかこのかみにおはすれば「同、葵、廿七」常の事なれば人ひ
 りりかあまたし見給はぬ事なればはたかひなくおぼしおかれたり
か 蚊「和名抄、十九、廿二」蚊和名加小飛蟲夏月夜隨人者也「夫木
 丸、後京極」夏の夜は枕をわたる蚊の聲のはつかにたにもいこそね
 られね **蚊の眉**「六帖、四」かの眉に圓郡をばたつとも人の心
 をいかしたるま **蚊のまつけ**「夫、廿七、能通」目にみえぬ鳥も
 世にちかみのほはのまつけはとも果はつくさなり

か 香。花の香梅が香抄するに不及「拾、神樂」はかきほのかを
 かへはしみとめくれほるそち人をもまゝとせりける「國史、七十五」延
 曆十六年冬十月菊のはなちりせしぬままたその香を「古、春
 上、朝恒」月夜にはなれどもみす梅の花かたつねせしるよかり
 ける「後拾遺、卷上、海基法師」風をばなちの垣の梅の花かは我
 宿のものにぞ有ける「古今、冬、莖」花の色は雪にまじりてみえずと
 もかたにほにほ人のしるさく「源、蓬生、廿」いそなつかしきかしたるを
 「同、宿木、九十五」あなめてたの物のかや「同、若菜、下、八十一」紙のか
 ななをたへたにほにほあなめたのものがたり「同、夢澤橋、十八」紙の
 かをた例の世いかにみえてきたり「宇津保、梅の上、四十一」いそみ
 らしきか

か 荷。マロコ、炭「宇津保、藤間、上、七十」わりこ五十荷
 「拾遺、雜下、仲文」かをるして馬といふ人ありければかをもをもし

とおもふなるよし「和名、十八、十五」鹿和名加班獸也爾雅集注云
 牡鹿曰假日本紀私記云牡鹿佐乎之加其子曰鹿和名加矣「鹿、萬、
 一、廿一」秋ははる今も見るこつまにひに鹿なかん山ぞたか野
 原のうら

か 「宇治拾遺」たか段を見らばかはのよりのめかなるにや「古、
 冬」梅の花云々「左注」此歌はある人のいはく楠の本の人丸が歌
 なり「同、賀」つるかめも云々「左注」此歌はある人の在原のときはる
 がきもつる「新古、雜中、有家」久方のあまつとめか夏ころも雲
 のたもとす布引の瀧「秋、五」今上一の宮またわらはにしておほし
 すか御おぼに云々「月詠、雜下」法皇みこにおはしましける時侍のを
 おぼてはるりけるが今は北面にほちらひながら「萬、廿、四十六」なで
 しこが花をよめる三首あり

か 「萬、四、四十六」吾が、にかけてなひそかりこものみだれて思ふ
 君がた、かぞ「源、夕顔、十四」ちひる子をもまなみの侍るがこもあち
 まりしつとまも「〇此下のはかりに人の事の者のと譯しみるべし
 「源、桐壺、初」いそちこにたままはにはあつたかすくわけて時め給が
 ありけり「同、葎木、七」あまのねのひさしからあつたかふりかたに身をま
 てなはらふまひたるいそちかたかたりけり「同、十」息の下にひまられ
 ちすくまなまらけり「同、夕顔、廿七」かのなま
 がちを見らばんかひにいそせかるまま「同、廿九」打すてまはし
 給うかひみじきこも「同、廿七」まてたつがいとかなしおぼるる

打或裏張又云火色自冬至春(勸無智秘抄)かいらふとはたより
ふくれなるのはりたるにて中へもなきなり

かいらふ(神代紀、上、卅五)置一少女撫而哭之源末摘、卅

二もむ霜朝にかりぬりこのある鼻のいるあひぢみえつらん

かいらふ(體の語なり)末摘(注)箋等よりいたる詞なり初

心の時は手一つに六筋の縁が明かに知れず心ゆりはかりなる物

也(明石)の注宜長云かひなきもありて是は乘をひくことには

限らず萬の縁にのちこちにて只物のうはを撫たるはかりにて中

のころをば知るものならん深きものはなくた、一わたりなるをいふ

注ひがこと也(今案する)一通りと譯すか積松(注)の後は後

見召仕女女のことなるならぬ猶よのつね人の心なることし

(源、末摘、卅一)「かいらふはかいらふの心なることし

かいらふはかいらふの心なることし

かいらふはかいらふの心なることし

かいらふはかいらふの心なることし

かいらふはかいらふの心なることし

かいらふはかいらふの心なることし

かいらふはかいらふの心なることし

かいらふはかいらふの心なることし

かいらふはかいらふの心なることし

かいらふはかいらふの心なることし

かいらふはかいらふの心なることし

かいらふのころ 害心。末の害すの所に由

かいらふ(戒師)源若菜、下、七十五御かいらふの師いむ事のすくれた

るよし佛に申すにも(宇治拾、十二、九)三條大さの宮尼になら

せ給はんとて戒師のためにしにかはされければ云々長き御髮を

云々此上人にはなかせざる

かいらふ 皆具(源、十四)よろひかぶと皆具たびてけり

かいらふ(源、十七、十八)かいらふみ時に小六條にて

かいらふ 搔むる(源若菜、九)かいらふたる額つき かきやる(夫、

卅六、戀(新六、五、知家)今も猶心にかゝるわかれかな髪かきやりし

人のうしろで(宇津保、棟の上、下、一、十一)髪かきやり給ふ手つき

さうしてけり(源、七十一)いさうなみたれたる御かしかき

やうなけり

かいらふ(枕、二、六)男のまねくへのまを直衣うへのさめ狩衣

も袖かきやりよろひ(い)しれ帯つよ(い)たへし

かいらふ 垣間見。體の語のぞきみるをいふ(日本紀)視其私屏

かいらふ 垣間見。體の語のぞきみるをいふ(日本紀)視其私屏

かいらふ 垣間見。體の語のぞきみるをいふ(日本紀)視其私屏

かいらふ 垣間見。體の語のぞきみるをいふ(日本紀)視其私屏

かいらふ 垣間見。體の語のぞきみるをいふ(日本紀)視其私屏

かいらふ 垣間見。體の語のぞきみるをいふ(日本紀)視其私屏

かいらふ 垣間見。體の語のぞきみるをいふ(日本紀)視其私屏

かいらふ 垣間見。體の語のぞきみるをいふ(日本紀)視其私屏

三段「女男の家にかいらふかいらふを」大和物(ひ)かいらふ

かいらふ(枕、三、八)女はねおきたる顔なんのぞきみる

かいらふ(枕、三、八)女はねおきたる顔なんのぞきみる

かいらふ(枕、三、八)女はねおきたる顔なんのぞきみる

かいらふ(枕、三、八)女はねおきたる顔なんのぞきみる

かいらふ(枕、三、八)女はねおきたる顔なんのぞきみる

かいらふ(枕、三、八)女はねおきたる顔なんのぞきみる

かいらふ(枕、三、八)女はねおきたる顔なんのぞきみる

かいらふ(枕、三、八)女はねおきたる顔なんのぞきみる

かいらふ(枕、三、八)女はねおきたる顔なんのぞきみる

かいらふ(枕、三、八)女はねおきたる顔なんのぞきみる

かいらふ(枕、三、八)女はねおきたる顔なんのぞきみる

かいらふ(枕、三、八)女はねおきたる顔なんのぞきみる

かいらふ(枕、三、八)女はねおきたる顔なんのぞきみる

かいらふ(枕、三、八)女はねおきたる顔なんのぞきみる

かいらふ(枕、三、八)女はねおきたる顔なんのぞきみる

かいらふ(枕、三、八)女はねおきたる顔なんのぞきみる

かいらふ(枕、三、八)女はねおきたる顔なんのぞきみる

かいらふ(枕、三、八)女はねおきたる顔なんのぞきみる

かいらふ(枕、三、八)女はねおきたる顔なんのぞきみる

かいらふ(枕、三、八)女はねおきたる顔なんのぞきみる

かいらふ(枕、三、八)女はねおきたる顔なんのぞきみる

かいらふ(枕、三、八)女はねおきたる顔なんのぞきみる

かいらふ(枕、三、八)女はねおきたる顔なんのぞきみる

かいらふ(枕、三、八)女はねおきたる顔なんのぞきみる

かいらふ(枕、三、八)女はねおきたる顔なんのぞきみる

かいらふ(枕、三、八)女はねおきたる顔なんのぞきみる

かいらふ(枕、三、八)女はねおきたる顔なんのぞきみる

かいらふ(枕、三、八)女はねおきたる顔なんのぞきみる

かいらふ(枕、三、八)女はねおきたる顔なんのぞきみる

かいらし 垣代。契説によるに、武烈紀に見えたる宇多我岐と
 同く、樂人をいふなるべし。もしは樂屋に帳をはりたるより、さる名
 を樂人におはせしむにや〔源、紅葉賀、四〕かいらしを殿上人地下
 も心ことなりと世の人に思はれたるに、その限りと、のへさせ給
 へり宰相あたり左衛門督右衛門督ひたり右の樂の事を行ふ云
 五〔同、五〕垣代四十人句こたかき紅葉のかけに四十人のかけ
 しるいひしらす吹なたる物の音也 〔著聞、十三、三〕兩貫首
 以下垣代に立けり云々垣代には殿上人をも立けるに〔同、四〕垣
 代には左大臣笙民部卿宗輔卿笛季兼朝臣筆策

かいらしやく 介錯。後見人又せはする事にも云、今時太刀取
 を云はたかへり〔明德記、下、五〕とかく勞り介錯し進せければ〔同、
 三〕御介錯も傍の人々云々〔同、五〕御内の御かいしやくに難波の
 三位ののち申女房のありけるに尋より宣ひけるは〔辨内侍日記、
 上〕中納言のすけのすく御かいしやくして下すたれにてとかくま
 ぎらばして御こしははゆしける
かいらしき 播鋪〔釋業雜要、二〕上紙十八枚播敷紙
かいらしめ ひそみかゝるゝのひそむに近く、差出すに身ジンマ
 クスルをいふ〔源、未補、三〕心はかたぢなな深き方はえ知り侍ら
 かいひそめ人らうらもなし給へは〔源、玉葛、初〕右近が事心よく
 かいひそめたるものに女君もおぼしたれや〔同、十九〕此來る人もは
 つかしけもなしたうかいひそめてかたみに心づかひしたり〔同、源舟、
 末〕

五十一〔母若女房の詞云々今參りはとめ給へんことなき御なか
 らひはさうじみこそ何事もおいらかに覺さめよからぬ中となりぬる
 あたりはわづらはしき事もありぬしかいひそめてさる心し給へ
かいらひく 〔同、源木廿三〕かいらひくま音 **かきひく** 〔應神、十二〕
 訶羅怒を臨にやましが阿摩離琴に梵句離訶積響句耶云々
かいらひぎ 〔榮、嵐の林〕佛をいりもみ奉る御たうくのそなをさ
 してあつまりてかいひぎをしてそらをもあそびくいかで御身にかゝるもの
 のかすにもあらぬ身をかはり奉らんとおもひ云々
かいらもとあるじ 垣下饗なり。主人をたすけてとりもちする人
 をいふ相伴の類也〔源、少女、八〕おほしかいらもとあるじ甚びざらに
 侍りたうぶ 〔後撰雜一〕齋院のみそぎの垣下に殿上の人々ま
 かりて〔月詠雜上〕養和二年三月に賀茂重保尚齒會おこなひ
 侍りける七段にてよめる祝部成仲歌云々垣下にてよめる賀茂重
 政歌云々○濱臣云重保尚齒會の時の垣下にてよめる也 清輔
 尚齒會記にも重家季經兩卿をはじめにて垣下の歌九首入た
 りき

かいらもちひ カイ餅〔字詠拾、一〕比叡の山に見ありけり僧たちよひ
 のつれぐにににかいらもちひせんといひけるを〔徒然、二百十六段〕一
 獻にうちあはび二獻にえび三獻にかいらもちひにてやみぬ 〔著聞、
 十六、九〕其のちのち高尾にかいらもちひくたうらいにほはらぬたり
 てそよりやめてたかをうけたりけり○廣足云、かいら餅は今
 としければいとかろちかにおろされたれは〔源、常夏、廿五〕御覺えのほ
 といとかろちかなりや **かいららか** 〔同、未補、十八〕かいららかなら
 ぬ人の御ほさる心をさそおほしける〔同、朝顔、十六〕かいららかに
 おしたちてかいららか給はぬ御けしきを心なるしうといふ〔同、若葉、
 四十七〕いとかろちかにかいららか

云々、雲々のこと也

かいらす 害〔字詠保、後段、中〕かいらす物に害せらるゝ人は菩提もたか
 たき物なりとの給ひて〔竹取、八〕龍は云々、それが玉をとりんとてそ
 こらの人々の害せられんとしけり **かいらすの心** 〔字詠保、後段、中〕此
 けた物事の心をすも見給へん

かいらすぬ 〔落難、一、六〕石山詣の留守の所に安瀟かいらすみて心ほそげ
 なれむわが君らちかたらひてむたるはあむ

かいらがるし 〔榮、後徳大將、十二〕物わかちかにかろちからぬ人は
 出てはしりもひぬをかりし〔源、常木、四十七〕かろちくしきなきんとり
 そん **かいらがるし** 〔同、四十一〕かろちくしきはひまき立よ
 り給はんも人めしけらん所にひんなきもあまひやあらはれん〔同、
 十二〕かろちくしきくちのひたること也〔後、四、下、十八〕いつしか
 かろちくしきくちのひたること也〔後、四、下、十八〕いつしか
 かろちくしきくちのひたること也〔後、四、下、十八〕いつしか
 かろちくしきくちのひたること也〔後、四、下、十八〕いつしか

かいらか 〔源、朝顔、十〕人の心をあはせたらん事たにかろちかになし
 ぬ **かいらか** 〔同、朝顔、十〕人の心をあはせたらん事たにかろちかになし
 ぬ **かいらか** 〔同、朝顔、十〕人の心をあはせたらん事たにかろちかになし
 ぬ

かほ

かほび 「源、赤木、朝末の世にも聞つたてかほびたる名をやはらぐん」...

かは

かは 皮 「和名抄、三〇九」和名加波被也...

かは

かは 彼者也、多く川を兼ぶるより、あはれ心同し。...

かほ

かほはしかみ 「和名抄、廿〇九」吳菜莢和名加波々之加美...

かは

かは 川橋、さほの川はし。夫、廿一、光明寺補政...

かは

かはししら 川柱「更科日記、三」大きなはしら川の中によつたて...

かは

かはほり 扇の事也「源、紅葉賀、廿二」かはほりのえならす...

かは

かはほり 代。俗に其カハリ、アノカハリの代也、體の語「狭衣、三〇上」...

かは

かはほり 代。俗に其カハリ、アノカハリの代也、體の語「狭衣、三〇上」...

かほはね 「和名、十七、十七」骨達和名加波保補味鹹大冷無毒根...

かほは 川邊、かほは 河門。川の瀬々の水の二つに成て狭き...

かほちめ 河内女「續後拾遺、一、後一條入道」忍ぶれば、くもるし...

かほちめ 河内女「續後拾遺、一、後一條入道」忍ぶれば、くもるし...

かほちめ 河内女「續後拾遺、一、後一條入道」忍ぶれば、くもるし...

かほちめ 河内女「續後拾遺、一、後一條入道」忍ぶれば、くもるし...

かほちめ 河内女「續後拾遺、一、後一條入道」忍ぶれば、くもるし...

かほちめ 河内女「續後拾遺、一、後一條入道」忍ぶれば、くもるし...

かほちめ 河内女「續後拾遺、一、後一條入道」忍ぶれば、くもるし...

かほちめ 河内女「續後拾遺、一、後一條入道」忍ぶれば、くもるし...

かほちめ 河内女「續後拾遺、一、後一條入道」忍ぶれば、くもるし...

かほちめ 河内女「續後拾遺、一、後一條入道」忍ぶれば、くもるし...

かほちめ 河内女「續後拾遺、一、後一條入道」忍ぶれば、くもるし...

かほちめ 河内女「續後拾遺、一、後一條入道」忍ぶれば、くもるし...

かほちめ 河内女「續後拾遺、一、後一條入道」忍ぶれば、くもるし...

かほちめ 河内女「續後拾遺、一、後一條入道」忍ぶれば、くもるし...

かほちめ 河内女「續後拾遺、一、後一條入道」忍ぶれば、くもるし...

かほちめ 河内女「續後拾遺、一、後一條入道」忍ぶれば、くもるし...

かほちめ 河内女「續後拾遺、一、後一條入道」忍ぶれば、くもるし...

かほちめ 河内女「續後拾遺、一、後一條入道」忍ぶれば、くもるし...

かほちめ 河内女「續後拾遺、一、後一條入道」忍ぶれば、くもるし...

かほちめ 河内女「續後拾遺、一、後一條入道」忍ぶれば、くもるし...

かほちめ 河内女「續後拾遺、一、後一條入道」忍ぶれば、くもるし...

かほちめ 河内女「續後拾遺、一、後一條入道」忍ぶれば、くもるし...

かほちめ 河内女「續後拾遺、一、後一條入道」忍ぶれば、くもるし...

かほちめ 河内女「續後拾遺、一、後一條入道」忍ぶれば、くもるし...

かほちめ 河内女「續後拾遺、一、後一條入道」忍ぶれば、くもるし...

かはり…かはる

下、廿七「今ははるけやちん方なきかはりには〔萬、八、五十五〕たなきりあひ雪もふらぬか梅花さかぬかはりにそつてたにみん
かはりかはり 「源、浮舟、六十一」田舎人どものものる人にてかはりがはりのかはりは〔源、六、七〕御供の人はかの坊にならひひてよびよてゆけばかはりくそじく〔榮、煙の後、六〕中宮皇后宮のよむかはりはせ給ひて内わたりにもちあせはせにさるべき折々なんかはりくに物御覽にならひのほらせ給ひける

かはりる 「新古、哀」頼子内親王かくれ侍りて後頼子内親王かはりの侍りぬをまいてかはりて齋院にならせ給ふ也

かはる 代。人に代る也、物の物にかはるも〔源、廣柱、廿八〕御かへりはこゝには聞えじかきにく、覺いたねはまる聞えんとかはるもかたはらしたしや〔古、秋上〕寛平御時云々人にかはりてよめる友則

かはるがはる 「枕、七、八」公卿殿上人はかはるく盃とりて〔夫、十五、惟喬親王〕入月にてりかはるべき紅葉さかぬあらしの山

かはる 世の中のうつり替る、又草木の色うつるひ替る、又男女の心の替るにも、本の心は初の代るに同じ〔源、帯木、十九〕まことにはかはるべき事も思ふ給ふながら目頭もる迄せうそことかはるす〔夫、十、家隆〕秋風のよき日より片岡のせみのなくぬ色かはるなり〔風雅、戀四、定家〕うしてまたれたかへはつれなすてかはる心もさるさるしてよ〔新古、戀四、女御生子〕あふみさのわかかなくもあ

かはる

らぬ青柳はいろかはらじといかたのまん〔後撰、戀五〕女の心かはりぬをまきて〔同、秋下〕君とわれいもせの山も秋くればいろかはりぬるものにぞ有ける〔新古、五、光俊〕いかさまに人我中をいひうらめども君よ心かはるな〔土佐日記〕ちよたる松にはあれど古の弊のよむかはらざりけり〔拾遺愚草、上〕人しれぬ人の心のかねどもかはればかはる此世なりけり〔玉葉、春下、明恒〕さくら花をりてかざらんくろ髪のかはれるいろを見まがふとく〔新古、賀、貫之〕こゝにおひそお竹のよをてかはらぬいろをたれもかはみん〔榮、若狭、四〕關白殿の大體にこゝにかはるとまにはあらねど御ひきで物のほきはる云々南おまてのすのこにこそはおはすければはるやうの事こそかはるべき〔源、夕顔、四〕たかくおまに云々かはり侍りなんことを〔同、廿八〕またたか、かはりたる所なし〔同、榮、廿五〕やうくかはり給ふ事どもあれは〔萬、三、廿六〕なかくひきてき萬代にかはらすあらんてまじの宮〔源、夕顔、十二〕今一かたはるしつよくならぬかはらすうちをけぬくみえしよまなるを〔古、春下、讀人しらす〕春霞たなびくもまのさくら花うつるほんと色かはりゆく〔源、葵、初〕世の中かはりて後桐つばの御門讓位の事なり〔續拾、戀二、爲理〕偽とかかははしはるものはかはすたまはたのみこそせめ〔續拾、雜秋、左大臣〕山おかく心のうちに契りてもかはすてみたる秋のよの月〔拾遺、戀五、讀人しらす〕心をほつらまものさていひ置てかはらじと思ふかはる戀して

かはさち 川達〔夫、廿〕〔新六、五、光俊〕かはさちのはにふのこちのかり枕夢になしても人にかたるな

かはさき 川長〔夫、十三、爲家〕さしかる年も袖のかけなれば月

かはわた 朝ぼらけまきのまほは霧こめてうちの川長舟よはかなり

かはわたし 川渡

かはわたり 木丁をさむくよりとりて、かはくそよそよとたてわたり

かばかり コレホド又コレハカリの心の所もあるか〔源、帯木、十八〕かばかり我にしたがふ心ならは思ひこりなんと思ひ給へて〔同、空蟬、八〕かばかりのかる、心あめれば〔同、手習、三〕かばかりの天の下のげんさのまほしきにはなかくれ奉らじ名のり給へく〔萬、五、古戀五、俊成〕もろこしの人まきをほくたつねはちかはかりつらま中はありやと〔源、夕顔、廿四〕げにかはかりにてんだんあそびも事のままたかひたり〔夫、十四、匡房〕かばかりの匂ひもあそびまの花うへこそ花のあるじなりけれ〔續後撰、戀三、小辨〕かばかりもかならん世の雲間にかきたはみるべき秋のよの月

かはさち…かはか

かはかり 川雁。いかなる鳥をいふにか〔神紀、下、三〕以三川雁爲二持傾頭者

かはかみ 川上〔夫、十七、行圓〕さよあけてくまもゆつはのむらちをり川かみさむくあらしさつてし〔萬、一〕川上のゆつははむら草むさず常にもかまなごをさめて〔萬、十一、四十八〕河上に洗ふ若菜のながれきていもがあたりをせにこそよちめ〔古事記、上、廿〕以爲人在其河上〔後撰、秋上〕秋くれば川霧わたる天河かはかみみつつこほる日のおほひ

かはかせ 川風〔古、旅〕みやこ出てけふみかのはらいつみ川かは風さむし衣かせ山〔拾遺、冬貫之〕ちもむかむかむかりゆけは冬のよの川風さむみちをかなくなり

かはかめ 川龜〔和名抄、十九、九〕龜和名加波加米〔安藤紀、廿八〕水江浦島子乘舟而釣遂得三龜更化爲女〔元真、六〕中の家のまに川ありそれに川龜流る〔夫〕川かめも今萬代はもろもに浪のそこにすみわたるらん

かはたれ 川淀〔新古、冬〕よしのなるなつみの川の川よに鳴きなきなる山陰にて

かはたれも カレハタレ時也 曙のほのかに見まがたき時也〔萬、二十三、三十一〕あかたれのかはたれたれにまがたれをこきにし舟のたつぎしするも〔玉生、中〕里近く汀の水おとすなりかはたれ時をたれたるらん〔源、初音、十〕かれはたれたれまなるに〔夫、七、爲家〕ほ

かはか…かはた

かはたれほし (回國雜記)に曉のかはたれ星であるはかはたれ時より出る太白の事なるを

かはたけ 川竹 (和名抄、廿十七) 善竹辨色立成云苦竹 加波多

計本朝式用三河竹二字今案昔宜三從竹作善歌竹名也

細太竹、國信「木枯に園のかはたけかたよりになびけ色はかはら

ざりけり「年中行事歌合、寄竹懸、入道大納言」「よそにみる雲の庭の

川たけのひまよのよしもと中哉 (金、戀上、經忠)「ひまよよは

いつかちざりし川竹のながれてこそおもひそめしか「同、賀、細河院

御製」「世々ふれごおもかはりせむかは竹はながれてのよのためしな

りけり「新拾、雜中、三條院御製」「つゝくゝとさき世にむせぶ川竹のつ

れなき色はよるかたもなし「新撰古、雜下、後小松院御製」「九重や庭

のかは竹かはらねは代々のあであるるをそおもも「同、雜下、雅縁」

「むかしおもも心をはせかは竹の三代にあひゆる身はよりぬるを

「拾遺、中」「いつのよまななれてよりゆる川竹の又下かけに霜をま

そふ「拾遺外、上」かは竹の下行水のうす氷ひるはさきえつゝねそ

なかるれ「續後撰、賀、順」「神代より色もかはらぬ川竹のよ、をは君

ぞかぞつわたらん此歌は誤也契沖の説あり

かはらひ 「夫、廿一」「新六、二、信實朝臣」「岡こえの道をさるしみ川

そひのあすかのかたをゆきめぐるらん「新撰古、春上、衣笠内大臣」「さほ

山の峯に霞はたなびきて川そひ柳春めきにけり「源、惟木五」はる

たるは 同(宇治拾)の文のついでに云々かはつるみはいつはか

りにておもひしを問たるに云々あり ○御杖北邊隨筆四、十

八説に刷ツルミの意をいり、舊説は手銃の事也、男色の事とい

ふ説あり

かはつら 川面「源、松風六」これは川づらにさしはね松かげに何

のひたはりもなしたたるし殿の事をさたるをいふ

かはね 尸。死者人のかちをいふ「神代紀、下、三」擧「尸致」天「推

古紀、十六」見「屍骨」既空「拾遺、哀」忠連南山の房の繪に死人

を法師の見侍りてきたるかたをかきたるを見て源相方朝臣「契り

あればかはねなれどもあひゆるをわれを誰かとはんぞと云ふ「源、美、

廿七」いふはかはね神かはねばかりを御まごりて曉かかくかへり

給ふ「同、宿木、六十七」昔わかればかかみみてかはねさつゝみてあまた

の年くびにかけ侍りける人も「英、四、下、五十五」まはて、かは

ねははひたさるゝ戀のまはりはたさるゝはなれじ「散木、中、十二」か

はねはまをきてあるもむかし人のかなるかはねもさるゝ此鳥にし

も名をのこしけん「元貞、廿五」夫「忘れたる人にいひゆる「網代ゆ

く宇治の川波ながれてもひまのかはねをみせんとぞ思ふ返し」世に

しはくはねの骨は見もしなん網代のほねはこま(ま)ま(ま)かたもな

し

かはね 姓氏「神代紀、下、十二」宜以三所顯神名二爲二姓氏

「天武紀、廿七丁」十二年冬十月己卯詔曰更改諸氏之族姓

はる霞わたれる空に云々川そひ柳のおもひしなびく水かげなを

るかならふをかしきと云々

かはつ 蛙「萬、六、四十一」おもほそきませる君をさほ川の河蝦

きかせてかしのるかも「拾玉、二」心すむ水のうき草なびきつ、か

はつなかりる夕暮「拾遺、上」ほのかなるかれの、末のあらを

たにかはつも春のくれうらむなり「古今序」水にすむかはつの際を

きは「夫、五、爲顯」はかなしや筒井の蛙われはかり外をもしらす淺

き心は「萬、八」わかた、みみへのかはらのいそのうらたかはかり

かるとなぐかはつかも「同、十」かはつなぐよしの、川の瀧の上のあし

ひの花さつちにおくなぬも○廣足云、萬葉なるかはつは今かじか

なる事河蝦考を見てしるを「伊勢物語」「よひごころかはつあまた

なく田には水こそまされ雨はふらねど「中務集」かへるのかれたるを

人のおこせて「かれにけるかはつの際を春たてなまかあかねを

ひけるかな

かはつ 川津「萬、七」さほ川のまきかはらなくともり河津を

あたつわれかねつも○廣足云、こは蛙にあり河の津を千鳥を

なりあつとも忘れかたきまを云り「同」十天の河津また、河津

しおもほゆなともあり、いづれも川の津の事也

かはつるみ 「大津牛養記」鐘樓法華堂乃加波津留美「宇治拾

一、十七」一生不犯なるをそらひて講を行はれるにある僧禮盤

にのぼりて云々わな、きたる聲にてかはつるみはいか候べきといひ

作三八色之姓二以混三天下萬姓二一日真人二曰朝臣三曰宿

禰四曰忌寸五曰道師六曰臣七曰連八曰稻置

かはねぐさ 「和名、廿、四」女青一名雀瓢和名加波福久佐子似瓢

形二故以名之

かはなぐさ 「和名、十七、十六」水苔一名河苔和名加波奈「式、八、

十三」鎮火祭、水神飽川菜道山姫四種物乎生給氏「古、物名、

深養父」「ぬは玉の夢に何かはなとまきんうつ、にたにともあかねこ、

るを

かはなみ 川波「夫、廿四、家長」せきとめしうちの川なみたかへり

田鶴の龜も君ぞつたへん「新後拾、雜秋、土御門院御製」「たつた山も

みちまされになりぬらんかはなみ白き冬のよの月「月清、下」「やはた

山ににあらしのおき吹はかはなみしるま淀のあけほの

かはら 瓦「和名、十七」瓦和名加波良燒泥爲之蓋「屋宇上」

「玉葉、雜二、後京極」「山かげや軒はの昔のしたくちてかはらのうへに

松風ぞやぐ

かはら 河原「源、夕顔、廿八」かはらのほご御さきの火もほのかにな

るに「鴨のかはら也」「萬、三、廿三」まうち山夕こそ行ていほ崎の

すみた川原にびどりかもねた(紀州なりをいなり)

かはらか 「横笛の抄」細流「乳の出るなり。雅學考るに物のかわ

きたるをいかにち。又案にサマラカと類語にてサハハリの心にか

「源、横笛、十四」御乳はいとかはらかなるを心をもちてなまもめ給ふ

「宇津保樓の上、上、廿八」今もむなむなびすよしくかはらかなる顔ついで髪ほきはかりにて「取替はや」色白くかはら髪を青むかにかはらかにて「源、若菜、上、七十四」尼塗らかはらかにてあるまゝにて「同、宿木、九十四」ほめつるまゝくげはやはらはかにて「紫日記」ちたげなるけはひ物清くかはらかに人の娘と覺ゆるまましたり「宇治大納言物語」四十はかりの女のまはかにかはらかなるまゝにて「源、宿木、七」やすらかに身をまてたしむるまはたらかはらかなりや「蜻蛉日記」二「我はたはじめよりまをくしうはあらすた、かはらかにかう打もりて脇足の上にもまもつておしかかりて佛をねんじ奉る「大鏡、六」まをまはたらかはらかにてにおはせし事病付てし顔はつるまかりければなみえしにてて民部卿殿は常にの給なれ

かはらもぎ 「和名抄、廿、一」菊本草注云菊有白菊紫菊黃菊「和名加波良與毛木」云可波良於波城日精草也「同、十一」白菊一名兼備諸菊和名之諸與毛木」云加波良與毛木

かはらかせ 河原風「宇津保、後隆」

かはらのま 瓦の窓「抄」山居幽栖のまから也「十載、序」かゝは道なたちをいんかためにかはらのまを紫のいほりのまはをまする也マ

かはらのまじ 「散木」屏風の繪にあらる家のむねに草や木がまをひいてけりたる下に家あるまをまほしき人のおいたるかたかける

所「我宿のかはら、ね」の松の木高きに身のふりにけるほろをこそおもへ「新後拾、秋下、宗政親王」古郷のかまほのつたも色づきてかはらの松に秋風ぞよく「續古、戀四、後隆」よりけるかはらの上の松のねのふかくはいかへ人をたのまん「玉葉、維三、後京極」山陰やのきはの昔のしたくちてかはらのうに松風ぞよく「枕、四」宰相の君のかはらの松はありつやをいりたりつる云々「白氏文集、樂府贈有「衣瓦有「松」「平家物」秋の草門をまづかはらに松おひかきつたしげれり「三才圖繪」しのおさるの瓦松をかはらの松にありて、新後拾の故郷の云々、瓦の松に秋風ぞよくの歌を引たるは誤也かはらの松はまことの松也、瓦松の字によりてしのお草のまをまほしきまがこと也

かはらや 瓦屋「後拾、戀二、實方」忘れずよ又忘れ「かはらや」かはらものしたくけふりしたむせびつ、「同、戀四、長能」わか心かはらものかかはらもの下たくけやわきかたりしたむせびつ、「夫、廿、家隆」かはらものしたくへ人もたひわびぬまは浅間のけふりまをなし「新古、戀四、定家」むせびつをまほしきまをまほしきに我のみけたね下のけふりは「續後隆、戀二、基真」われはかりおまひこかれぬかはらものけふりまをまほしきまをまほしきま

かはらけ 「源、若菜、廿」びじり御かはらけ賜はりて「同、宿木、廿五」つきくの御かはらけ二たび三たび参り給ふ「後拾、春上」云々梅がまをいみ歌をうたひてあそびけるに内よりかはらけ出すとてよみ侍り

かはらひ 瓦樋「新六、三、夫、廿三、光俊」「あみこゆる道におせたる瓦ひのくしをていじりまをまほしき身は

かはらびら 「宇津保、殿間、上、三」此殿はかはら人里人入みたりてこほちはて

かはらすどり 瓦視「續千、物名」かはらすどり爲氏

かはらかひ 川向「散木、下、十六」まをまほしき面白かりける中にまをまほしき山つらなるひるまをまほしき思ひ出されてよまを

かはの石 石なる「神功紀、六」阿利那禮河返以之逆流及河

かはのはかま 皮の袴「夫、廿三、權僧正公朝」ふる雪におち草をむる大かひの皮の袴は見るまをまほしき

かはのたび 皮の帯「後拾、戀三、八」男にわらわられてさうぞくまをまほしきつみおくり侍けるにかはのおびにむすびつけ侍ける和泉式部「和名抄、十二、廿」革帯、今案帶以「其所」附金玉石角等「爲」名故有「白玉帶、隱文帶、馬腦帶」之名「革帶」是其物名也

かはのねだ 川の枝「頼政集、上、水上落葉」木末にもあらぬせまにわかちる川の枝にもまほしきしにけり

かはねろし 「夫、十七、家集、潘輔」「ひさ木おあるあまのかはらの河おろしにたぐら千鳥の聲のまをまほしき「夫、十九、喜多院入道」三品程上「けさみれば立田川原の川おろしまをまほしき紅葉を波をりける「新六、六、衣笠内大臣」月かけも清きかはらの川おろしにすかりてひさまのしたまもくもらす

かはたど 川音「夫、十七、衣笠内大臣」小夜中とよはふけぬらし玉しまの川音すみて千鳥なく也「風雅、春中、爲兼」「打渡す宇治のわたりの夜深きに川音すみて月をかすめる「新拾、冬、直致」はまをまほしきはこほりもあつて冬の夜の川音高く月をふけゆへ

かは 河伯。カハノカミ。乾をかねていへり、假字かか「和名抄、二、三」河伯「云水伯河神也、和名加波及加美」蜻蛉日記「はらからのみちのくにの守にて下るを長雨しける頃、その下る日ははれたりけり

これはかの國にかはくといふ神あり、わが國の神のまもりやそへりけん
かはらけかりし(かはくけありし)天つそらかな返し「今ぞしるかは
くときけは君がためあまてる神の名にこそはあれ

かはぐち 川口「源、藤葉集、十」「あまき名をいひながしける川口は
いかにもちし、關のあらがき

かはくま 「萬、一、廿九」川隈の八十くまおちす云々

かはや カハ屋、葺屋の類にて、川邊の家をいふか「夫、廿、重之」「春
の日は行もやられず蛙なぐるでのかはやに刷とめつ、

かはや 廂「和名抄、十、十」唐韵云園作「潤則也 和名加波夜或
謂之園一言至穢處宜常修治使「繫清」也「古事記、中、廿五」

朝曙入廁之時 かはや人「延喜式」「瀨宮式」洗人二人則人
二人みかはやうと

かはやなぎ 川柳「顯宗紀、八」伊藤武斯廬寄簀野比野離擬
「和名抄、廿、廿」水楊加波夜奈木「萬、九、十五」かはづなくむつたの川

の川やなぎのねもころみれどあぬ君かも「夫、廿、四、家隆」「玉しま
やおちくる鮎の川やなぎ下はうち、り秋風ぞよく

かはやしる 川社。川中にかりの社めく物つくりて、みな月のほら
へするをいふなるべし、委くは袖中抄卷之四、奥儀抄卷之六

の十六段、契沖が川社の上にもくはしければ、こにはいはず「夫、
十、後成」「六月やみそききすし川やしる袖に玉ちるゆふ浪のした
「同、九、匡房」かはやしる秋はあすぞと思へは浪のしめゆふ風のす

すしき「同、土御門院」「ゆく盛秋かせやくとつけすともみそきすし
き川やしるかな「貫之、四十一」「ゆく水のうへにははるかはやしる
川波たかくあそぶなるかな 〇「拾玉、五」「かはやしるあそぶ心のす
ずしきやかつく神のめとみなるらん「玉三集、中」「かはやしるほすや
衣は名のみして浪に低たる玉をちりかふ

かはふね 川舟「夫、廿三、仲正」「せにかけたさしおとされぬ河舟の
片思ひこそくるしかりけれ「同、同、嚴宮門院大輔」「あふ事をひさしく

よきの川舟にぞりこす綱のか、らぶもかな「夫、十二、慈鎮」「さとしむ
るとは田のいなはほのくときりかくれゆくよものかは舟「枕」川舟
の下りさま「夫、廿四、誦入こちす」「川舟のはやきつなでに引すぎて
みはてぬきしにのこる松原

かはふね 皮笛「源、紅梅、九」かは管山(うそふえ)いふつ、かになれた
る聲して 〇新猿樂記早職事之皮笛 〇「思ひのまゝの日記」諸
卿系ひす、みてしやうがしうたらたひてかは管ふくもあり

かはこ 「猿衣、一、下、廿二」かはこやうの物あけさせて「宇治拾、三、大
太郎の段」「同、十、廿」すたれのひまきり見ればかはこなぞあまた見ゆ
「古事談、五」戰場死亡の者片耳を切り集めて乾て皮古二合に
入て持て上たりけるを「吉御記」承安四年九月廿六日今夜有
夢又自(みづ)或人許(よ)送(は)皮古(ひ)一合(ひ)納(ひ)桑(ひ)唐(ひ)よりもろも
ろの重寶をいれて奉られたりけり皮子のみに 〇「宇治拾、三」か
はこいこたかく打つまれたるまへに「まき」ことにはかはこおほかり「職

人盡歌合」皮籠造、このかはこは人のあつらへ物にて候

かはこも 皮衣「夫、廿三」「萬、九、誦仙人形」「こしへに夏冬ゆ
けやは衣あふきはなす山にすむ人「同、同、新六、五、六帖題、爲家」

「山おかく行ふみちのかは衣よものかせもきてなれにけり「同、同、
同、表笠内大臣」「わさ角をかたみかけたる皮衣けふのみあれをまらわ
たりけり「六帖、五、下」「萬、九、九」「こしへに夏冬ゆくや表あふき
はなす山にすむ人

かはこむしろ 皮子籠「宇治拾、九、三」皮子籠をこひて皮にかさ
ねてして幕引まはしてある

かはこらま 「宇治拾、七、十四」はたご馬かはこ馬なまきつきたり

かはあらし 川嵐「夫、十九、爲家」「日くるれば山かけくたる川あらし
しつぎをなほむかをも鳴なる

かはあひ 河合「夫、廿一、家集、四行」「川あひのまきのすを山いた
て、袖入いかにすしかるらん

かはあさす 此かはあさは不變の意也「萬、十七、四十四」月たは
時もかはあさす云々

かはあしら 蒲櫻「源、廿分、四」春のあけほの、霞の間より面白
きは櫻のまもみたれたるを見る心ちす「細流」うす紅櫻の花なるべ
し古今にいらるかはは櫻のこと也「河海、朱櫻」「淺みそりのこの霞
はつ、あ、あ、こほれて句をかほくへくかな「新六、六、行家」「ひもかき
りつらむちのあはははは花ののかりのいろはまづかし」これ朱

櫻を聞ゆ 〇契云、案河海に朱櫻をかは櫻としたまふこと誤り
なり、和名云、本艸云櫻桃一名朱櫻和名波々加一名瀬波佐久良加
くの如し又木具云、玉篇云樺 月化胡化二反加波又云加仁波今櫻皮
有之木名皮可(ひ)以爲(は)炬者也、此玉篇にいへる心は何の木と
えらはず木の皮の炬(は)とすべきをすて樺といふか、萬葉第六赤
人長歌云櫻皮細作流舟仁真樞貫云々、和名に今櫻皮有之
といへる是也、炬とするのみならず萬の器物なごをづるに用うる
物也、猶委は本草綱目樺の下に見えたり、かは櫻といふは櫻の
中に此櫻殊に其皮を用るにゆければ名づくるか、又かは色とて一
種の染色の名なれば本の色に付て名づくるか、河海にひかれたる
歌は菅家萬葉集に出て、拾遺にのせられたる共に落句は花櫻か
なとあれば、かは櫻哉とひかれたるは誤りなれど、物語のこ、にひけ
るやう、かは櫻とは色に付て名付て則花櫻のこと、みたり、花櫻
は紅なればかは色かよふべし 〇宣長云、和名抄に朱櫻 瀬波佐久
良とあるは加の字落たるにて、かには櫻也、かはさくらといふは此仁
文字をはぶきたる也、拾遺にいへることをも考べし 〇かは櫻を
花櫻のこと、みたるはいかに「源、幻」八はかの花は一重ちりて八
重さく花櫻をかり過てかはさくらとはひらけ藤はおくれていろつみな
とて有て花櫻をかは櫻をならべてあげたりとら黄がちなる花のさ
くといへるにや六帖にかはにはさくらと花さくらとをいふとあげたり 〇
徹書記物語にかはさくらとていふことあり

かはき…かはぬ

かはみ…かはせ

六百二十八

かはぎり 川霧「壬生三品中」「秋かきもみちはなかるたつたがは川霧はら山おろしの風「千載、冬、定頼」「朝ぼらけ宇治の川ぎりたえくにあはれわたるせ、のあじろき」

かはきぬ 皮衣「枕、八、三」「むづかしげなる物うちまたつかぬかはきぬのぬひぬ「源、初音、十三」「だいのあざりの君の御あつかひし侍るてきぬきも、あぬひ侍らななかはきぬをさへてられたし後きむく侍と聞え給ふ「多武峰少将物語」「夏なれど山はさむじといふなれば此かは衣を風はふかせん「和名抄、十二、十八」「説文云裘和名加波古路毛俗云加波波皮衣也」

かはせし 川岸「夫、廿八、後京極」「つなでひく竹の下道霧こめて舟ちまよふよこの川きし」

かはゆし 或人遊仙窟可愛語中の聲もある可愛の字にやといへる假字たがへればしかにはあらじ「撰集抄、一、三」「物にくるふとて見る同朋もあり又かはゆしとて見ぬ人も侍りけるぞかや「同、二」法勝寺の邊に寒くかはゆげなる食にき物くれて我身はたあはせなる物はかりきりか入りけり「發心集、七、廿二」「まぢかく見ん事もかはゆき様なれば「今物語」よしなき御使をしてかはゆき事を見つるよ「盛衰、五、廿三」「眼前に細つくる事はかはゆくや思はれけん「同、八、六」首をはね奉るもまよすがにはかはゆくや思ひけん「徒然、廿八段」年老たる法師の小わらほの肩おさへて聞えぬ事もいひつゝよろめきたるはかはゆし」

かはみづ 川水「六帖、三、八」「みよしの、大川水のゆほひかにあらぬものゆ系波のたつらん
かはしま 川島「夫、廿七、知家」「川島のまごこにたてるしら鶴の箱のつはまごこしふりぬらん
かはじり 川尻「土佐」なにはの津につきて川じりにいる云々けふ川じりに舟いりなちて「大和、百四十七段」亭子のみかど川じりにおはしましにけり
かはしら 蚊柱「拾遺、上」「草ふかきしづかふせやの蚊はしらにいふ煙をたてそふるかな
かはもり 川守「夫、十、花園左大臣家小大進」「七夕の天のかは守心あらはかへさわたすなかさぎのはし
かはせ 川瀬「後拾、秋上、大炊言信母二、あけぬるか川瀬の霧のたえくに遠方人の袖のみゆるは「後拾、雜三、圓法法師」明ぬなり加茂の川せにちぎりなくけふもはかなく、れんぞらん「萬、十、廿六」「あまの川こそわたりはうつろへは河瀬をふむに夜ぞふけにけり。「新撰拾、雜夏」「なごむてふ川のしるもみたらしの川のせきま夏はらへかも「萬、十九、十二」おちたぎつなかるままたの河のせにあゆさほしり「石清水歌合、五番、知家」「明わたる川せの波にたつけふりやがてもふかく霞そふかな「拾、秋、實之」「秋風に夜のふけゆけは天の川かはせに波のたつるこそまき
かはせうらう 川道遙「古、秋上」「秋たつ日うへのをのこも加波

の川原にかはせうらうしけるもまかりてよめる

かはす 交「源、葵、十」「かゝるなからひは情かはすも物をもおぼつたらぬを「榮、御著、九」なまげをかはしめだうかひある御なからひなり「源、若紫、四十五」女の心かはしける事をおしはかられぬべくはよの常なり「同、玉藻、三十」猶さしめる心かはしはせむのさありけんよかりけれの給ふは「同、源、木、廿二」心をはせむのさありけん「同、相模、十二」かのみより外に又この心をはせむ人こそ世に覺えぬ「同、玉藻、九」おなじ心にいひかはすも「同、桐葉、十八」はねをならむ枝をかはさんぞちぢせ給ひしに「夫、十、師光」「あまのがはたえぬ契りのわたりもちはねをかはせる鶴のはし「夫、二十五、家集、西行」「清見湯沖のいはこすしらなみに光をかはす秋のよの月「源、夕顔、四十」打やしたりつるさうちかはし給へりしが我くれなるの御ぞのさうれたりつるは「千載、戀四、實家」「わびつ、はなれたに君が床なればよきはせぬはのまぐらなりも「源、桐葉、廿二」辨もいひかはしこきはせにていひかはしたるこそいもなん興ありける「伊勢物語、九十五段」常に見かはしてよはひわたりけり「源、若紫、上、七十七」紫を明石をたいの上はまほならぬごもこかはし給ひて「同、源、木、四」はらへにつけてかきかはしつゝも見侍りなん「同、源、木、廿二」常にかきかはし給ふはわが御手にいひてかく似て「萬、十七、四十四」月たははらもかはさす云々「源、包、十二」わかきうち思ひかはし給つべき人のままになん「同、源、木、廿九」哀れなる文也をつくりか

かはす 俗語のマウニのころ「古今大歌集」「まごこくのあなしのゆまの山びと、人もみるかに山かつらせよ「萬、十、廿」「うれたさやしこほと、き、今こそは聲のかるがにきまきまよまめ「家持、十、萬、十」「夫木」「まごこくまきまき開けぬ梅花よし此頃はしか「い、万、かく」「夫」「あまのかに「ね、萬」「古今」「六帖、四」「なぐなみた雨をちぢなん涙川水まきりなはかへりくるかに「朝恒、下、廿二」「老ぬればかし

かはす

かに

六百二十九

らば白く卯花を折てかざらん身もまがふかに「元真四」ほろ、さす
 去年の初舞あかざりし人のきくかまにまづもなかなん「曾丹」をこ
 れを親のつけてし名にしおは、猶よしたと人も見るかに「萬四」
 卅一「我ちをのふかけ草のしら露のけぬがにもおほほゆるか
 も 此詞は秋原廣道がてにをば系辭辨に例を多く擧げていへる
 が如し「玉葉」一、花山院前内大臣「春霞なほたかかせかゝる山こ
 えゆかりのみちまふかに〇「玉緒線分」附、卷廿六丁又波、卷四
 十七に論あり見合すべし

かほにほふ 「古」貫之、九「人はいさ心もしらすやるとは花ぞむ
 かしの香に匂ひける

かほにのめ 「源大府行宗集」うちにて大夫のすけのあふきのかのめか
 ためてもくつかはすべし「かほにのめのはなる、たびにいとくしく君かこ
 こころのうしろあたや

かほにもり カモン也 「令義解」一、十、十三内掃部司、正一人掌
 供御、麻、藤、席、薦、簾、菅、鋪、設、及、蒲、關、葦、等、事「古語拾遺、六」
 天祖彦火尊、海神之女豐玉姬命、生彦瀲尊、誕育之日
 海濱立室于、時掃守、連、遠祖天忍人命、供奉陪侍、作掃
 掃、盤、仍、堂、鋪、設、遂、以、爲、職、號、曰、盤、守、今、俗、謂、之、掃、守、
 者、彼、詞、之、轉、也「建武行事」一、かほりの女婦ももわがしくいそぎ
 も、のへたる

かほ 顔「和泉式部集、上」何のためなれる我身といひかほにやこ

ほなる虫のこまへく「源、権木、四十」をかほしと思ひながらうらけけり
 なるうら見顔に打らるるこまへく「源、朝顔、廿」扇をささげて
 うらけ顔をかしげなり「天、十六、定家」白菊のちのらほのこまへ
 顔に春は風をうらみける哉「後拾遺、五」内にも御覽せよ
 と覺し顔に歌みつゝまづけられたりける中「源、橋姫、廿一」せむら
 き顔にはあふまごちかほにぞてまづかくれぬるけはひはら
 「源、若菜、上、百」われもおもひに思ひ顔なる中に「源、橋姫、十」思ひ
 及び顔なるんはかたはひだけれ「源、権木、四」まづ顔ならん夕々
 れなごのこまへ見所はあらめ「源、後、故郷、思房」世をこまへまづり顔
 なき身にすれば故郷人に見えまづまかな「夫、十九、定家」冬の
 木の霜もたまらぬ山風に星の光りのまきり顔なる「朝大、柳」青
 柳の糸はみまりの髪なれや吹くる風のけづり顔なる「和泉式部集、
 上」あははにもみゆるものかな玉たれのみすかし顔はたれもかこるな
 「六百番、春、十九、有」春くれはなびく柳の友顔に空にまかふや遊
 おいでゆふ「伊勢物語」夕されはいとひがたき我袖にやまると月さ
 める、かほなる「源、後、秋下、成實」よをかさね身にしみまると秋風
 を恨前にも衣打哉「同、秋中」おく霜のあたの大野の眞葛原恨
 顔なる松むしのこまへ「同、同、同」名にたて、秋のなかはをこよひを
 と思ふかほなる月の影かな「同、春下」よしの川いほでうつるふ山吹
 に春の目敷をしる顔なる「同、十二、戀」こひくくあふ夜の夢を
 うつゝこほし顔なる鐘の音「同、一、哉」宗子「うらむらむら

ももの、なげかしき哉「源、末摘、五」まらうごのこんと侍りつるいとひ
 顔にこそ「源、朝顔、十五」いとひ聞え顔ならんもいかいて「伊勢
 物語、廿三段せんざいの中にかくれるてかうちへいぬるかほにてみれば
 「源、若菜、上、九十」ひじりたち此世はなれ顔にもあらぬ物から「夫、春
 二、六帖、二、伊勢」驚のなくねをまねふ山彦を友あり顔にもとめつ
 る哉「夫、戀、廿六、後京極」吹風も物や思ふとこひ顔に打なかわれ
 は松の一聲「源、太、室」雨風にあれのみまざる野寺には灯がほに
 盤をびかふ「源、須磨、十三」女君のこき御をにうつりてにぬる、か
 ほなれば「古今、戀五、伊勢」あひにあひてもの思ふ頃のわが袖にやま
 る月さへぬる、顔なる「夫、廿六、言語、四行」女郎花池のさ浪に枝
 ひちて物思ふ袖のぬる、かほなる「源、奥、廿八」をりしり顔なる時
 雨打を、きて「夫、十五、六百番、戀」出ぬる時雨の宿かは、そ
 はらわがもの顔にいろのみゆるん「源、手習、廿八」かくし顔ならんもあ
 やしくて「今物語、十二」かほ顔にかたりければ「夫、十六、多野院入道
 二、源、王」霜がれの秋のはさき夜ふりつけ顔にてそ冬はきにける
 「後拾遺、上、中納言女工」人しれず物をも思ふ秋秋のねたるがほに
 て、露をこぼる、「源、若菜、下、九十九」ふるめかしき御身をまにてたち
 ならひ顔ならんも「源、深舟、十七」ちかうよりて御せよぬきなれ顔
 に打し給へれば「源、御幸、十五」人の御こになびき顔にてゆるし
 てんと覺す「源、野分、九」うれ顔なる庭の露さらくとして「夫、十
 四、正治二年大藏卿長房」あはつ野のまづが原の夕くれにうらみか

れど君がよこへにしらすかほにてつれなかるらん「元真」春來ぬと
 まづらんがほに露のまつらん顔にかり出つゝなく「長明」する墨を
 ももがほにのめらふかかたかひなしと潤もゆる「大伴家持」を
 りてしるもさゆき顔に梅の花咲か山へをわたるしら雲「朝恒」う
 すくこまへ顔に花をさへはひと顔にみえわたるかな「和泉
 式部集、上」露ほとらうしるめたなき花のうへを思ひかほにまか
 つるかな「同、下」ながめつゝこまへがほにてくらしめてかならず夢の
 みえはこそあらめ「源、権木、五十六」さりとて心かはし顔にあしらは
 んもいとつゝ、ましく「源、若菜、上、八」さやうの筋にやと思ひよれど
 ぶと心得顔にも何かはいら聞えせん「夫、十四、家集、四行」こよ
 ひはと心得顔にすむ月の光きてなす菊のしら露「源、竹川、廿八」心
 よせあり顔にまてなして「同、早慶、六」人々は心ゆき顔にいそぎ思
 ひたれど「夫、十三、西行」つれなく、涙おとさぬ人もあらじ 心見が
 ほにすめる月かな「源、松風、十六」すみなれし人はかへりてたれど
 も清水を宿のあるじ顔なる「夫、廿七、土御内大臣」昔の庭道ふ
 みわけし跡もなしねふるたづのみあるじ顔にて、狭、四、中、廿三、人め
 まれにてとがむる人もなし 雪はかりあるじ顔にてふりつみたる庭の
 おもはるくこ心ほそけなるを見わたし給ふに「夫、十六、定家」風
 さむみほの浦邊をこ舟に山の木の葉のまほひがほなる「源、深
 標」おとこも、御けしき聞顔にはあらで「同、夕霧、六十四」何かは
 聞顔にもおほいて「同、若菜、下、十六」昔にのみ秋をさかひがほなり

「枕、七二」耳な草となんいふといふ者のありければうへなりけりま
かぬ顔なるはなき笑ふに「枕、四上、四十三」文はわざとの使奉り給
はんもさしるひ顔なるければ「源、蜻蛉、十七」けしきのいさ、かみた
り顔なるを「新六、六、光俊」「まさのをなさしたる事のありがほにた、
くくひ草の人おろかす「和泉式部集下」「おともせて秋の過ゆくと
しこにたるとももともしこ顔なり「源、紅葉賀、五」空のけしきと
見しり顔なるに「同、帯木、四十九」しひて思ひしらぬ顔に見けつとも
かにはほしとらぬちうに覺すらん「同、須磨、初、せめてしらす顔にあり
ても「枕、六二」いとにけなる娘も持たりともこそ見侍れなきの
給ふ御けしきいとしたり顔なり「源、御法、十五」あなかまはしとし
づの顔にて「夫、十四、永久二年、讀人しらす」「風にあへずしをる、の
の草のはさもさ顔なる庭の菊かな「源、桐壺、十四」草むらの虫の
聲々もほし顔なるも「大卅六、忠、長歌、あしたゆらふにあらはれ
て聞ゆることぞをくるにひにめて出顔にうつるひにけり「源、手習、廿三」
あながちにすみはなれ顔なる御ありさまに「同、夕暮、七十三」かくせめ
てすみなれ顔つくり給はほし「右京大夫集、卅三」まよひ入し戀ぢく
やしき折にしもすめ顔なる法の聲かな「新六、六」夕日さす岡
の松の下つしとほは木がほに花さかりなり **かは**「源、野分、廿一」
見つる花の顔をも思ひくらへまほしくて「拾遺、別、讀人しらす」
「櫻はな露にぬれたる顔みればなきわかれ人ぞ戀しき「源、須磨、
卅五」月の顔み守らせ給ふ「夫、八、古寺雪、定家」「うつしける月の御

影は光りあひて軒のあれまほつる白雪「竹取、十」まづ紙そくまじ
てこの貝面見んと御としもたけて御手をひろげ給へるにつはぐ
らめのまりおけるふるそをにぎり給へるなりけり「後、四下、四十八」
かはになみたのとりもあへずほろくともほれか、れは神を顔にふた
きてきたに見奉らぬに「給はぬに「古」」「枕、九、五」曉かうし妻
戸なをおしあけたるに風のささ吹あたりて顔にしみたるをいみじ
うをかしかれ「同、七、一」めでたき御さまをいふ所に誠にこぼるればけ
さうしたる顔昔あらはれていかに見ざるしからん「源、空蟬、七」か、
るけはひのいとかうはしく打匂ふに顔をまたけたるに「後、四中、廿六」
君は誠は物おそろしくて顔ながら引かづきて「かくして「古」」「給
へり「雜略紀、六」見采女面貌端麗形容温雅」顔かはり。顔
つきの類別に出す「玉葉、感、定家」「こひわびて我とながむる
夕ぐれもなるれば人のかたみ顔なる「拾遺、中」「あはちかたゆき、の
舟のさも顔にかよひなれたる浦千鳥かな「山家」「風雅、春下」眞管
おふる山「あら、風」田に水をまかすればうれしがほにもなく蛙かな
「月詠、九、法眼實快」「くれて行秋のみそちをながむればなごりかはな
るあり明の月「萬代、感、舞、明のさつねはいとひしりのねの
ひりりしぬればまたれがほなる「同、白、小命、廿九」夕月夜なぞがれ時
のほろ、きまのりがほなる聲ぞきこゆる「同、秋上、尙侍家中納言」さ
ならでなげかぬ時のありがほに秋とちわきもの、かなしきま

窟云面加保波世

かはばな 眞淵が説におもたかにやといへり「萬、八、五十二」高ま
ごのこの容花おもかげに見えつ、妹はほすれかねつも「萬、十、五
十六」石はしのま、におびたる貌花の花にし有りありつ、見れ
は○契説、かは花はたつづつしき花をいへり、或云朝がほ夕がほ
なごのまにほめていへる也

かはどり

かは花をまじへん、たうづつしき鳥をいふなりとぞ「萬、
三、三十六長歌」谷鳥のまなくしはなく雲をなす心にさよひその鳥
のかた戀のみぞ「萬、十、六帖、六」かは鳥のまなくしはなく春の野
の草のねしげき戀もするかも「六帖、六」夕まれば野になくそふか
ほ鳥のかほに見えつ、わすれられなくに「夫、廿、廿、家集伊勢」音羽
山木の下かけにかほ鳥のみえかくれせし聲のかなしき

かはる

かはる 蕪、新撰字鏡萬葉集によらばかはるとはかくく今昔
通の假字にしたがひて出しつ「東遊歌、弓立歌」いせしよあまのこ
ねらかたくほのけおけくたくほのけいそらがさきに加保利安不於
介云々「新古、春上、康資王世」梅ちらす風も越ても吹つらんかはれ
る雪の袖にみたる、「源、冬顔、五」御袖の匂ひも云々かはりみたる
に「詞花、春、花園左大臣」にはもせにつもれる雪を見えながらかはる
ぞ花のしるしなりける「源、未摘花、十六」まひのかいもなつかしうかは
り出て「源、宿木、九十八」人のとがめつるかはりをちかくてのぞき給
ふなり「式子内親王集」けさみつる花の木末やいかならん春雨か

ほる夕ぐれのそら「萬、二、廿六」おきつとも、なびきたる浪に馳けのみ
香平禮流國爾「或云、此乎は本の誤りならんといへり、ツヤノ光
リライフ」字鏡、五十三、分、利也調也秀美加乎留「源、薄雲、七」
つらつたまみのかはれるほろとぞ「源、楠、廿九」口のうらつらみてまみ
給へるかはりうづつしきは女にて見奉らまほしうさうなり「源、結
角」人の御けはほ思ふやうにかほりをかしかけなり「源、栞木、三十」やう
はなれてかはりをかき顔まじり「源、横笛、十八」まじりのちぢめを
かしかはれるけしきまじり「夫」かはらずは誰かしまじり梅の花白
月山の雪のあけほの

かはがはり

かはがはり かはれる顔「源、鶴所、九十三」ねをのみなき日數へに
ければ顔がはりのしたる。見ざるしはあらで「拾遺、戀五、讀人しらす」
「あさまじや見しかたに思はぬにかはらぬ顔ぞ心なりとぞ」

かはかたち

かはかたち 「源、東風、八」もはら顔かたちのすくれたらん女のねがひ
もなし「同、句當、十」顔かたちをこはかといつこなんすくれたる

かはかほな

かはかほな 「散木、野徑寒草」みちがら枯野になたるかはか花
かりかかみも霜おきけり「かははなの江に引合せ見るとし」

かはよどり

かはよどり 「夫、廿七、千五百番」むこ川に跡をこめぬかはよ鳥な
く日もみえぬ五月雨の頃「萬代、家隆」山川のめぐひにかよふかは
よ鳥かつ見るたびに音をのみぞなき

かはよし

かはよし 「百文、二、三」悦日即爲妹カトコトメ「萬、十四、十三」たこの
ねによせつなはしてすれどもあはにくせしつそのかはかほり

ふ燕かななれさへ秋の風やかなしき

かへりかへり「加茂社歌合、十二番、頼政」風やかはかへりかへり
よ櫻はなはかめももも枝にこそりし

かへりたち「抄」昔は南祭に還立なく賀茂計に有し由云圖
抄にあり「抄、七、廿」賀茂の臨時の祭はかへりたちの御かたち
にこそなまめらるれ「右京大夫某、廿三」あんげんといひしはじめの
しの冬うんじの祭りに云々「さし」心にしむかへりたちの御かたち
えみざりし「續詞花、七、冬の賀」祭に藏人にて舞人して侍りけるを
返立に入道攝政おまへにさむらはせ給て祝歌つかまうれとせめ
仰せられければかへりのあるじ「下」かへりのあるじの下に注
す「後撰、雜二」のり月のかへりたつたのあはれ「源、竹川、四十四」兵部
卿宮左のおほいさのり月のかへりたつたすまひのあはれ「源、
おはしまし

かへりたる湯「湯のニエカへりタル也」源「源、松風、十九」かへりたる湯を穴
の口にくみ入たりける「源、

かへりなる「還任にて再び本の官に任ずる事也」源「源、松風、十九」
かのとけたりし人もかへりなりけりゆけひの尉にて「續拾、賀」
今上の御元服の時大納言にかへりなりて云々

かへり「散木」時鳥おのね山のしひ柴にかへりうてはやお
とつたるせぬ「顯昭注云、ねもまは一夜山に宿して木をこり
てかへるをねもまといひたり、此山はほろ、まのねたる山な

我をみるらん「源、常木、三」かへりてはかへりてあはれ道はまた
たよむらん「同、同、同、同」かへりて物は「後拾、同、同、同」
「あひまひをうたへて」ももひしはかへりて後のあひまひなりけり
「萬、八、五十三」「手ももまはらうてはかへりては見れどもあ
かすこゝろつゝかへりてなすこゝろ」千、秋上、三、品親王「秋の野の千
草の色はつゝろは花ぞかへりて露をそめける「拾遺、上」また
り花を見ずて、行かりやかへりて春のまをまはしる

かへりては「蜻蛉日記、三」かへりてはかへりてはかへりてはかへりては
出給ひぬらん「源、同、同、同」かへりてはかへりてはかへりては
「源、桐壺、廿二」かへりてはかへりてはかへりてはかへりては
はかへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては

かへりては「源、同、同、同」かへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては

かへりては「源、同、同、同」かへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては

かへりては「源、同、同、同」かへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては

かへりては「源、同、同、同」かへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては

かへりては「源、同、同、同」かへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては

かへりては「源、同、同、同」かへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては

かへりては「源、同、同、同」かへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては

かへりては「源、同、同、同」かへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては

かへりては「源、同、同、同」かへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては

かへりては「源、同、同、同」かへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては

かへりては「源、同、同、同」かへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては

かへりては「源、同、同、同」かへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては

かへりては「源、同、同、同」かへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては

かへりては「源、同、同、同」かへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては

かへりては「源、同、同、同」かへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては

かへりては「源、同、同、同」かへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては

かへりては「源、同、同、同」かへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては

かへりては「源、同、同、同」かへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては

かへりては「源、同、同、同」かへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては

かへりては「源、同、同、同」かへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては

かへりては「源、同、同、同」かへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては

かへりては「源、同、同、同」かへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては

かへりては「源、同、同、同」かへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては

かへりては「源、同、同、同」かへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては

かへりては「源、同、同、同」かへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては

り、かへりうつはかへりななり寝也

かへりまうし「前漢郊祀志」冬春禘祠「注」師古曰春謂報其所
祈也「年中行事歌合、月次祭、宗時」夏のくれとしの終の月ごの
かへりまうしの神のみて「源、玉葉、廿四」三條らも随分にかへり
かへり中はつかうまうらん「長能集」かへり國の神宇にかへりまうし侍
りし「源、同、同、同」おなじ群行の長奉送使にまかりたり
てかへりまうしの曉女房の中つかはしける

かへりまうし「古今、春下、賀之」ひたはのほりてかへりまうし
める云々「同、離別、幽仙法師」山にのほりてかへりまうし
かれけるついでよめる

かへり「神紀、下、二」不「源、末摘、十」文などやりた
まふといづれもくかへりて見えず「源、初蝶、廿四」御かへり
を聞えらん人目あやしければ「萬、十九、四十二」たひらけく早わ
たりきて還事をなした目に相のま酒をこのまみまは「兼盛、我
戀にたぐりてちり玉しひのかへりてまほの久しき

かへり「源、同、同、同」かへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては

かへり「源、同、同、同」かへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては

かへり「源、同、同、同」かへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては

かへり「源、同、同、同」かへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては

かへり「源、同、同、同」かへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては

かへり「源、同、同、同」かへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては

かへり「源、同、同、同」かへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては

かへり「源、同、同、同」かへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては

かへり「源、同、同、同」かへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては

かへり「源、同、同、同」かへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては

かへり「源、同、同、同」かへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては

かへり「源、同、同、同」かへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては

かへり「源、同、同、同」かへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては

かへり「源、同、同、同」かへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては

かへり「源、同、同、同」かへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては

かへり「源、同、同、同」かへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては

かへり「源、同、同、同」かへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては

かへり「源、同、同、同」かへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては

かへり「源、同、同、同」かへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては

かへり「源、同、同、同」かへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては

かへり「源、同、同、同」かへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては

かへり「源、同、同、同」かへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては

かへり「源、同、同、同」かへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては

かへり「源、同、同、同」かへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては

かへり「源、同、同、同」かへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては

かへり「源、同、同、同」かへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては

かへり「源、同、同、同」かへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては

かへり「源、同、同、同」かへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては

かへり「源、同、同、同」かへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては
かへりてはかへりてはかへりてはかへりてはかへりては

かぶた 門田 山家集下「庭にながす清水の末をせきめてかぶたをたしなぶ頃にもあるかな源、手習、十九門田の稻かるて「夫、七願輔」色おかく門田の早苗なりにけりいそげ賤の男ふしもこそたて「萬、八、四十六」いもか家の門田をみんもうち出こし心もしるくてる月夜かも「天、十二、經信」霧はる、門田の上のいなはたのあらはれわたる秋の夕かせ同、九、藤原伊弉諾朝臣」夕日、す門田のいな葉雨過ておきしく露を秋かこそみる

かぶた 門田 山家集下「庭にながす清水の末をせきめてかぶたをたしなぶ頃にもあるかな源、手習、十九門田の稻かるて「夫、七願輔」色おかく門田の早苗なりにけりいそげ賤の男ふしもこそたて「萬、八、四十六」いもか家の門田をみんもうち出こし心もしるくてる月夜かも「天、十二、經信」霧はる、門田の上のいなはたのあらはれわたる秋の夕かせ同、九、藤原伊弉諾朝臣」夕日、す門田のいな葉雨過ておきしく露を秋かこそみる

かぶた 門田 山家集下「庭にながす清水の末をせきめてかぶたをたしなぶ頃にもあるかな源、手習、十九門田の稻かるて「夫、七願輔」色おかく門田の早苗なりにけりいそげ賤の男ふしもこそたて「萬、八、四十六」いもか家の門田をみんもうち出こし心もしるくてる月夜かも「天、十二、經信」霧はる、門田の上のいなはたのあらはれわたる秋の夕かせ同、九、藤原伊弉諾朝臣」夕日、す門田のいな葉雨過ておきしく露を秋かこそみる

かぶた 門田 山家集下「庭にながす清水の末をせきめてかぶたをたしなぶ頃にもあるかな源、手習、十九門田の稻かるて「夫、七願輔」色おかく門田の早苗なりにけりいそげ賤の男ふしもこそたて「萬、八、四十六」いもか家の門田をみんもうち出こし心もしるくてる月夜かも「天、十二、經信」霧はる、門田の上のいなはたのあらはれわたる秋の夕かせ同、九、藤原伊弉諾朝臣」夕日、す門田のいな葉雨過ておきしく露を秋かこそみる

あぐ、かれそむるかぢなりけり〔夫、十五、國信〕「色々の木の葉たむけて秋はけらく田の森にかぢなりけり」〔清輔集〕〔夫、卷二〕「片岡に谷の霧かぢにしてはかぢはほして口するむなり」〔夫、廿六、關月戀、後編〕かぢたててみづきになりぬこれちよは心づくしのかぢなるらん〔新勅、神教、安藝〕「さほりなく入目をみても思ふかぢこれこそ西の門出也けれ」〔萬、廿、廿三、長歌〕「さよそひ門出をすればかぢめ」かぢあるかぢかぢと同じ〔源、若菜、上、廿四〕物のみぢはかぢかぢめ給る人にて〔同、末摘〕「らうくじうかぢめいたる心はかぢなり」

かぢひ 〔和名抄、十四、十八〕門燎周禮云、喪設三門燎、俗云門火

顔氏家訓云、喪出之日門前燃火

かぢひるく 門廣也。〔河海〕に干公の事引せたまふは誤也。一門の多くなり繁榮するをいふ〔源、幻、十八〕夕霧の御子たちの多き事をいふは門はひろげ給はめなむの給也〔源、源實、廿二〕かぢひるくも猶此門ひろげを給ひて侍りなりな後にもかぢひるくを給へなむ聞え給ふ〔竹取、二〕此世の人は男は女にあふ事をす女は男にあふ事をす其後なん門も廣くもなり侍るいかにては事なくはなほはしめ給ふ

かぢもり 御門もり〔御門式、八丁〕門衛〔源、朝願、十二〕御門もりもいふなるははひ〔和名抄、二、九〕文字集略云、關音音聞人、和名美加止、毛利守門者也

かぢすいみ 〔夫、九、若菜、二〕しづの男がふけくちみの門すいみこのもしからぬまをむなりけり

かぢ 楊 〔源次、關月戀〕〔夫、廿二、仲實朝臣〕かぢそむるしかまのみそ

のかれはて、あひ見でさぎし神な月かな〔夫、廿一、範宗卿〕君か代はしかまの市におくかちの千とせをへても色やまきさるん〔同、同、如願法師〕秋くれはしかまの市にほすかちの深きらるなる風の音かな〔同、廿三、布中務卿のまこ〕「しかまなる市女がもてるかち布の色かかのみ人をこひつ、」〔萬、廿三、後成〕「しかま川逢瀬もいつとちぎらぬにあながち人のこひしかるらん」

かぢ 歩行 〔萬、十三、廿五〕さかづまのかちよりゆけは〔同、十一、七〕〔拾遺、雜戀〕「山科のこはたの山を」里に〔拾〕馬あれどかちより香く汝を思ひかねて、ぞぞる君を思へは拾〔源、夕顔、廿四〕君に馬は奉りてわれはかちよりく、りひきあけなきて出たつ〔同、玉葉、十七〕こゝろをさかづまのかちより定めたり〔榮、花山、十四〕いかに花山迄道をしらせ給ひてかちよりおはしましけん見奉るに〔後、三、下、十二〕物見の所にすてかちの人かしたるいづべうもなきにかしこく身のならんちやうもしらず同じらにかななりたるまにまにわびしけ也〔伊勢物、六十九段〕かち人のわたれたれわたれたれば〔夫、廿五〕白妙のなからぬの瀬の霜の上にあはれたかななるけさのかち人〔後、四、下、廿五〕此ほきにも立こみたる物見車をもかち人をもこちたきまておほかり〔夫、廿一、千五百、後京極〕かち人の道をぞ思ふ山しなのこは

たの里の秋の夕霧 〔散木、下、廿七〕「しづのこほる諏訪のそなりのかぢわたりのちをけられぬ世にもあるかぢ」〔夫、廿四〕「現、六、信實朝臣」

「かちわたりやすの河よも行駒に浪もせし」の五月雨の頃〔秋、二、八〕あやしき女だに云々ははじめつかたはかちありまると人はなかりきなまのまかぢはつゆのうさくさなはかりしてさあめあめひらいてこそありしかされも物まづはさきせし説經がまはらにむかへもなかりりり云云〔同、十二、三〕かち路もまたいふもさつてはなほされはらかぢもくつちにつまはれたはらたのもしとちもさち〔平家物〕大覺寺より六波羅までかちはたしにさそむりたる

かぢ 櫓 萬葉には舟の櫓を櫓とみ、今櫓といふ物をはよま、八十櫓、二櫓、櫓の間なくさよめゆる皆櫓なり〔和名、十一〕櫓和名加羅使、舟捷疾、也兼名苑云、櫓一名燒也〔萬葉類林、四〕集中例、櫓を力手とあり、るといふは和語ならねは共に力手と稱しけるなるをいふ〔萬、七、十二〕「さよよけて堀江こなる松浦舟かちの音高しむははやみかも」〔夫、十二、家集、惠慶〕「雁がねはみはねの山やこゝろらんかちかたりと天つ聲する」〔同、廿三、後九條内大臣〕「いそがでや櫓ひきをりて舟人もあすになるさの汐やまつらん」〔同、同、借實〕「さよよけて枕をたのむなはたにおきながらななかもありける

〔同、同、萬、十一〕「青波に袖をぬねてこく舟のかちふるはほに小夜ふけなんか」〔同、同、六帖、題とまり舟衣笠内大臣〕「湊江にかちふりたつる泊りふねなかる、迄に汐はみちまきぬ」〔夫、廿三、後成〕「いそがく

れまかぢしげぬこく舟のはやうき世をはなれてかぢ〔同、同、新六、四、光俊〕「波たてるぬの追風はやければまかぢしげぬわたる舟人」〔夫、廿二、爲家〕「あはしまをわたる舟のかちかぢのかちかちかち世をしなれてさる」〔後撰、戀、二、黒主〕「白波の上するいそまをこく舟のかちぢりありぬ戀するかな」〔夫、廿一、高遠〕「島つたひとわたる舟のかち問よりさつていへなれたかたまの橋」〔同、廿三、後鳥羽院〕「風はちみ沖こく舟のかち問にもわたる、問なる世々の故郷」〔同、廿三、爲家〕「契りこそゆくもしらねゆらのをわたるかちかの又も結はで」〔源古、雜中、人丸〕「さよよけて堀江こなる松浦舟かち音たかしみをはやみかも」〔堀太、後、顯仲〕「見るあかるあまの宮やのかち柱はしうらみぬまのまをなし」貞徳云、カチハシラはたいカチをいふ云云〔新古、雜中、小町〕「すまのあまの浦こく舟の櫓をたえよるなまき身ぞかなしかりける」〔萬、二、四十一〕ゆく舟の櫓引折而〔萬、六、長歌〕「われはこく船櫓をなみ」後撰、雜中、小野小町「あまのすむ浦こく舟のかちをなみ世をうみわたるわれぞかなしき

かぢ 楮 今カツツとよぶ物也〔和名、廿、廿三〕穀玉篇云、楮、穀木也、和名加知〔古語拾遺、二〕穀木、種殖之、以作白和幣〔新古、秋上、後成〕「たなはたのわたる舟のかちの葉にいく秋かきつ露の玉づる」〔夫、十、嘉元元年、入道前太政大臣〕「かきつくる櫓の七葉の思ふこと猶あまりある秋の夕ぐれ

かぢ 加持 〔源、若菜、六〕「かぢなを参るほき日たかくさしあがりぬ

〔同、楓柱、十六〕かぢ参りをむく。〔同、手習、十四〕夜ひと夜かぢし給ふる〔榮、初花〕御物のけさもまほしくかりうつしあづかりくは加持しのしじ。

かぢ 鍛冶〔和名、二ノ八〕鍛冶四聲字苑云鍛冶打ニ金鐵ニ爲リ器也俗云鍛冶説也〔枕、六ノ十〕あづける物六七月の云々又おなじ頃のあかぬのかぢ〔宇津保吹上、下、卅三〕こはしるかねかねのかぢ廿人はかりるてよるづのものがまかりひつなづける。

かぢ 〔和名、廿〕周易説卦云其於木也爲堅多心師説多心説奈賀古可理。〔是多の字を訓せり。其物の多きを他物の其所に多きをいへり〕人かぢ 心の部〔源、須磨、六〕大貳は云々いじめし類ひろく娘がぢにて〔同、少女、五十五〕御ぜん四位五位がぢにて六位の殿上人などはさき限りをえらせ給へり〔同、桐葉、初〕物心ほげに里がぢなるを〔狭衣、三ノ下〕若宮に事つけ給ひて殿がぢにのみなり給ふを〔源、手習、廿六〕かよひ給ふやうなれど心もいじめ給はす親の殿がぢになん物し給ふとそいふなれ〔狭衣〕常かぢにおはしついでいよいよすみなれ給ひたれば〔同、夕顔、二〕小家がぢにちづかひけるわたり〔枕、六ノ七〕正月に寺にこもりたるはいみじく寒く雪がぢに氷りたることをかひけれ〔同、五ノ六〕五月の御ざうじのほせ云々朔日より雨がぢにてくもりくらすつれづれなるを云々〔源、蓬生、十六〕雪霰がぢにて〔枕、七ノ十一〕桃の木わか

だつていとしもかぢにさしいたる〔狭、三ノ上〕深き谷よりおひ出たる木まの根の若がぢに打物よりたるけしき〔枕、九ノ九〕うつ木垣根といふ物の云々花はまたよくもびらけはすつばみがぢに見ゆるを折らせて〔同、九ノ十三〕つかひかためたる筆をまやしのやうに水がぢさじぬらして云々〔同、十二ノ七〕きぬがぢに袖口あつく見たたるが馬にのりていひまに云々〔源、若菜、上、百二〕御くしの云々そがぢに形のいほせくさるやかにて〔枕、三ノ七〕冬の直衣の着にくまにあらんうらのきぬがぢにて〔抄〕よの常の束帯には袍に下かさねあり是は袍に下裳を除て指貫なるし是を衣冠といふ也〔源、須磨、四十五〕ゆるし色のきがぢなるに云々打やつれて〔同、蓬生、五〕くづれがぢなるめりりの垣を〔同、松風、七〕み拾がたきはまのまを父はえしもかへりかしてよする波にそへて袖ぬれがぢなり〔枕、十二ノ八〕見ざるしき物ひげがぢにやせくなる男とひるねしたる云々〔源、末摘、廿五〕猶もがぢなるおもやうは〔同、葵、五十一〕およすけて御笑がぢににおはするも哀なり〔同、夕顔、五〕すゐるに涙がぢなり〔同、空蟬、二〕ながめがぢなり〔同、葵、四十五〕いとつれくにながめがぢなれど〔同、若菜、上、五十五〕なげきがぢにて物し給ふけしきなす〔同、御法、十〕まはるは身にしむかはり覺ゆるさき秋風ならねど落けき折がぢにてすくし給ふ〔同、葵、廿九〕かたはらさびしくて時しもあれをぬりかぢなるに〔同、楓柱、十六〕かかき年頃となりては御中もたたりがぢにて〔同、夕顔、五十三〕物ほめがぢなりと〔同、若菜、五十二〕人もう

らみがぢに〔同、浮橋、廿七〕御行ひがぢになり給ひて〔同、若菜、四ノ下〕かへりみがぢにて出給ひぬ
かぢどり 榧取〔和名、二ノ十〕榧師 和名加知止利〔土佐日記、上ノ五〕かぢどり物のはれもしらで〔萬、七〕浪たかしくいかに榧取水鳥のうまねをよまほほほほとよき〔夫、廿六、行家卿〕こぞここのつしまのわたり浪あらしくいかに榧とり心ゆるすな〔附、かんざり〕〔枕、八ノ三〕えせ物の所うるわたりする折のかんざり〔主税式、廿一〕挾抄〔續紀、卅、廿二〕挾抄〔景行紀〕遠視火光天皇詔二挾抄二曰直指二火處一
かぢを 榧緒〔新古、戀二、好忠〕ゆらのとをわたる船人かぢを〔緒〕たを行へもしらぬ戀のみちかな〇〔松屋叢考〕二云〔藻鹽草〕宗祇かぢをたえは榧の緒の切たるなり。〔狭衣〕かぢをたえいのちもたのしむせばは涙のうみにしづむ舟人〔調度歌合〕うらなし「かぢをたえはなをさしぬらしせばは舟さしよする浦かぢにして〔夫木、爲家卿〕契りこそゆへもしらぬゆらの戸やわたる榧緒の又も結はで〔十、六夜日記〕榧緒絶たる舟に似て云々〔續古、雜中、小野小町〕「すまのあまつらこく舟のかぢをたえするべなき身ぞかかしかりける〔新千、雜中、公明〕「久方の月のかつらのかぢをたえはけてもわたる天の川舟〔玉葉、雜二、土御門院御製〕かぢをたえ大海のはらに行舟のあはとかもなき世をいかにせん〔新古、戀二、攝政太政大臣〕かぢをたえゆらのみなきよなる船のたよりもしらぬ沖つしほ風〔月待、上〕「今はとて

涙の海にかぢをたえ沖にわづらふ今朝の船人
かぢうつなみ 榧打浪〔輔翼〕「おなぢにはかぢうつ浪に夢さめて都のこゝを見せしめるかな
かぢのやまひ 瘡癩〔和名抄、三ノ廿〕病源論云瘡癩俗云加知乃也萬比濁而不ニ小便一也
かぢわざ 榧音〔更科日記〕夜いたうはて舟のかぢおまごの
かぢぐり カチ栗〔著聞、三ノ十三〕節會なにも云々次に又内辨かぢぐりをとりてめすよして懐中し給ひければ人々皆またおなじでいにせられけり
かぢま 榧取間なり〔萬、十八ノ九〕たるひめのうらなをこくらねかぢまにものむきつをわすれておもへを〔同、十五ノ七〕あはぢしきとわたる舟のかぢまにもわればわすれずいへをしおもふ
かぢまぐら 榧枕〔千載、羈旅、俊成卿〕「浦つたふいその〔たびねするあまの〕（たままの）かぢまぐら聞もならはぬ浪のおどかな〇〔美濃家裏折添〕云古屋はかぢまぐらにかなはずいそのうまねなきはなまよきまぐらげん〇廣足按〔散木集〕に伊勢へまかりけるみちにてあのといふ所にてあまの家にとまりてよめる「いせのあまのたまやのこのかぢまぐらあらさなみにめをまじつる、これをおもへはとまよにもかぢまぐらをよめりしなり、そは榧を舟よりとり入ては古屋の中におくものなれば、枕のあたりに榧あらんには、かぢ枕となぞかぢまぐら、又あまのたまは、やがて其榧を枕として、かりねしつて

き也又旅泊によするも、かならず其棍を杖にするはあらず、棍の
あたりに寝たるも、かちまけなるものなるべし

かちまけ 勝負「夫木、廿六、祝、伊正」「つるかめの命くさのちまけ
けを君こそしる萬代をて」「藤、梅枝、三」「句ひのふかあはももか
ちまけのたのめなるしちまけの給よ

かちゆみ カチヨ「和名、四、一、射藝類」歩射和名加知由美「源、若菜、
下、利」小弓の給ひしをちまけのすくられたる上手をもあひければ

かり 狩「雄略紀、九」狩于葛城山「古、雜下、讀人不知」「のこな
らば鶴をなまきりしはへんかりにたはは君はこそぞん「伊勢物語、初
段」奈良の京かすかの里にけるよしにてかりににけり「同、六十九
段」あしたには狩に出して、やり「拾遺、秋」かりにのみ人の見ゆ
れば女郎花の袂を露けかりける「貫之集、上、四十五」かりにける
我ははしとて秋の野になく松むしの聲をきく哉「伊勢物語、四、一」か
りはねんころにもせで酒をのみのみつ、（此狩は宣長説に櫻狩な
るべし）「拾遺、春、讀人しらす」六帖、一、下、兩「櫻狩雨は
ふりさねおなじくはねるも花の下にかくれん「古、秋下」北山に僧
正遍昭をたけかりにまかれりけるにやめる

かり 狩假を兼「貫之集」「花のいろを久しきものとおもはねはわ
れば山野をかりにこそ見ゆ

かり 雁の鳴聲をいふ「萬、十、廿八」雁は玉の夜わたるかりはおほ
ほしく夜をてかおのが名をのる「後撰、秋下、讀人しらす」「あま

をてくれどかこれたのまねを聲にたてつ、かりのみなく**附**か
りかり「同、同、同」「行かりこもかしこも旅なれやくる秋こ
にかりくをなく「同、同、同、六帖」「貫之」「ひたすらにわが思はなく
にのれ、のかりくをのみなき）雲わけてかりぞくをつけ「六帖」
わたるらん「和名抄、十八、八」鴻雁大曰「鴻小曰「雁和名加利「建保
歌合、廿三番」「かりくのゆき、を空にしのぶとて霞を霧にいくへな
がらう

かり 假「伊勢物語」「むくら生てあれたるもこのうれたまはかりにも鬼
のすたく也けり「源、若木、廿六」はしつ方のおましにかりなるやうにて
おほこのこもれば「同、明石、廿八」かりに下りたる人の「同、夕顔、廿七」
此頃の御やつれにまうけ給へるかりの御さうぞくまかへなまとして
「同、未摘、十四」かりにもおほしかよはんをながめ給ふべき人なし

かり 許。云々のもとの意なり「萬、八、廿二」「久方の天の川瀬
に舟うけてこよひか君がわがかり（我許）來まらん（心は同じ、のを添
てま）「拾遺、冬、貫之」「思ひかねいもかりゆけは冬の夜の川
風をのみ千鳥なくなり「伊勢物語、廿八段」昔紀の有恒がかりきたる
に「源、若菜、上、百七」小侍従がかり例の文やり給ふ「同、浮舟、六」文
は大輔がかりやれとの給ふ「榮、楚王夢、廿九」かの故左衛門がかりは後
に物なをつかはしたれば左衛門の内侍いと哀に思ひけり「落葉、
一」「をほの殿原宮づかへしけるが今は伊豆守の女にたりける
かりに文をる「拾遺、夏」家にまきて侍りけるなごしこを人のかりつ

かはしける「落葉、二」今見給ひてんてをよびに出給ひて少輔
のかり文やり給ふ「榮、衣の味、廿四」わがめこのの尼君のかりさしの
まぞかせ給れば「宇治拾、三、廿」供の者二十人はかり具して國司
のかりむかひぬ「同、三、廿三」大藏の丞とかけも名のりてうへなら
ぬ女のかりは御文もつかはしける「徒然、九十段」やすら殿のかり罷
りて候はらむ「和泉式部續集」野老のあをおのかりやるとて「萬、
九、廿三」「つへはねのすそわの田るに秋田かるいもかりやらんもみ
ちたなりな「同、十一、三」あめにあるひとつ棚橋かひでゆくらんわか
くまの妻がかりとてあゆひすらくを「萬、九、廿二」妹等許今木
の嶺にみだててつまつの木はふる人見けむ「秋、三、廿」人のが
りやうたるに「同、宮」かひするかりやうていつしかおほむに「同、四
、六」しりたる人のかりなほはかりにかきてやうたるに「小大君集」云々

あまみつの少將のかりもると云々、人のかりやるとて「同」なごしこを
人のかりやるとて「野崎日記、兼家公」「いへんもわかぬ心はそなた
れごたははまに見ぬ人のかり「和泉式部」冬のはてつつかた雪のい
みじうふる日人かりやると「散木」下庸にこえられてなげき侍りけるこ
ろ人のかりつかはしける「同」女のかりつかはしける「同」人のかりつ
かはしける「小大君」くすたまを女のかりやるとて「同」人のかりやら
んとて「金葉、戀下、讀人しらす」「あふこのかた野に今はなりぬれば
おもふがりのみ行にやありけん「和泉式部續」をこの女のかりいきて
「萬代、雜一」法成寺入道前攝政太政大臣」君がかりと山路を分てくるわ

れを花をたづぬと人やる見らん「大和物、百四十八段」院より給はせ
ん物もかの七郎きみかりつかはせむ「月浦、一」「君がかりとさきむるこ
ころまふらん雲はいくを空のかよひち「宇治拾、七、十一」やこそ
くの僧のかりいさ

かりい かり菴「夫、十二、斬恒」「みやま田のおくへの稻をかりつ
みて守るかりいほはいく夜へぬらん「萬、十、五十一」「秋田かるかり
いほつくり庵してあるらん君をみんよしもがも「夫、廿、爲家」たれか
こん山かけかき夏草にまかせてむすお露のかりいほ「同、九、同」
「かやり火の煙はかりやしらるらんは山がみねの柴のかり庵「同、三
十、定家」「小山の露のかりいほのやどりかな君をたのまんいなづ
まのかけ「續拾、秋下、爲兵」「露霜のおくへのいなほ色」きんかりいほ
さむき秋の山風「萬、一」「うちの都のかりほおほゆ（これは行宮
也）

かりは 狩場「夫、十八、俊成」おほつかなたかへる鷹もいかならんか
りはの小野の雪くれのそら「同、十八、慈鎮」「あはれなる狩場のをの
のそたち哉 思へはこれやつみの通ひぢ「同、十八、家集、狩場雪、爲相
」「芹川のむかしのかりはあふりて名のみこのれる野への白雪「同、
同、俊成」「はかなしやたか野の原にたつきすたえぬかりはどかつは
みるらん「新千、冬、前太政大臣」「はし鷹のをさの鈴の音にきくか
りはのみゆき跡はちりつ、「萬、四、十七」穂田の刈婆加、とあるは刈
比といふ義にて今とはことなり

かりは かりは

かりか かりた

六百五十四

かりはかま 狩袴(和名)奴袴漢語抄云絹狩袴或云破奴乃加利
八加萬(枕、四、廿)老たる女の法師のいみじくすけたるかりはかま
のつとちかちのちうにほそくみじかきを云々(金葉、連歌)「かりはかま
をほそくしちかちひひ」

かりは 刈穂(長秋詠藻、中)「かすしちす秋のかりはをつみてこそお
ほくら山の名にもおひけれ(夫、廿、十二、悠紀方、匡房)「足引のいた
くら山の峯迄もつめかりほをみるがうれしき(新六、二、行家)「秋
の田の刈ほのほくみいたづらにつみあまなるほはひにけり

かりは 假廬(續後撰、續四、定家)「ちとりせしかりほの秋の露はか
り清き袖の色に戀つ、(後撰、秋下)「秋の田のかりほの庵の笠
をあらみ我衣手は露にぬれつ、(夫、七、十三)「雨はふる假庵はつ
くるいつのまにさこの沙ひに玉はひるほむ(夫、廿、隆綱朝臣家歌合、讀
人しらす)「いなきさや山田もるをのかりほにてね夜の数をいく
夜へぬらん(夫、廿、萬、廿、廿二、讀人しらす)「たちねの母をわかれ
てまことわたたひのかりほにやすくねんかも(夫、廿、旅時雨、嘉應二年
智經法師)「かりほすすなほのかりほの村時雨哀まきすの音はかり
かは(夫、一、一)「萬、十、四十三)「秋田のかりほをつくり我をればこ
もみちをむく露をばけり(六帖、二)「みままたのおくへのいねほほ
わびてまもるかりほにけり(後撰、秋中、讀人しらす)「秋の
田のかりほの庵の匂あまほほはる秋萩みればあぢかも(萬、十、廿
四)「秋田のかり庵の宿り

かりか かりの所に出す

かりか 雁がねはくにおもひつ、雲がくれなく(新勅、物名、伊勢)「風
さむみなく雁がねの聲によりうた衣をまつやかきま(萬、十)
「秋風に山とびこゆるかりがねの聲とほさかる雲かゝるらし

かりようびんか 迦陵嚩伽。迦樓頻(和名抄、四、十二)沙陀調曲
の所に或譜云天竺語也漢云教鳥其鳴時聲中傳言空無我
常樂我淨之義(故名)教鳥也極樂淨土鳥也妙音天淨(翻
譯名義集、二、四十五)正法念經云山名曠野(其中多有迦陵
頻伽)出三妙音聲(美音若天若人緊那羅等無能及者)唯
除(如來音聲)一(源、紅葉賀、初)これや佛の御迦陵頻伽の聲なら
んと聞ゆ

かりた 刈田(新撰古、秋下、公宗母)「鳴のたつは音もさむく成にけ
りかりたのおもに箱やおくらん(堀大、曉、隆源)「曉になりけらしな
我門の刈田の鳴もなきたつ也(夫、十二)「新六、二、信實)「はやは
こゝかり田のお物こまの足いなおほせ鳥の聲いそなり(千載、秋
下兼昌)「わが門のおくへのひたに驚きさむのかり田に鳴ぞ立な
る(枕、二)「むのかりたもろのはるむせなむいり、早稲(源、紅葉賀、
品ある)一種をぞ(拾玉、二)「早苗をさすのわたりのかたあはしこ

ぞのかり田は淋しかりけり(新六、二、知家)「秋はしかりたのひつち
いたづらにほほ出れども守る人ぞなき(續古、冬、後京極攝政)「霜
うつむ刈田の木葉おみしたまむれる雁も秋をさす(玉葉、冬、
式子内親王)「旅まへちあしみの里の朝ほほ刈田の霜にたつぞな
くなる(同、同、雅有)「つとめる刈田の雨の夕ぐれに山もほほ
驚わたる見ゆ(新撰古、雜上、師光)「まへ人もなきて時雨を過ぬらん
刈田の庵に雲ぞかゝれる(雁信集)「かゝはかりかかきさるるを
のちかりたにたててはほほかきさるる

かりちめ 新撰古、夏、明恒)「しげののみにひびくはるる夏へそのかり
そめだにたてよ人もなき(伊勢集、四十六)「かりそめにそめさるるま
から衣かへる道ぞつとみつるかな(源、明石、廿四)「しほくへ先ぞ
なかるかりそめのみさめはほほのすのひひたれは(古、雜上、貫之)
「難波がたももる玉瀧がかりそめのももるそわれはほほのめももる
「源、帯木、廿五)「東ももはほほのつとめてかりそめの御しつとてた
り(同、夕顔、十七)「かりそめのかくれがとほなみゆめれば(同、朝顔、十
二)「かりそめのちをなを思ひます木草の色に心ぞうつす
覺てて

かりちめふし(風雅、旅、山階入道左大臣)「露ながらむすぶるの
かり枕かりそめをのいひかへる(後撰、續四、六帖、二)「秋の田
(真木の戸)「六帖)「のかりそめをのいひかへる(後撰、續四、六帖、二)「秋の田
つとめて(順、二十三)「奥竹の夜もむかへ今はなかりぬるをかりそめを

に衣かたしく(夫、廿八、六、百、顯昭)「もよ草もよ迄なきたのめけ
んかりそめふしのしのはし(堀大、田家、河内)「小山田の稻葉
の露を打はらひかりそめおしをいよしつとた(枕、二)「わね、(夫、廿
二、法印道清)「かや枕かりそめふしのさびしきよはの嵐ぞ友となり
けり

かりつかふ 驅使(父子相迎、上)六道縦横にかりつかひにしかは
かりね 假寐(新古、夏、式子内親王)「わすれめちあぢを草に引む
すびかりねの野への露のあけほの(玉葉、旅、内大臣)「むすびおく宿
そかはれ草枕かりねはおなじよなくの露(千載、續三、皇嘉門院別當)

「難波江のあしかりねの一夜ゆる身をうつして戀わたるま
「夫、六、爲實)「必さちきらぬ人の花すみれたれ故一夜ゆるすかりね
ぞ(夫、廿一、喜多院入道)「わびつ、もかくつく世を過ぬ
んかりねならはぬいなきの里 かりねの床 (千載、夏、雅類)「都
人ひびなつてそめめ草かりねの床の枕はかりは(續千、旅、經繼)
「夢をたに結びほは草枕かりねの床の上はの風に かりねの
聲(風雅、旅、光明寺入道)「さよののはのまの中山ながきよもかり
ねの夢はむすびやはする(續後撰、旅、公卿)「あはしやくのさよの
草枕かりねのめはむすぶるまなし かりねの枕 (源、夕顔、秋の
野の草のしげみはわけ)「かきかりねの枕むすびるはせし

かりちつす ヨリマンの事をいふ(源、手習、十四)「人にかりちつて
何もの物のかく人をほほはしたるぞありあはかりいはせまほは

うて「榮、初花」御物けはまほしくかりうつしあづかりくに加持
しつゝしる

かりうち 「和名抄、四ノ五」樗蒲一名九采内典云樗蒲和名加利宇
知

かりのいはり 「夫、卅、後京極旅御歌中」「あけ方にもなるも白露敷を
ひぬかりのほりのあしのすたれた

かりのはいひも 「夫、十二、重之」「このよひでし日かすよひかに夜
もあまき都にきたる雁の羽衣」同、清正」「こよひにてかりの羽衣さ
もあまの心に心してあけ秋の夜の風

かりのたまじき 「古、秋上、友則」秋風に初雁かねを聞ゆなるた
か玉のたまかけてつとらん 同、玉葉、春上、賀茂重保」かりかねのみ
すにまげして玉のたまか花のついでにまをさるる

かりのつかひ 狩の使。鷹狩の使なり 「夫、卅五、新六、二、知家」
「明はまたあかひなだて、伊勢鳥やかりの使のゆきまわかれん」伊
勢物、六十九段」むかし男ありけりその男のせの國にかりのつかひに
あまのいへ

かりのつかひ 雁の使。蘇武が故事也 「萬、八、四十九」「九月
のその初雁の使にも思ふ心はまことぬかも」同、十七、十九」雁が
ねは使のこもをわくへん秋風さむみ其川のそに」漢書列傳、二十
四」蘇武字子卿武帝時以中郎將持節使匈奴單于欲
降之迺幽武置大窖中云々 昭帝立匈奴與漢和親漢

求武等「匈奴説言武死常惠教漢使者言天子射上林
中得雁足有帛書言在某澤中由是得還」
同、萬、九、十二」春草を馬咩山のこえなる雁の使はせり過なり
かりのなみだ 「古、秋下、忠孝」秋の夜の露をは露とおきながら雁
の涙のなををむらん」新古今、哀傷、花山院」なへてよの人より物を
思ふはかりのなみだの袖に露けき」拾遺、下」あまなく下は催
す秋のなみだの涙を色に出ゆ」拾遺、下」露はのなわがゆや
れの袖を又かりのなみだの染て過ぬる」新拾、秋上、頼阿」秋のう
の露となりて雲をさながらかりのなみだも色に出らん」玉生、二品、上」
「都おもふ袖もつゆけき深山おちにかりも涙をおきすなり」古、秋
上、讀入しらす」鳴わたる雁の涙や落つらん物思ふやの秋の
上の露

かりのやどり 「後拾、雜六、釋教、化城喻品、摩訶王母」道遠み中空に
てかかへんと思ふはかりの宿をうれしき」堀太、歸雁、仲實」いかな
れは草の枕に行かへるかりの宿にもとまる心ぞ」新古今、雜下、元任」
「われかくて稲葉もみも成ぬるをかりのやどり人のみるらん
かりのやどり 「後拾、雜六、釋教、赤染衛門」こしちにてかりのりい
のやどりにたすけはまことの道をわかしてらまし」詞花、雜下」長
き道のなるし事をおもひかき何なげんかりのやどりを」新古
旅、四行」世中をいそぎまきこそかたからめかりのやどりををしむ君
かな」新後、釋教、經任」子を思ふ親のをしへのなかりせはかりのやど
り

奉りたまをかり顔をもほのみせ給はず)かりも也)あつ
かりのもの 「源、手習、十」まことほ人の心の心もあらはれて出たたる
かりの物にまらしたかぶ
かりのら 「夫、卅六、新六、二、信實」こしちにてかりのりい
つゆけきのかりのやどりまらしたかぶ)新六、こしちにてかりのりい
らるる)

かりや 假屋「散木、中、十九」下りやかりに云々、かしてに守爲隆が
りもな作りて御まきけなしてはるる)二三日平あをせ給ひて事
なほ思ひいでて云々、)源開、二、卅一」福原にて持經者千僧にて法
花經を轉讀する事ありけり云々、濱にかりやまらして道場をせら
れけり)たり、云々、)續古事談、一」池の中島にかり屋をたて「夫、
卅、四行、まきの假屋家集」柚人のまきのかりのあたふしに音する
物は假なりけり「夫木、はたの假屋、幽居問雁」隣あはたのかりやは
あかす夜は鹿あはれる物にありひる)金葉、夏、雅光」かよす
かよはかなしたてへへひなかなかなをせむかよひのかりや
かりやかた 「拾遺、中」大井川夏にせむかよひのかりや
せか見るとす輝を

かりやす 黄草「和名抄、十四、九、染色具」刈安草
かりまた 雁股「宇治拾、十二、廿」かりまたをつがひやた、ひ腹を
る

かりまへし 假枕「夫、卅、新六、五、光俊」かはをちのはたのち
る

かりのむぎ 「源、夕顔、十六」御ちかへんむぎつたたるかりの御ちか
る哉雁のこもをむぎの松風

かりのいひ 「夫木、十三、師光」秋風やしてななるもさかろかねの
こもをむぎつたたる哉」同、藤原、一」たかひのかりあはせたるこ
もをむぎのこもをむぎの松風

かりのいひ 「夫木、十三、師光」秋風やしてななるもさかろかねの
こもをむぎつたたる哉」同、藤原、一」たかひのかりあはせたるこ
もをむぎのこもをむぎの松風

かりのいひ 「夫木、十三、師光」秋風やしてななるもさかろかねの
こもをむぎつたたる哉」同、藤原、一」たかひのかりあはせたるこ
もをむぎのこもをむぎの松風

かりのいひ 「夫木、十三、師光」秋風やしてななるもさかろかねの
こもをむぎつたたる哉」同、藤原、一」たかひのかりあはせたるこ
もをむぎのこもをむぎの松風

かりのいひ 「夫木、十三、師光」秋風やしてななるもさかろかねの
こもをむぎつたたる哉」同、藤原、一」たかひのかりあはせたるこ
もをむぎのこもをむぎの松風

かりのいひ 「夫木、十三、師光」秋風やしてななるもさかろかねの
こもをむぎつたたる哉」同、藤原、一」たかひのかりあはせたるこ
もをむぎのこもをむぎの松風

かりのいひ 「夫木、十三、師光」秋風やしてななるもさかろかねの
こもをむぎつたたる哉」同、藤原、一」たかひのかりあはせたるこ
もをむぎのこもをむぎの松風

かりのいひ 「夫木、十三、師光」秋風やしてななるもさかろかねの
こもをむぎつたたる哉」同、藤原、一」たかひのかりあはせたるこ
もをむぎのこもをむぎの松風

かりのいひ 「夫木、十三、師光」秋風やしてななるもさかろかねの
こもをむぎつたたる哉」同、藤原、一」たかひのかりあはせたるこ
もをむぎのこもをむぎの松風

のかり枕夢になしても人にわたるな「八月十五夜歌合、廿九番、俣季」
「月やさる床は草はの假枕おきあへぬ露にのべの秋風

かりふ 刈生「好忠、秋、十首」櫻麻のかりふの原をげふ見れば外山
かたかけ秋風ぞふく「夫、廿八、爲家」櫻麻のかりふの跡の逢にぞう
つりゆく世のほほはかなしき「夫、廿二、現、六、鷹将を、洞院攝政」し
ひてこそ猶かりゆめめいほはせの、秋のかりふは雪ふかきこも

かりふし 假臥か「夫、廿四、爲家」神がまのいはほのうへのかりふ
しほきぬの昔をあらふみやう

かりこ 狩人也「夫、廿六、久安白首、崇徳院」情なきかりこの耳にぞ
をしかのこよひの聲をいかにきかせん「和名抄、二〇九」列幸文選云
列幸満山和名加利古

かりころも 「六帖、五、下」かり衣心のうらにほほなげにほほなみだ
れて物思ひする「伊勢物語、六帖、五、下」翁さび人なごめめかりこ
るまげふはかりそなたづもなくなる「夫、十三、信定」草の葉に袖つく
つちのかり衣いかなる露の色にぞもらん

かりこも 刈薦「萬、十二、十五」かり薦のひとをしましてまぬれや
も共としぬれば冷雲梨「同、十一、廿九」わらもこに戀つゝあらはは
かり薦の思みだれてしぬべき物を 風雅、雜上、國夏「見がくれて
しげみは見えぬ五月雨にうきまてのこれる涙のかりこも

かりこ 契沖説に笠あてをうらふらり、笠のかりこの所に注す
かりこ 借代「萬、五、廿八」「つねにぬ道の長てをくれ〜といか

にかけかん可利豆はなしに

かりあど 刈跡「夫、廿八、知家」皆人の笠にぬふ草のかりあどこの
世にすげもなかりにける哉

かりすうぢう 狩装束「枕、二、八」其しもには殿上人わかききん
だりかりすうぢう直衣なまもひををかしめて「後、四、上、五」例ならぬ
かりすうぢうにちつれ給ひていかにぞや思ひみだれ給へるまの

かりきぬ 狩衣「和名、十二、十九」布衣袴此間云獨衣 加利政治
「伊勢物語、初段」かりきぬのすそをきりて歌をかきてやる「徒然、四十四
段」狩衣にこそまじりて故つきたるまじり

かりぎぬ 借衣「夫、廿三、顯國」我戀はしづのかり衣おのが身
にぬぬこをなげきぬかな

かりきぬはかま 「宇治拾、十五、一」下種のかり衣袴を給ひて
かりきぬすがた 狩衣姿「源、末摘、七」あやしき馬に狩衣姿のな
いがるにできれば「枕、二、七」直衣指貫すしのひとへなぞ着
たるも狩衣姿にても云々「同、三、五」鞍負のすけの夜行狩衣姿も
いづいやしげなり

かりみや 行宮
かりしほ 「夫、末、廿二、爲家」しかのうらをちの濱田の逝しほに色づ
くみれば秋なちけり「新六、一、光俊」浦風に濱田のをしね打なび
きはかりしほに成ぞしにける「清輔集、田家夏雨」かりしほのそと
の麥も朽ぬしほすゝまじりてまよふたれ

かりびと

狩人「和名、三〇九」獵師一謂「獵者」和名加利比止「雜
略紀、九」獨徒「萬、六、十四」「足引の山にも野にもみかり人ともや
たはさみみだれたる見ゆ「千載、戀五、相摸」かり人はとがめもやせん
草しげみあるしき鳥の跡のみだれを「夫、廿六、家隆」「真秋さくみや
ぎの原の白露をあらふますらんかり人ぞうき「夫、十八、爲家」「あは
づの、とたのすゝまみしたき朝縮わけて出るかり人「和泉式部
集、上」野邊に出るみかりの人にあらぬぞとこりあつめてぞ物はか
なし

かりびさし 假庇「夫、廿、太宰經卿」さそあかすさ、やの庇のか
りびさしたるはの白雲

かね 兼、カヌカヌルカネテ兼帯の心可考事 かねて 前ビロの
心 かねて シニツキ事、共に別に出ず

かる 借「後撰、秋中」「朝三におく露袖にうけためて世のうき時
のなみたにぞかる「古今、真讀人しらす」「聲はして涙はみえぬ郭公
わか衣手のひづをかたなせ「新六、六、行家」秋風のまもむにほそそ
しつはたをかりて野はらの虫もふるさし「萬、廿、五十二」みつほなす
かれる身をほほしれ、さそあはしねがひつちとせの命を

かる 刈「式、八、十二」六月晦大被天津菅曾乎本菊斷末菊切
氏「古事記下、十七」あまた(天田)を加流をせめ云々「古、秋下、讀人不
知」「かれる田におふるひつちのほに出ぬは世を今更に秋はてぬと
か「神紀、下、三」刈此云三我里「古、戀五、讀人不知」「うさめのみお

かりびと 狩人「和名、三〇九」獵師一謂「獵者」和名加利比止「雜
略紀、九」獨徒「萬、六、十四」「足引の山にも野にもみかり人ともや
たはさみみだれたる見ゆ「千載、戀五、相摸」かり人はとがめもやせん
草しげみあるしき鳥の跡のみだれを「夫、廿六、家隆」「真秋さくみや
ぎの原の白露をあらふますらんかり人ぞうき「夫、十八、爲家」「あは
づの、とたのすゝまみしたき朝縮わけて出るかり人「和泉式部
集、上」野邊に出るみかりの人にあらぬぞとこりあつめてぞ物はか
なし

かりびさし 假庇「夫、廿、太宰經卿」さそあかすさ、やの庇のか
りびさしたるはの白雲

かね 兼、カヌカヌルカネテ兼帯の心可考事 かねて 前ビロの
心 かねて シニツキ事、共に別に出ず

かる 借「後撰、秋中」「朝三におく露袖にうけためて世のうき時
のなみたにぞかる「古今、真讀人しらす」「聲はして涙はみえぬ郭公
わか衣手のひづをかたなせ「新六、六、行家」秋風のまもむにほそそ
しつはたをかりて野はらの虫もふるさし「萬、廿、五十二」みつほなす
かれる身をほほしれ、さそあはしねがひつちとせの命を

かる 刈「式、八、十二」六月晦大被天津菅曾乎本菊斷末菊切
氏「古事記下、十七」あまた(天田)を加流をせめ云々「古、秋下、讀人不
知」「かれる田におふるひつちのほに出ぬは世を今更に秋はてぬと
か「神紀、下、三」刈此云三我里「古、戀五、讀人不知」「うさめのみお

りたりけり... 人目も... 草の... 秋の... 鹿の... 少将は...

同、別... 君が手... 十一、廿三... 十九... 同、廿三... 枯。カレカレ...

こぼる... 思ひ... 玉露... 同、廿一... 同、廿二... 同、廿三...

同、廿一... 同、廿二... 同、廿三... 同、廿四... 同、廿五...

人の心... 同、廿一... 同、廿二... 同、廿三... 同、廿四... 同、廿五...

の姫君を云々ありかたきかたち人になん云々(棠、根合、四十四)といひの中納言い花やかにきよげにかたち人を見えたまへり堀川の右の大殿こそはかたちの名とり給へりしかは此殿はとも皆いよくし給なるよし

かたり 語。次のかたるの所に

かたりぐさ 語種(祭葬水文)受三上國之祭一作千秋之話柄

○話柄話資

かたぬ ムスツ一也(江次第、一、四十九)元日先召外記問諸司具否云々但腹赤奏進參之時七日奏之若又當卯日有卯杖奏返給之時故攝政於宮中被結故土御門右府稱小野大臣例不被結(萬、十、廿六)「しら玉のほつとひをさきもみすわれはほしかたぬはん日まつに(同、十八、三十)年のうちのこと可多瀬もち玉はこの道に出たら

かたぬぐ 肩ぬぐ。神社の行幸、物まらごの時は、求子はて、後公卿以下十人かたぬぎて舞事ありカタオロシといふ則是也(世俗淺深秘抄)雖里内露右肩人多之然而猶可依使也雖大内主上自上月小部有御覽仍奥座人露左肩是一説也但於處處推參所者必可露右者也(源、著、下、十七)もめこはつる末にわかぬかなる上達部はかたぬぎており給ふ(續古事談、一)殿上の一種物云々人々皆かたぬぐの衣をきたり用意あるなるよし(著聞十七)また男かたぬぎたつきよりかたけ

かたぬぐしか 肩ヌグ鹿(古事記、上、十九)内ニ拔天香山之眞男鹿之肩一抜而〇契云、龜古は後のことにて神代には鹿の肩骨を抜りてうらなひける也(堀初、匡房)かこ山のほらかした(うら)とけてかたぬぐ鹿は妻こひなせ

かたる 語(安藤紀十六)談此云簡陸利(新古、哀傷、匡衡)「よもすがら昔のことをみつるかなかたるもつ、ありしよゆめ(源、手習、四十五)いむ事うけ奉らんこのたまひつるもかたる(同、桐葉、十四)御しほたれがらにておはしきよとかたりて(同、常夏、初)かたりてきかせ給へ(古、戀一、讀人不知)「忍ぶればくるしき物を人しれす思ふてふ事誰に語らん(萬、十七、十二)「時鳥今しきなげは萬代にかたりつゝくおもほゆるかも(源、未摘、十四)いにしへの事かたり出て(散木、上、七十一)云々田上より都へのほるもて紅葉のめでたかりしよし都の人にかたりちらるるも申ければよめる(嵐、都の人と思ふとき紅葉の色をかたりちらるるは(新六、五、衣笠内大臣)「をしをへて思ひしほごの心をはかたりあらはすことのはもなし(源、香木、初)忍び給ひけるかくるへごをさかたり傳へけん(萬、三、五十二)いかなりとは、語りつげんか(源、香木、廿九)はなのあたりをこめてかたりなす(萬、十一、廿五)「かくれぬのしたにこおればあまたり人にかたりつゝいむさきものを(源、香木、廿八)式部が所にせけしきあること(同、九)「さまくの人のうへごをかたりあらはせつ、(同、十一)「ちかくてみん人の聞わおるひ

かたきならぶ 古語拾遺、六)佐命之勳無有比肩(源

かたわ 片輪(沙石集)車の事にそへていふことあり

かたわれ 月にらる(新六、六)夫、十三、信實(過かほる宵曉の片われをひびく)ある月のかきかな(拾遺、戀三、讀人しらす)「あふ事はかたわれ月の雲隠れおぼやけにはは人の戀しき(二條皇太后宮

かたわれぶね 千載、雜下、短歌後類(彌木)「散木、下、卅一、長歌(云)いほはてはそなななるかたわれ舟のうづもれてひく人もなき(云)かたわき 宇治保、後醍醐中(つち、かたなめらかなるくけ針にはまたの糸を左糸右糸によりて一ひろかたわきはかりけたる

かたわきて 同、榮の使(か、右の馬づか御馬左右大將とう)ておほしき上達めみかたわきてくへ給ふ(後拾、秋上)三條太政大臣左右をかたわき、前裁うま侍りて歌に心なる者十六人をそらびて歌よみ侍りけるに云々兼盛(續千載、卷下)堀

川の院御時中宮の御方にてかたをわかつて花を折りにつかはして御前にたてならせ云々

かたかはやぶり 保元物語(山田小三郎伊行といふは又なき剛の者かたかは破りの野猪武者なるが

かたかはなし 案ずるに古語物語文にカタホといへるは此カタカホをいへるか(盛衰、十二)教盛新院及爲義忠正なを夢に見たる時此由かこ内々申給ひければ入道はさる片顔なしの人にて更に用給はせりける上云々

かたか 源、香木、五親をたたらそひもてあかめておひきこもれるまののうちにほほはたかたかどを聞つたて心を動す事あり(同、同)そのかたかどを人あらんやとの給へは(同、八)はかなしく出たらんことをわざも故ながら見えたらんかたかどにてるかと思ひの外にをかきかたか(散木、下、五)彌次(夫、廿二)「石はさまたける人の心さかたかどありと(同、夫)「みえもする哉かたかた 片方。片つ方の心也(古、別、友則)「したの帯の道はかたかくわかるもゆめめりてあはれんを思ふ(千載、真、崇徳院)「かきりありて人はかたかく別るも涙をたれもよめてしかな(宇治拾

かたかた 方々。人々の心也(前太平記、二十)童子打わらひてい

に物申けるに時鳥のほのかにささげれば女のよめる「君と我と
かたらへは郭公しのびぬする人もさくらん返し」今夜さほねにあ
らはれぬ時鳥かたらふ事のしるしと思はん「今物語、五、いさづつし
げなる女房のひとり参りあひたりける見えてかたむ覺えけるまに
いひよりてかたらひければ大方さうの道にはかたむがたき身にて
なれどさうくにいひしるひけるを猶たへがたく覺えかへりけるに
つぎへ行ければ「源、廿六」可多良比能利多布言平聞久仁 〇「新
後撰、三、夏、櫻」さう人をなまかたらはばはばさうひよりしひの
岡にさうさう「同、同、基真」はばさうさうにたれかたらはばお
のさうさう身にはしるし「萬、卷下、國基」吹風のさうさう花
はばさうと見まかたらはばはばさうさう

かたらふ 頼む事也「鳥橋紀、十」速發三軍旅一述三王所在於高
向臣國押一曰云々「源、松風、三」宿もりのさうにさうある人をよびと
りてかたらふ「宇治拾、二、八」陰陽師をかたらひてしるしをさうさうけ
るなり「風雅、夏、按察」我ための弊にさうさうさうさうかたらふと
してさうさう思ふさう「玉葉、雜一、公雄」はばさうさうのさうさうさうさう
身にはかたらはばさうさうさうさうさう「續後撰、四、按察」さうさうさう
さうさうさうさう人もさうさうさうさうの世にさうさうさう「新千、夏、
國基」さうさう引の山はさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
かたらひびと さうさうさうさう我物にさうさうさう「源、玉葉、十」此家
の次郎をかたらひびとりて「同、十三」次郎をかたらひびとられたるさうさう

おそろしくかうさう「同、手習、五十九」忍びたるまに猶かたらひと
りてんとおもへば
かたらひちぎる たういひ約束するをいふ「源、若葉、上、百五」月の
内に小弓もたせて参り給ふをかたらひちぎる
かたらひよる 前に附す
かたらひがたげ 「源、東屋、八」かたらひがたげなるかほしてさうさう
よりていふさう
かたらひつゝ 頼む事にも男女の事にもいふ「夫、廿八」物語「大
帖、五」さうさう引の山はさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
「源、若葉、十三」忍びてかたらひつゝさうさうさうさう「同、紅葉賀、廿四」
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
生、十」侍従もかの大貳のをひたつ人かたらひつゝさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
侍りぬるを聞ゆ
かたらひびと 「萬、十七、四十」さうさうさうさうさうさうさうさう
見ぬ人にもつげ
かたらひあはす 相談する也「源、玉葉、十三」いかにさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
おなじ心なすさうさう中たかひたり「同、總角、十九」さうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
事にはいひあはせたり「同、奉らんと皆かたらひ合せけり」同、早殿、
初「心細き世のさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

かたらひちかす 已に出す

かたらひびと 物たのむ人をいふ「源、若葉、下、五十六」小侍従と
いふ「柏木」かたらひ人は

かたらひびと 物かたりする友をいふ「源、深標、十五」めのもも此女
君の哀に思ひさうさうさうかたらひ人にて世のなまさうさうさうさう「同、
末編、四」さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
十八雁を遠つ人「同、十一、廿一」郭公をさうさうさうさうさうさうさう
は聲ある物なれば語らひ人と云々、此物語の末には猫をも人と
いひしれば萬にわたるて似つたる所にはいふさうさう

かたむ 固「古事記、上、卅五」作三堅其國「續後紀、十九、十一」草
菅運殖生志津々國固米造介牟與理「玉葉、雜四」元暦元年世中さ
わがしく侍りける頃平行盛備前の道をかたむとて壇の浦と申所
に侍りける「源、明石、卅二」さうさうの内に入りていかにかたむける
さうさうさうさう「山家、下」さうさうその岸のいはねばさうさうさうさう
めたてたる宮はさうさう「萬、九、十八」此はさうさうさうさうさうさう
くにかたむていふさう「同、廿、五十六」さうさうさうさうさうさうさうさう
のかたむし國をさうさうさう「散木、上、廿八」時しもあれ名にあふ
坂の杉かたむ山郭公關かたむなり「夫、卅六、家集、四行」さうさうさう
むゆるかたむいふさうさう根は君が千歳をかたむたるとし「源、蓬生、廿
四」板垣さうさう物打かたむさうさうさうさうさう

かたら…かたむ

す偏りてものする方につまざる言なり

かたむく 打かたむく 共にかたむくの傍に出す

かたむすび 「夫、卅三」萬代「其後」逢ふ事はかたむすびするわさう
こがゆはたの紐よいつかさうさう「同、同、洞院攝政」紫のこそめの帯
のかたむすびとてぬる夜のかさうさうさう「新古、戀三、後撰」さう
のやのしづはた帯のかたむすび心やすくも打とくる哉「後拾遺、二、相
摸」さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
「夫、九、後通」山かげのさうさう松がね枕にて若る清水かたむすび
せし

かたむ 方人「散木、下、廿六」物思ひの心くらべのかたむ人にな
るさうさうさうさうさうさうさう「桃、四」仲正が云々何かはきんさうさう天
人おるはかりひさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうの御娘はさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
よさうさうさう「同、七、十」さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
の男女のわけて「同、八、十九」さうさう物聞えず方人とたのみ聞ゆれ
は人のいひあはしたるさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
らみいふ「表、二、上、廿二」此御方人におぼし給ふは此事をさう
必おぼしうたがさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

かたむ…かたむ

かたや 片矢〔前後〕夫仲買〕はるはれたかたやをほろもつてわうちわがらち月のかすそかされるをまろしける〔地〕イ木まじてける〔夫〕

かたやま 片山〔夫、十九、權僧正公朝〕かた山のそはのかけちの横

雨にみかるとたにもいはでぬれ行〔新六、一、知家〕しづがたくかた山

はたにたつけちりかきまてかすむ春の夜の月〔萬、十、三〕こちかな

にき、のよろし朝〕まのかた山ぎしに霞たなびく〔玉葉、春上、鎌倉

右大臣〕うちなびき春さきりくればひもぎ生るかた山かけに驚ぞなく

原や、はる霜のおくまゝに片山椿みぢりのこれり

かたやまさで 片山里〔前後〕夏、新、忠房〕こりつみしかたなかり

せば冬深き片山里にいかですまゝし〔拾玉〕心あらん都の人にか

ならはるかた山ぞこの秋のおはれを〔新六、一、為家〕嵐よくかた山

里の秋の末すゝるにものおもむちなりけり

かたま 〔神代紀、下、廿三〕作無目籠 内彦火々出見尊於籠

中〔同、廿六〕以無目堅間爲浮木云々所謂堅間は今之竹

籠也〔萬、一、七〕籠毛與美籠母乳〔古事記、上、五十一〕造无間

勝間之小船

かたまる 〔古、長歌、時恒〕霞みたれて霜水りいゆかたまれるにはの

面に云々〔堀後、同、顯仲〕袖のつらゝもむすはれいゆかたまれる庭

なれや頭の霜もほひあらず 〔源朝、十七、廿二〕あかり障子のか

たにむかひてかたまらぬまろしほひあらず

かたまよひ 〔昔丹、五月中〕わがせこがきませりつるか見ゆほどに

夏の小原はかたまよひせり〔萬、七、廿五〕こゝろしゆくにひも守か

麻衣かたのまよひはたれかどりみん

かたまつ 〔萬、九、十二〕冬ごもり春をこひてうろし木のみ

なる時をかたまつわれを〔同、九、廿四〕くらはしの山をたかみかよ

もりに出くる月のかたまちかたき〔同、十七、五十一〕うくひすはひま

なむかたまてはかすみたなびきつきはにつ、〔同、十八、七〕う

めの花さきちる園にわれゆかむ若がつかひをかたまちかてり

かたまし 〔日本紀〕倭〔沙石、三、上、廿七〕是非をしらすひがみ答を

かくしてかたましきほらよくしづむことなり〔平家、六、四〕かたまし

きもの朝にありて罪を、かす

かたまひ 片舞〔百練抄、十四、廿六〕有片舞一有勸賞〔同、廿

翌日片舞之間木工寮屋忽以頓倒

かたふち 片淵〔新六、六、知家〕きしかげの水のよきみのかたふちに

つりをたれたる青柳のいと〔同、五、光俊〕かたふちの水にうきたる

青みどりなたなねをなき世也けり〔同、三、時、衣笠〕山かはのそ

はこのかげのかたふちわかあゆつるをけはくらしつ〔十六夜日記〕

此川堤の方はいもかくてかたはあざければかたふちの深き

心はありながら人のつゝみもせせかるらん

かたふたがる 〔後撰、戀三〕方たがりける比たがへにまかるそで

〔同、戀四〕かたふたがりて男のこなりければあふ事のかたふたがりて

君こそはおもむく心のたがはかりや〔大和物語〕かたのたがはれはこ

よひはなまなまもつてあとの給へりければ

かたぶく 傾〔古事記、下、廿二〕大宮のをまつはたて須美加多夫

那理〔新六、四、知家〕つれづれの秋のなめめゆた、ねにやすくひか

びのかたぶきばけり〔續紀、四、三〕傾事無久勳事无久〔夫、十一

歳遊〕有明の月はのこれる日かばけは先かたぶきは朝顔のはな

〔宇治、三、四〕たはるゝこそかなよふかたぶくあり心西方にかけ

へたがたぶくたがてはなをひらき〔萬、廿、十四〕秋風はひまかへ

紐をひらき待てるに月傾ぬ〔夫、八、後京極〕五月雨に柴のい

はなはかたぶく軒のしづゝのおもむきかま〔後拾遺、二、赤染衛門〕

かたぶく 池水のすまひわたさる橋もかたぶくまゝにわたりに

ける哉〔同、六、為家〕鳥の羽のほ末のよ、をてた、かたぶき

にたる我身か〔東遊賦、古本〕かたぶくをわつたぶく〔源朝

願、廿三〕もを見出しつゝこてかたぶく給へる候に物なづらうつく

しびなり〔萬、三、下、二〕見合せ給へ御顔の赤うなりながらわさ

と引入をまもしたまはす御扇にまもはしてすこしかたぶく給へる

御かたぶく御へしのか、りよりはじめ云々 〔附〕かたぶき 是は他

に〔同、續紀、廿六〕朝庭平動傾止之天〔同、廿九、廿一〕傾奉朝庭

亂國家〔三〕榮、月の宴、十五〕それは源氏の左のおとの式部卿

の宮の御事を覺して御門を傾ち奉るを覺しあふらふ事

出来て世にいと聞に、の、しる〔同〕けびろし打かこみて宣命よ

みの、しりて御門をかたぶけ奉らんとかまふる罪によりて大宰權

の帥になして流しつかはすといふことをまみの、しる〔夫、廿二、俊頼〕

〔まよひのひびりを誰もかたぶけて権をつみかぬ人はあらじな〔同、

同、同〕竹の葉にうかせる菊をかたぶけてわれのみしづむなげまを

する

かたぶく 是は頭かたぶけてもの思はくまほなるをいふか〔小町

集〕のは千世たる末は千せめてもの思ひのあるまじき松たにサ

ヤツノサマヌレといふ心にも、狭衣〕のは萬の事打おかれて誰々も

見たたに物思はしき、此詞をかりたるにや〔小町集、十六〕萬代

「物をこそははねの松も思やち千代たるをすまもかたぶきけり

〔狭、三、下、廿三〕大將ふたこび入道の宮にいひよる所に云々いひもちら

すむせかたり給にははまぎてし方のうらもつとを思はれて千代ぶ

る末もかたぶきてこしとされど宮は夢にたに〔源朝、相人おまも

てあまたいひかたぶかあやむいむ 〔枕、八、十五〕うらにわたつひたら

はあやしなまはちかたぶき給はん〔風雅、釋教、教長〕わたつみやみな

たおけてあらもども我身のうちをうかてまよめん〔昔聞、六〕まよちか

にまもしづはに思ひて打かたぶき聞けり〔同、七〕かたぶきたま

とあたたまはんかたぶきあひければ〔同、十八、八〕瓶子へまかな物を

座のまごにおかれければ云々みづからかたぶけのみつゝ〔同、同、十一〕

猶敷益もかたぶけのみつゝ〔宇津保、越の上、十〕たいとまもつたが

じけなく思給へられしはなほなむつひ聞えさせともはつかる事多くて過し侍りつる也〔同、葵、十二〕ちひるもいはひ聞え給ふを少納言あはれにかたしけなすと見奉る〔源、八十八〕宸襟しづかならばけきりしはくかたしけなし〔同、玉藻、四十二〕御心おぼせのこまかにありがたうおはしませ。事いをかたしけなし〔源、東屋、三〕あはれにかたしけなむおひ出給へはあなすし心くるし物に思へり〔同、柏木、八〕おくるしうもははかりあるあはれにかたしけなしと思ひ給ふ〔榮、利花、十〕かの院の御供の僧も天上人なき祿をらせとはいかぞかたしけなかりし〔長西本平家、二〕これはしづ山住僧の一さい衆生のしゆ病の薬のために出し給ふところの由也かたしけなき所に馬を入て洗ふことせき也とせしむは〔榮、月、の宴〕かたしけなまは申たまはせはかたしけなき人なまはらぬ給へは〔源、須磨、廿九〕かたしけなむ物おもひきこえ給ふ〔御息所の事〕〔狭、四、下〕うちなかせたまはるかたしけなく哀れにおぼしめさる〔著聞、十六、廿八〕かたしけなく少人たちの御使を給て候をりし〔同、十七、廿九〕今かたしけなく御勘氣にあづかり候事

かたし 片鋪。片袖にいり〔新六、一、行家〕床の上にあやめのわか葉かたしめてねをみせねばよはのみじかき〔新千、冬、讀人しらす〕

「川風の吹上のもみぢ散みだれたしきかたしけなうちのはし姫〔古戀、四、讀人しらす〕ちむしるに衣かたしきこよひもわれをまつらうち

のはし姫〔鎌倉右大臣集、下〕旅ごころも袂かたしきこよひも草の枕にわれ欄ねん〔源、源朝、廿四〕かたし袖をわれのみ思ひゆる心ちしづるを〔同、鏡角、五十二〕中たえん物ならなくにはしひめのかたし袖よははにぬきん〔後拾遺、三、相摸〕たが袖に君かきぬらんから衣よなくわれにかたしかせつゝ〔新撰古、戀五〕こがしな涙の床にふしわぶるわがかたしきの袖のうら波〔狭、四、中、十八〕かたしきにかさねぬ衣打かへしおもへは何を戀ゆる心ぞ〔夫、廿一、知家、家集〕かたしきの床の初霜いろに出てよなくさゆる衣手のまご〔新古、秋下、後京極〕きりくすなくや霜夜のさむしるに衣かたしきひどりかもねん

かたし 〔夫、十八、寂蓮、家集〕ふる雪ののきはかたしくみ山木の落る梢にあらしくなり〔同、同、後京極〕ふる雪にまがきかたしくれ竹の庭のふしは下氷つゝ

かたし 〔清正〕くま山くまゆれど時鳥かたしゆ聲をそれしよすや

かたし 是は片尻切にて片足に草履はきたるか〔宇津保、藤原の君〕輪の所はくち京わとは車うはひたりみこの君かたしきりして車にはしりのり給へり

かたし 〔續古、旅、前内大臣〕いはのうへにかたしき衣たひびんかきねやせましみねのしらす雪

かた 片笑〔源、常木、廿四〕君すこしかたをみて〔片顔に笑ひ

玉也也)

かた 帳におろしたれたる物をいふ〔和名、十四、十三〕帷和名加多比真園也以三自障一園也〔遊仙窟、兩頭安二綵〕〔源、常木

廿〕ひきあぐま物のかたひらなむ打あけて〔木丁也〕〔同、若菜、四十九〕御几帳のかたひらひきあぐまし〔同、空蟬、七〕もやの几帳のかたひらひきあぐまし

かた 是は衣也〔宇津保、十四、五〕かたひらばかりきて中ひいて

〔夫、廿三〕〔新六、五、知家〕いかにせんかたひら布のかたよりは身をかくすま物もやはみる〔鐘屋翁云、かたひらは今の世には布の衣をのみいふまはあはれも、裏が二重なる物を何にまれかたひらとはいふ也

かた 方引〔桃、十一、十〕男も女もけちかき人をかたひき思ふ

人のいふかあてきこをなひははらたぢなするかむひしう覺ゆるなり〔新撰、信實、はじめの夏〕春にのみ心かたひく梓戸おして夏

かた 片膝〔蜻蛉日記、三〕太刀とてあれは大夫とりてすのこ

にかたひきつきたてり

かた 片庇〔夫、七、法性寺入道關白〕賤の屋はもは蓬のかたひきしあやめばかりをけふはふかなん〔同、廿一、為家〕あは戀しこやの戸出しかたひきしひきしくみねは面かけきたつ〔同、同、常盤井入道太政大臣〕山里の柴のかたひの片ひきしまたげに見ゆるかりの

宿哉

かた 〔源、養生、十七〕かたもなぐあれたる家のこたしげく森のやうなるをすき給ふ〔桃、三、十一〕いろくはみたれ咲たりし花のかたもなぐらりたる後云々

かた 片隅〔源、明石、四十二〕あなゆしちやとてかたすみによりありたり〔同、横柱、九〕今はしか今めかしき人をわたしてきてかしつかんかたすみに入わるとそむ物し給はんも人間やさしかるべし〔今物語、十五〕東山のかたすみにあはれに人もかけ見ぬあはらやにいとやさしくいまた人なれぬ女ありけり〔源、横柱、廿四〕かたすみにかゝるてもありぬべき人の〔著聞、六、廿四〕父の入道かたすみに入て居たりける

かれ 彼。俗のあれ也。但雅言はまへといへり〔源、深井、廿七〕かれ見給へといはかなけれど千とせもふべきみよりの深さを云々〔桃、一〕生昌が所かたはらなる人をおこしてかれ見給へかゝるみえぬものあめをといへは〔同、一〕翁丸の所、磯人犬をまきてかれ見侍らんといひたればあなひみじきる物なしといはすれば〔源、少女、廿五〕たゞ此

屏風のうしろにたづねきてなげくなりけり云々。哀もすこしなる心ちしてめまきしかれ聞給へ〔同、柏木、六〕かれ聞給へ何の罪もおぼしよるぬに云々〔同、夕顔、廿一〕かれ聞給へ此世ののみは思はざり

けりあはれかり給ひて「伊勢物語六段」草のうらにおきたりける露を
 かれは何ぞいな入男にもひける「源、蓬生十九」かれはたれぞ何人ぞ
 といふ「同、桐葉廿五」是は人のきはまきりて思ひなしめたて云々
 彼は人もゆるし聞えきりしに「同、常木廿七」今やうへくわすれゆく
 きはにかれはたれも思ひはなれず「同、末摘廿三」ありしころあひを
 わろしども見給ひけんを思ひしころなれどかれはた紅のおもしくしか
 りしをち「秋八、四」うらもまじし物あれがうらに云々かれが身に只
 今ならぬもあはれおぼほとてか「後拾、秋下」相摸公資にむすられて後彼が
 家にまわれりけるに云々藤原経徳「宇治拾、十四」僧のまに出来
 てついで云々僧正かれは何ものぞ聞けり

かれ 本語はあつたなるに、俗に痘瘡をいふかきかたに用ひたるをいふ詞
 也「榮華の月、廿四」かんのこの、御覧あはれかきを給ひつれ

かれ 枯の所へ出す
 明阿曰、草木のかる、そのみもはす虫かきをのほしたるをいふ
 かなり口説に草のかる、に死をかけるはともいふに「中務集」蛙の
 かれたる人のおこせて「かれにけるかほひの聲を春たててはるかあ
 ひぬももひひるあまみ返し歌」たれか、かかきあはれはしひひんとよ
 みか、あはれかきをたのみに

かれ 「貫之、六」思ひあまの戀しき時は宿かれあがれぬとて、
 うらみすれかからず 爲離「拾玉」夏「住むる山のかきよほ
 せ、あはれかきかき音もあはれせむいり

夕顔、十八「かれくにとたえおかんをりこそは「萬、十二、十三」夢か
 とも思ひわめあ月久にかれにし君かこのかよへは「拾、雜秋、
 後傳」山腰のかきほわたりをいかにぞと宿かれかれにも人となし
 かれがた 「後傳、三」かれがたに成ける男のまに装束調してお
 へく
 かれがたがし 「宇治拾、十四」またたけのか候てうらはそれかきかれ
 かき
 かれがたがし 「古、三、小町、伊勢物」「みゝあはれ我身きつりてくはは
 ちかれがたの足たゆへに「新勅、雜四、知家」「あまみ山色かはり
 けく秋風にかれか鹿のつゞき「新、千、夏、後白川院」たはは
 なの花の宿をよめし「あはれかきかき今も昔もあまみ「新拾、雜四、經
 實」「あしたいへん「あまみかきかきかきかきかきかきかきかきかきかき
 せと「雜十、秋上、爲相」「天の川水かれ草のけく秋か、れなぞくし
 ひ「あまみかきかき」新後、冬、良教」「うらかりし秋の別につれなくもかれ
 なたてがへへの何のこころぞな
 かれの 「玉葉、冬、四行」「花にぞく露をきりしかけりやみかれの、
 月はあはれなかりけり「月清集、十」「このはちりて後はむなしく山と
 りかれの、草にあはれむもいなり「拾玉集、廿」終にははらうらみ
 き身なるもいぬかれの、露を補いのこころ
 かれの 「應神紀、十二」三十一年秋八月詔群卿曰官船名枯野
 者伊豆國所貢之船也是朽之不堪用然又爲官用功不可忘

かれないひ 餉「和名十六、十一、假餅類」餉加禮比於久留俗云加禮比
 以食遣人也二云可例比波奈之爾「新六、六、行家」「いくはくの
 道行つかれやすむらん権のはせはき旅のかれいひ「萬五廿八」常
 しらぬ道の長手をくれくといかにかゆかむ可利豆はなしに「古、
 旅」たみの浦をいふ所にままりて夕まりのかれいひ「伊勢物、九段」か
 れいひひりけり「榮玉の露、十七」かれいひなきふ物をめし出て池
 ほり木ももひくものたまふ「新六、五、乾飯、知家」「しはしてて山井
 の水をもすむつ、かれいひのつゝをきりぞ出つる
 かれは 枯葉「新千、冬、經久」「露ちりし庭の淺うら風をえかれは
 にるも霜のいろかな「後傳、雜、顯神」「あまみたまのかれはなき
 よくと外山を出てまじらなくなり「新後拾、冬、爲重」なにはなきあ
 しのよなく霜ほりかれはみたれて浦風をやく

かれはみ 枯の所へ出す「か」がたがた「か」かたの類も同くかるの
 所へ

かれがた 「葉、四下、廿九」賀茂の行幸は九月晦日なれば野邊の
 草も、皆かれくになりて道芝の露はかりを見しにかはらむ心
 ち「ひさ」源、冬、顯四十五「あまみのせむあまのかれがた」草はらむ
 くれがた 歌には草をかたてあり「續古、三、中務卿王」「あまみ
 原うらみし頃の秋風やかれくになる始なりけん「六帖、六上」
 「思やあまにたに秋はわびしき草のかれくになるぞわびしき「源、
 常木廿二」うらみかきも見ますかれくにのみ見せ侍る程に「同、

何其船名勿絶而得傳後葉焉群卿便被詔以令有司取其船
 材爲薪而燒鹽云々 初枯野船爲鹽薪燒之日有餘燼則奇其
 不燼而獻之天皇異以令作琴其音鏗鏘而遠聽是時天皇歌
 之曰云々
 かれふ 枯生「夫、廿二、爲家」「風をゆるぶくのす野のあはれ
 かれの尾花雪かきを見り「同、同、同」「淺茅原かれの小野の
 草のうらにたてける色はうつら白雪
 かれこれ 彼是。物にも人の上にもいふ「古、序」あまの歌おほく聞
 えはかれこれかきかきかきかきかきかきかきかきかきかきかきかきかき
 めおくりす「源、少女、十七」あまみの方のまは猶ひろあはせかれこ
 れにかはし侍るこそかきかき「後傳、春下」春のくれかれこれ花を
 しみる所に
 かれこらじ 「宇津保、祇開、中、四十二」歌云々とかきて折りてさくれ
 たりしもみちのかれこらじたるにつけて出ぬれたり
 かれしば 枯柴「夫、廿九、行家」うたの野やかれしはかくれよ鳥
 のこびたつはかりふるあられ哉
 かれひ (和名)十九に王餘魚とせりるれど王餘魚は鱈殘魚にて
 かれひは比目魚なりといふ
 かれひけ 標子、ワリユ「和名、十四、十六」標子切韻云標子委反波
 語抄云標子 加禮比計今按俗所謂破子是破子讀和利古標子
 中有障之器也

か月「玉三上」山ふかみかつたる雪のかつききて氷りかきぬる谷川の水「千載、真顯神」「もみだれたるは花かづみかづみ

かじり

かじり「新、若菜、下、六、十」かじり「新、若菜、下、六、十」かじり「新、若菜、下、六、十」

三「いそはしちかなりつるありきをかつはかるへしと思ふらんかし」

かじり

かじり「古、冬、贈人して」かじり「古、冬、贈人して」かじり「古、冬、贈人して」

かじり「和名、十九」鯉魚大鯛也大曰鯛小曰鯉「萬、六、十」

かじり

かじり「和名、十九、廿四」蠅蝶漢語抄云、加豆平無之、日本紀私記

かじり

かじり「和名、十九、廿四」蠅蝶漢語抄云、加豆平無之、日本紀私記

かじり「和名、十九、廿四」蠅蝶漢語抄云、加豆平無之、日本紀私記

三「迦豆伎而 濊」時「神代紀」上十五「瀧瀧於湖中」萬二、
 廿八「池に給ひ給す」同、十八、廿三「かひ…」伊勢物語、四十四段「
 四、五十」…「かひ…」…「かひ…」…「かひ…」…「かひ…」…
 「元風」「かひ…」…「かひ…」…「かひ…」…「かひ…」…
 「見えぬなりけり」附「かひ…」…「かひ…」…「かひ…」…
 「すかかは」あり給す「後拾遺」(一)(二)(三)「後拾遺」(一)(二)(三)(四)(五)(六)
 「かひ…」…「かひ…」…「かひ…」…「かひ…」…「かひ…」…
 戀四、道因「かひ…」…「かひ…」…「かひ…」…「かひ…」…

せたまはるるにけるかひありとせたり「同、竹川、十三」すの内より云々
 小うちまはるるなりたるほそなかなの花香なり、かひうしみたるをどりあり
 たるまに、かひに給ふ云々、引を、かひに、かひに、かひに、かひに、かひに、
 かひに、かひに、かひに、かひに、かひに、かひに、かひに、かひに、
 北一間「登先禮盤下」被「導師肩」次「到」僧座後「次第
 被」之畢「夫、十八」「新六帖、佛名、光俊」「しもむすぶ」こほる「新」
 「宵の野ぶ」のかつつけわたいたまき寒もわすれはつらん「夫、十八、後頼」
 「かひ…」…「かひ…」…「かひ…」…「かひ…」…「かひ…」…

かひ 被。衣にいかかふる也「拾遺、冬、重之」「時雨ゆきかひく袂
 をよそ人は紅葉をはらち袖かふるみ入」源、興、四十六「いよく御そ
 ひきかひく」…「かひ…」…「かひ…」…「かひ…」…「かひ…」…
 「かひ…」…「かひ…」…「かひ…」…「かひ…」…「かひ…」…
 卅三「大將天へ登り玉ひしかき母君のなげき給ふ所に母宮は只御ぞ引
 かひ…」…「かひ…」…「かひ…」…「かひ…」…「かひ…」…
 「同、同、世」只頭をたにひき出す引かひ…」…「かひ…」…
 「かひ…」…「かひ…」…「かひ…」…「かひ…」…「かひ…」…

かひ 類林云、日本紀に都をツツミとよむ意又會は律と同く
 昔といふ意なり「萬、十六、十三」味飯を水にかみな「吾まじ代は
 會てなしたててあらねば」同、四、四十三「かひ…」…「かひ…」…
 「花かひみ都毛」…「かひ…」…「かひ…」…「かひ…」…
 「かひ…」…「かひ…」…「かひ…」…「かひ…」…「かひ…」…

かひ 裝束を人にケル、時につたなま物を肩にひきかける故し
 かひ…」…「かひ…」…「かひ…」…「かひ…」…「かひ…」…
 「かひ…」…「かひ…」…「かひ…」…「かひ…」…「かひ…」…
 「かひ…」…「かひ…」…「かひ…」…「かひ…」…「かひ…」…
 「かひ…」…「かひ…」…「かひ…」…「かひ…」…「かひ…」…

かひ 兼。物ノ出来ヌ「コラノカネ」のカヌル也「源、帝本、十一」く
 ぬ給ふはひき「萬、一、十七」「かひ…」…「かひ…」…
 「かひ…」…「かひ…」…「かひ…」…「かひ…」…「かひ…」…
 「かひ…」…「かひ…」…「かひ…」…「かひ…」…「かひ…」…

かひ 和名、二九「潜女本朝式云伊勢國等潜女和名加豆岐米
 かひ…」…「かひ…」…「かひ…」…「かひ…」…「かひ…」…
 「かひ…」…「かひ…」…「かひ…」…「かひ…」…「かひ…」…
 「かひ…」…「かひ…」…「かひ…」…「かひ…」…「かひ…」…
 「かひ…」…「かひ…」…「かひ…」…「かひ…」…「かひ…」…

かひ 兼。物ノ出来ヌ「コラノカネ」のカヌル也「源、帝本、十一」く
 ぬ給ふはひき「萬、一、十七」「かひ…」…「かひ…」…
 「かひ…」…「かひ…」…「かひ…」…「かひ…」…「かひ…」…
 「かひ…」…「かひ…」…「かひ…」…「かひ…」…「かひ…」…

からく…の…の本を…

からくのみ 源、韓史「紙かき給ふ所に からの紙はもろくて 朝夕に 御手なすに…

からくのみへし 「十載、韓史」のびて物申ける女のせうとをた

からくのみや 「からの都」萬代、雜四、成覺上人「命こそうれしかり

からくのみ 「源、玉葉、十」からのついで

からく…の所に附す からのついで

からく…の所に附す からのついで

からく…の所に附す からのついで

代、雜四、成覺上人「思ひまほしき…

からく…の…の可良久 爾のからくも…

からく…の…の可良久 爾のからくも…

からく…の…の可良久 爾のからくも…

からく…の…の可良久 爾のからくも…

からく…の…の可良久 爾のからくも…

からく…の…の可良久 爾のからくも…

からく…の…の可良久 爾のからくも…

からく…の…の可良久 爾のからくも…

からく…の…の可良久 爾のからくも…

からく…の…の可良久 爾のからくも…

からく…の…の可良久 爾のからくも…

からく…の…の可良久 爾のからくも…

からく…の…の可良久 爾のからくも…

からく…の…の可良久 爾のからくも…

からく…の…の可良久 爾のからくも…

からく…の…の可良久 爾のからくも…

からく…の…の可良久 爾のからくも…

からく…の…の可良久 爾のからくも…

からく…の…の可良久 爾のからくも…

からく…の…の可良久 爾のからくも…

からく…の…の可良久 爾のからくも…

からく…の…の可良久 爾のからくも…

からく…の…の可良久 爾のからくも…

からく…の…の可良久 爾のからくも…

からく…の…の可良久 爾のからくも…

物の使にまかりけるに金の火うち沈のほろをしのぶ摺の袋に入てつかはすとて(唐國渤海國などの商人の舟づくしに着たるを都へ申せば御使をつかはして其物を改まてて都へわたし奉るをうけ給はるなり)「古別」藤原ののちかけがから物に使に長月のつこもり方にまかりけるに「新千別」藏人これけ唐物の使につくしへ行まかり申さんぞ

からも 杏子(和名、十七、八)和名加良毛(俗にアズミといふ)〔新六、六爲家〕「もろこしのよしの、山に咲きせおのが名しらぬからも」の花

からす 鳥(和名、十八、四)鳥孝鳥也一名鷓鴣雅云純黒而反哺者謂之鳥(萬、十四、廿八)鳥とふ大を鳥のまき(にもまき)の君をころくをまき、ランは常言にランといふがごとしまきとは眞定也ロロクは鳥の聲也(六帖六、下)「夏の夜のこもち鳥のまきをかきし夜深く鳴て君をやりつるむら鳥、夜鳥、み山鳥、夜鳥、朝鳥、山鳥、月夜鳥、やもめ鳥、うかれ鳥、日上(夫木、廿七)〔新撰六帖六〕附やたがらす 八咫鳥(古語拾遺、十)加茂縣主遠祖八咫鳥奉導宸駕(神武紀、六)朕今遣三頭八咫鳥宜以爲導者

からすがひ 〔山家、下〕「浪よするたけのこまりのからすがひひろひやうくもほゆるか(續後拾、物名)からすがひ
からすらり 〔和名、廿、十〕栝樓一名瓢瓢和名加良須字里

からすあぶぎ 〔和名、廿、十〕射干一名鳥扇和名加良須安布木(今ひあぶぎといふもの也)〔山家、下〕「よもぎあはさることなれや庭の面にからす扇のなぞ(夫)しげらん(夫、廿八、西行)同

からすむぎ 〔和名、十七、四〕穰麥和名加良須牟岐以作(雙者也)からすはにもじ 〔敏達紀、二〕高麗上表疏書于鳥羽(字隨)

羽黒(既無識者)辰爾乃蒸羽於飯氣(以帛印)羽悉寫(其字)〔融川、西季、人不知戀〕我戀は鳥羽に書ことのはのうつさぬ程はしる人もなし「長嘯子」月清みねすうかれなく鳥羽にかく玉章もよひこそみぬ

からす 合(枯)〔好忠、十一月初〕冬はきて(なほ)草葉をからしはてに(て)けりみかりの友を見るかひもなく〔源、論、七〕風いと冷やかに吹て松山のなきからしたる聲も折しり顔なるを

からすき 犁(和名、十五、七)犁加良須成犁(田器也)字鏡銀加良頭(夫、廿七、土御門院)「此頃の賤かたがらすからすきのうしと思ふも力なの世や 〔宇治拾、四〕なごかまきき歟からすきなごといふもの

かむ 嘴(神代紀、上、廿三)結然明嘴(拾遺、物名、輔相)「いかりの石をくみてかみこしはさののまにこそおさきよりけれ 〔宇津保、圖説、上、七十六〕なごこめはさうなの歯いたみてかみのこしたる云々(こめは大がみにこそは)

に打ちみ給ひて○猶鼻かむの所にくはし

かむ 酒を造るを力といふ 〔新撰字鏡、廿一〕釀酒也酒造也酒造也佐介加元(萬、四、廿五)「君がためかみしまら酒やすのに獨やのまん友なしして(崇神紀)おほものぬしのかみしみき(萬、十六)味酒を水にかみなし吾まらし云々(後にはカモスといふ)

かん 感ずの所に附す(夫、廿、讀人しらす)「感ありて人のまきつらくら山おこなふのそはかなかりけり

かんろほらや 甘露法藥(狭、四、中、廿)常にむかひ給ひつ、行ひ給ひし十たひの佛たち見奉りたまはる薬師には云々かんろ法藥のくすりも今は何にすまき身にもあらぬを

かんにち 坎日(花鳥、九)坎日不可出行云々凡諸事懼之日也〔源、夕霧、廿二〕かんに日にもありけるをもしたまるかに思ひゆるし給ははるしからん

かんどり 梶どりの所に已に出す
かんどり 神殿(和名、十三、八)寶倉漢語抄云寶倉保久良一云神殿(狭、四、上、六)寶院の所にかんどの(殿殿)にいらせ給ひて

かんぬし 神主(神祇式、一、十一)神主二人(神功紀、二)皇后選吉日入齋宮親爲神主(宇治拾、十、十三)一人の神主に神つきて

かんわぎ 神事(神祇式)觸死葬之人雖非神事月不不得(參、著諸司云々)〔源、夕顔、廿五〕下人のやまひしけるが俄にえ出

あてでなくなりにけるを云々かんわなる比はいつとびんなる事と思ふ給(か)しこまりてえ参らぬなり〔同、朝顔、十〕冬つかたかんわなるをまきよりてまき(同、葵、五)其比齋院を云々儀式なる常のかんわなるなれといかめしうの、しる

かんがふ 勘文の勘にて、考も意同じ〔源、桐壺、廿三〕すくさうのかしこ道の人にかんがふを給(か)にまおなじまに申せば〔同、深標、七〕宿曜に云々かんがふ申たりし 〔附〕かんがふ(源、清和、十六)道々のかんがふ文を奉れるに かんがふ 音便にて

意同じ〔宇津保、嵯峨の院、百三〕かやうのこは例はばせてなん物すなるをかんがふを給(か)にまおなじまに申せば〔源、御幸、八〕いこまき日なりけりちかう又よき日なしとかうがへ申ける

かんがふ 勘當の勘にて上のと異なり、二様どもにカンガフルと動く〔拾遺、雜下〕大隅守櫻じまの忠信が國に侍りける時郡のつかさかして白き翁の侍りけるをめしかんかかんとし侍りけるを翁のよみ侍りける「老はて、雪の山をはいたけともしもみるにぞ身はひえにける 此歌によりてゆるされ侍りにける(り)い(宇治拾、二、八)年をてかしの雪はつもれを云々〔枕三、廿二〕ひみじう

腹たちしかりてかんがへて瀧口にまわらばる〔同、七、一〕むてくなる物、をせ物のすまかんがふる〔宇治拾、八、十四)かんかへつるありさま願をおこしてその力にてゆるされつる事なり 〔附〕かんがへ

〔宇津保、後隆、中〕大殿にはよかく君子君おはしまさすて御供

にあらはれる人々兄の兵衛の佐の君をのみじうかうがの給ひて…

かむかむから 「萬十七、四十」たちもまにふりおける雪を

かんだち 神館。神事行る所也、賀茂の社の後に神館の跡の

かんだち 俗にカウチといふ「和名、十六、十三」麴利名加無太知朽也

かんだちめ 公卿をいふ。上達部をかく、部はむれにて伴造の件

かんだから 神寶「文徳實録、二、八」御馬並神財乎九月爾潔備

かんだら 勘當「續日本紀、八、廿三」如有不遵、教者隨加

勘當「續後紀、十三、十二」勘當守長百濟春繼「太政官式、十

かんだら 勘當「續日本紀、八、廿三」如有不遵、教者隨加

かんだら 勘當「續日本紀、八、廿三」如有不遵、教者隨加

かんだら 勘當「續日本紀、八、廿三」如有不遵、教者隨加

かんだら 勘當「續日本紀、八、廿三」如有不遵、教者隨加

かんだら 勘當「續日本紀、八、廿三」如有不遵、教者隨加

卿子親成去今月勘氣籠居

かんだんをくたく 肝膽をくたく「盛衰、十」願強が段 過去今生の

かんとかき 神司「源、神、四」かんとかきのもの「源、二、八」かして打

かむかむまゝり 「萬、五」うらなほのついでに神へかむかむまゝり

かんな 假字「源、梅枝、十二」萬のころ昔にはおもしろくもあつく成

かんなのつば 拾芥抄、中末、廿六「豊芳令雷鳴壺凝花舎北

かんなから 「實之、四」神祭る家「百」せの卯月をらの心をは

かんなつき かみな月の所に出す

かんなまき 「和名、二十」巫和石加奈奈或祝女也

祝也「新撰樂記」巫遊之氣裝貌「伊勢物、六十五段」陰陽師かん

かんのめし 四分の内何にてもかみをくくつていふ、かとも通し

かんのめし 四分の内何にてもかみをくくつていふ、かとも通し

かんのめし 四分の内何にてもかみをくくつていふ、かとも通し

かんのめし 四分の内何にてもかみをくくつていふ、かとも通し

かんのめし 四分の内何にてもかみをくくつていふ、かとも通し

祝也「新撰樂記」巫遊之氣裝貌

かんなをくたく 「源、梅枝、十二」萬のころ昔にはおもしろくもあつく成

かんとかき 「源、神、四」かんとかきのもの「源、二、八」かして打

かむかむまゝり 「萬、五」うらなほのついでに神へかむかむまゝり

かんな 假字「源、梅枝、十二」萬のころ昔にはおもしろくもあつく成

かんなのつば 拾芥抄、中末、廿六「豊芳令雷鳴壺凝花舎北

かんなから 「實之、四」神祭る家「百」せの卯月をらの心をは

かんなつき かみな月の所に出す

かんなまき 「和名、二十」巫和石加奈奈或祝女也

かんやらひ 「記」神夜良比爾夜良比賜也〔夫廿二、權僧正公朝〕

「あま衣裳きて家に在る事は神やらひよりいむむらなり」

かんざし 眞淵云、オモサシメサシの類也、髪つきをいふ〔源、若紫〕

丸いわけなくかひやうたる額つきかんざしのみじうつしねひゆか

んささゆかしき人哉と云々〔同、神、廿三〕かんざしかしらつき御くし

のかうりたるまゝ〔同、朝顔、廿三〕かんざしおもしろの懸開ゆる人の

おもしろくおもしろくめでたければ〔盛衰、四十四〕高倉の院にお

くれさせ給ひぬ先帝も海に入り給ひて御なげきつづきまはる、

御事なげきはひするのかんざしに付ても今は何にかはせさせ給ふ

まはれば御事なげきつづき給ふ

かんざし 簪〔長恨歌〕金釵〔和名、十二、十六〕簪和名加無左と挿

冠釘也、蒼顔篇云簪弁也、釋名云簪、係也、所以拘冠使不

墜也〔源、桐葉、十七〕かのおくり物御覽せざる人のみみか尋

ね出たりけんしるのかんざしなまはしかはせおもしろいとかひな

し〔宇治拾遺、十三、十二〕白くまらぬてかしてさうづみ、髪に玉のか

んざし一よるひなまらしたり

かんざび 神さびの所へ出す

かんぬりのまつり 神衣祭〔今義解、二二〕孟夏神衣祭謂二伊

勢神宮祭也此神服部等齋潔清以三參河赤引神調糸織

作神衣二又麻績連等績麻以織敷和衣一以供三神明二故

曰三神衣一

かんじ 勘事。おほく音便のかうじといへればかうじの所に出す

かんじ 柑子〔和名、十七、十六〕馬碗食經云柑子和名加無之

かんしよ 閑所〔著聞、十、廿三〕重忠座をたてて閑所ゆきてく

くりす鳥帽子かけなまじけり

かんしん 甘心〔徒然、八十三段〕洞院左大臣殿此ことを甘心し

給て〔注、食を口に甘するごとく我心に満足する也〕

かんじやく 閑寂〔方丈記〕閑寂に着するも隔なるよし

かんびやう 看病〔續古事談、三、後節〕秋にもなりゆくにつかうまつ

り人或は看病の心うみあるひはいえがたき事をうたがひてその心

ざしかはりゆくを見て

かんざ 感〔文徳實錄、九、三〕是薄徳乃能令二感致一弊支物爾波

非須〔宇津保、樓の上、下、廿〕いみじき物の上手はまたも出給ふま

所なめりかんじ哀れがり給ふ〔源、桐葉、廿〕かの衛門督はわらは

よりいこごなる手を吹出しにかんじて〔枕、一、四〕生言詞一夜の

門の事を中納言にたり侍りしかはいみじうかんじ申されて〔榮、

馴覽、十二〕殿はらみみじうかんじ申させ給ふ〔徒然、四十八段〕かん

すく感せさせ給ひけるぞ〔同、四十一段〕物にかんずることなきに

あらず〔附〕かんのおまわり〔今物語、十一〕感のあまりにける所なき

たびたりけることなん〔宇津保、後段、上、廿〕帝大におごろかせ給ひて感

せしめさこしめすことかざりなり

かう 香〔源、梅枝、初〕たき物合せ給ふ大貳の奉れる香をも御覽

すの〔同、玉露、十〕かよひのほかにほかにほかにほかにほかにほかに

かよひのほかにほかにほかにほかにほかにほかにほかにほかにほかに

かよひのほかにほかにほかにほかにほかにほかにほかにほかにほかに

かよひのほかにほかにほかにほかにほかにほかにほかにほかにほかに

かよひのほかにほかにほかにほかにほかにほかにほかにほかにほかに

かよひのほかにほかにほかにほかにほかにほかにほかにほかにほかに

かよひのほかにほかにほかにほかにほかにほかにほかにほかにほかに

かよひのほかにほかにほかにほかにほかにほかにほかにほかにほかに

かう 講〔後拾遺、五〕六波羅をいふ寺にかうに参り侍りけるに云々

相撰。菩提講舍利講入講などの類なり〔詞花、雜下〕舍利講のつ

いでに願成佛道の心を云々、關白前太政大臣〔後拾遺、六、釋教〕山階

寺の涅槃講にまゐりて云々、二月十五日〔同、夏〕宇治前太政大臣

頼通公三十講の後歌合しける時鳥をいふる赤染衛門〔玉葉釋

教〕京極前關白家の五十講の捧物に云々、かうす 講す。末に

出。

かう 鳥のささる聲〔枕、五、八〕あまのささる物必まなと思ふ人を待

あかして曉方だたひのささるかむすた。あかしてあかしたるはかうすの

近きかうすはなかく打見おけたればひびきなりたるらあまのささる

かうすの音便かくの所だ〔源、若紫、四、十六〕すゝさなる人はかうすは

あまのささる〔同、桐葉、十六〕ささるても見せどもあまのささるてい

かうい 更衣〔三代實錄〕貞觀十七年參議太宰權帥從三位在原

朝臣行平女爲二清和天皇更衣一〇〔抄〕に承和三年正五位

下紀朝臣乙魚授從四位下爲更衣是也とあれと今本〔續後

紀〕五には爲更衣の三字はなきて柏原天皇女御也とあり〔源、

桐葉、初〕女御更衣あまたらひ給ひける中

かうろ 香爐〔和名、十三、四〕小品經云以三白銀香爐黒沈木一

供三養般若

かうぼし 源宿木、九十五〕あなかうぼしと〔同、空蟬、七〕かうぼしは

ひのほかにかうぼしと打句と〔同、橋姫、廿二〕あやしくかうぼしと句

と風吹つるを〔宇治拾遺、六、四〕いれたる物何もかうぼし事たぐひ

なし〔新六、六、爲家〕橘のかをかうぼしみるる花にかけらむ道はゆき

もやられず〔夫、十一〕花山院〕秋の田を吹くる風のかうぼしみや

袖のこる句ひなるらん 〔宇津保、樓の上、十八〕るうのかうぼし

にほひ

かうべ 〔和名、三、二〕釋名曰首始也 和名加字倍 〔宇津保、後段、

一、五〕かうべをうつて木をさりこす

かうへをめぐらすた 旋頭歌也〔射恒、上、廿八〕

かうちち 〔和歌合〕麴うり 西京やかうちちのむらや垂こめて

かうちやう 是は綱丁の文字なりといふ人あり〔三代實錄、六、九〕

年中輸貢調庸雜物色數非一少 而民弊人新未進狼積實是

綱丁盜犯使者解緩之所致也〔臨時祭式〕凡梓木千二百四十

かしのからびし 〔源〕純三諸香一唐櫃也〔源〕養生、廿一

かしののの。かしのさき 并かんの殿かんの君の所に附す

かしのこし 香興〔和名、十四、十九〕嬰禮圖云香興俗云香乃古之
〔榮、月の葉〕舞の所香のこし火のこしなをみあるわななり

かきやう 此やう也〔源〕桐葉、十、野わなたて云々、かうやうの折は
御あそびなせをせ給ひては〔源〕榮、音、樂、かきやうにてみたまうる

かきやう 膏藥。〔和名〕にも數種の名出せり〔拾遺、別〕みちのく
にのみみこれをも能り下りけるに彈正のみこのかうやうつかはし

かきやう 〔和名〕十二、十三〕夾纈加字介知結、帛爲三文綵也〔神
祇式、一、五物忌一人料夾纈帛三丈五尺

かきやう 着る冠をいふ〔和名、十二、十五〕冠黃帝造也弁色立成
云樓頭加字布利枝、七、八、舞人の所にかうやうきぬのくびなづつら

かきやう 着る冠をいふ〔和名、十二、十五〕冠黃帝造也弁色立成
云樓頭加字布利枝、七、八、舞人の所にかうやうきぬのくびなづつら

かきやう 着る冠をいふ〔和名、十二、十五〕冠黃帝造也弁色立成
云樓頭加字布利枝、七、八、舞人の所にかうやうきぬのくびなづつら

かきやう 着る冠をいふ〔和名、十二、十五〕冠黃帝造也弁色立成
云樓頭加字布利枝、七、八、舞人の所にかうやうきぬのくびなづつら

かきやう 着る冠をいふ〔和名、十二、十五〕冠黃帝造也弁色立成
云樓頭加字布利枝、七、八、舞人の所にかうやうきぬのくびなづつら

かきやう 着る冠をいふ〔和名、十二、十五〕冠黃帝造也弁色立成
云樓頭加字布利枝、七、八、舞人の所にかうやうきぬのくびなづつら

かきやう 着る冠をいふ〔和名、十二、十五〕冠黃帝造也弁色立成
云樓頭加字布利枝、七、八、舞人の所にかうやうきぬのくびなづつら

かきやう 着る冠をいふ〔和名、十二、十五〕冠黃帝造也弁色立成
云樓頭加字布利枝、七、八、舞人の所にかうやうきぬのくびなづつら

かきやう 着る冠をいふ〔和名、十二、十五〕冠黃帝造也弁色立成
云樓頭加字布利枝、七、八、舞人の所にかうやうきぬのくびなづつら

かきやう 着る冠をいふ〔和名、十二、十五〕冠黃帝造也弁色立成
云樓頭加字布利枝、七、八、舞人の所にかうやうきぬのくびなづつら

かきやう 着る冠をいふ〔和名、十二、十五〕冠黃帝造也弁色立成
云樓頭加字布利枝、七、八、舞人の所にかうやうきぬのくびなづつら

かきやう 着る冠をいふ〔和名、十二、十五〕冠黃帝造也弁色立成
云樓頭加字布利枝、七、八、舞人の所にかうやうきぬのくびなづつら

かきやう 着る冠をいふ〔和名、十二、十五〕冠黃帝造也弁色立成
云樓頭加字布利枝、七、八、舞人の所にかうやうきぬのくびなづつら

かきやう 着る冠をいふ〔和名、十二、十五〕冠黃帝造也弁色立成
云樓頭加字布利枝、七、八、舞人の所にかうやうきぬのくびなづつら

かきやう 着る冠をいふ〔和名、十二、十五〕冠黃帝造也弁色立成
云樓頭加字布利枝、七、八、舞人の所にかうやうきぬのくびなづつら

かきやう 着る冠をいふ〔和名、十二、十五〕冠黃帝造也弁色立成
云樓頭加字布利枝、七、八、舞人の所にかうやうきぬのくびなづつら

かきやう 着る冠をいふ〔和名、十二、十五〕冠黃帝造也弁色立成
云樓頭加字布利枝、七、八、舞人の所にかうやうきぬのくびなづつら

かきやう 着る冠をいふ〔和名、十二、十五〕冠黃帝造也弁色立成
云樓頭加字布利枝、七、八、舞人の所にかうやうきぬのくびなづつら

かきやう 着る冠をいふ〔和名、十二、十五〕冠黃帝造也弁色立成
云樓頭加字布利枝、七、八、舞人の所にかうやうきぬのくびなづつら

かきやう 着る冠をいふ〔和名、十二、十五〕冠黃帝造也弁色立成
云樓頭加字布利枝、七、八、舞人の所にかうやうきぬのくびなづつら

かきやう 着る冠をいふ〔和名、十二、十五〕冠黃帝造也弁色立成
云樓頭加字布利枝、七、八、舞人の所にかうやうきぬのくびなづつら

かきやう 着る冠をいふ〔和名、十二、十五〕冠黃帝造也弁色立成
云樓頭加字布利枝、七、八、舞人の所にかうやうきぬのくびなづつら

かきやう 着る冠をいふ〔和名、十二、十五〕冠黃帝造也弁色立成
云樓頭加字布利枝、七、八、舞人の所にかうやうきぬのくびなづつら

かきやう 着る冠をいふ〔和名、十二、十五〕冠黃帝造也弁色立成
云樓頭加字布利枝、七、八、舞人の所にかうやうきぬのくびなづつら

かきやう 着る冠をいふ〔和名、十二、十五〕冠黃帝造也弁色立成
云樓頭加字布利枝、七、八、舞人の所にかうやうきぬのくびなづつら

かきやう 着る冠をいふ〔和名、十二、十五〕冠黃帝造也弁色立成
云樓頭加字布利枝、七、八、舞人の所にかうやうきぬのくびなづつら

かきやう 着る冠をいふ〔和名、十二、十五〕冠黃帝造也弁色立成
云樓頭加字布利枝、七、八、舞人の所にかうやうきぬのくびなづつら

かきやう 着る冠をいふ〔和名、十二、十五〕冠黃帝造也弁色立成
云樓頭加字布利枝、七、八、舞人の所にかうやうきぬのくびなづつら

かきやう 着る冠をいふ〔和名、十二、十五〕冠黃帝造也弁色立成
云樓頭加字布利枝、七、八、舞人の所にかうやうきぬのくびなづつら

る久方の月の桂も云々〔後拾遺〕人のまをまははるへの子をま
〔源〕源、桐、葉、廿七、かきやう給ひ

かきやう 爵玉はる得る、叙爵なり〔符明、廿二〕因給冠位一
級〔古、雜、上〕いそのかみのなまらむかきやうかきやういそのかみ

かきやう 〔源〕源、桐、葉、廿七、かきやう給ひ

かきやう 〔源〕源、桐、葉、廿七、かきやう給ひ

かきやう 〔源〕源、桐、葉、廿七、かきやう給ひ

かきやう 〔源〕源、桐、葉、廿七、かきやう給ひ

かきやう 〔源〕源、桐、葉、廿七、かきやう給ひ

かきやう 〔源〕源、桐、葉、廿七、かきやう給ひ

かきやう 〔源〕源、桐、葉、廿七、かきやう給ひ

かきやう 〔源〕源、桐、葉、廿七、かきやう給ひ

かきやう 〔源〕源、桐、葉、廿七、かきやう給ひ

かきやう 〔源〕源、桐、葉、廿七、かきやう給ひ

かきやう 〔源〕源、桐、葉、廿七、かきやう給ひ

かきやう 〔源〕源、桐、葉、廿七、かきやう給ひ

かきやう 〔源〕源、桐、葉、廿七、かきやう給ひ

かきやう 〔源〕源、桐、葉、廿七、かきやう給ひ

かきやう 〔源〕源、桐、葉、廿七、かきやう給ひ

かきやう 〔源〕源、桐、葉、廿七、かきやう給ひ

かきやう 〔源〕源、桐、葉、廿七、かきやう給ひ

かきやう 〔源〕源、桐、葉、廿七、かきやう給ひ

かきやう 〔源〕源、桐、葉、廿七、かきやう給ひ

かきやう 〔源〕源、桐、葉、廿七、かきやう給ひ

あやうきなたたき... 山腰の... 今

かく 早... 入たる...

かく 播... 手か

みる... けられて... 合 臨照... 注せり...

かく 罽... 此... 月...

かく 源... 南無阿彌陀佛... 我思も人... 源、海鏡、世... 我、二、上、十... 柯該志...

かく 罽... 此... 月... 此... 月... 此... 月...

我はまたかたくの... 斯「推古紀、十七」...

右大臣「戀しな... 源、桐葉、廿四... 同、桐葉、七... 二、八」...

かへ... 別に出す

かく 秤... 秋の田... 秋の田... 秋の田...

かく 額... 龍花院... 額あり「拾玉」...

かく 樂... 樂の聲... 樂「源、紅葉賀、初」...

かぐや 樂所「源、少女、四十八」かぐを違くと「同、藤の裏葉、廿五」く

かぐつちのかみ 「古事記、上、六」次生、火之夜藝速男神、亦名

かぐのおわ 「和名、十六、十二」結果、楊氏漢語抄云結果形如結

かぐのいづへ 「古、序、廿」此歌、かぐのいづへとて

かぐのあみ 「垂仁紀、十六」命、田道間守、遣、常世國、命、求、非

かぐのいづへ 「古、序、廿」此歌、かぐのいづへとて

かぐや 樂屋「源、胡蝶、八」おまへにわたれるらうをかぐやのままに

かぐまき 「和名、廿、四」黃連、一名王連、和名加久末久佐

かぐごん 恪勤。勤仕するを云、ケタイセを云、令義解、四、十九、恪

かぐから 是も此恪ごんの音便にや「宇津保、藤原若」わらはのら

かぐて 「源、紅羅襪、廿九」君がく引をらねる帯なればかぐて

かぐもん 學問「源、帶木、三」やちる清がくもんをさそひ

かぐす 隱「源、式、十六」陰陽寮、十二、所々村々、藤原里、隱、布留平

かぐさ 隱男「宇治拾、二十」あはれはかぐさ男來けり

かぐさ 隱所「今物語、廿三」はたかなる法師のかぐさ所

かぐさ 隱題「奥義抄、一」隱題歌是古式不載事也但古

かぐさ 學生「源、少女、四十七」かぐさかぐさ聞たる學生

かぐさ 阿之乃介「宇津保、國讓、上、一、四十一」かぐさかぐさ所にかぐさ

かぐさ 阿之乃介「宇津保、國讓、上、一、四十一」かぐさかぐさ所にかぐさ

かぐさ 阿之乃介「宇津保、國讓、上、一、四十一」かぐさかぐさ所にかぐさ

かぐさ 阿之乃介「宇津保、國讓、上、一、四十一」かぐさかぐさ所にかぐさ

雲の井は(るッ)みねのかげぢをよまづ風〔同、同、爲家〕「ある雨に木葉ありそ山里の庭のかげぢはくる人もなし〔和名、十、十五、磯道末々加介知山路閣道也〔源、橋姫、廿三〕あき心ばかりにほかへも尋ね参るまじき川のかけぢに思ひ給ゆるを〔夫、十七、源季歴〕」谷川は氷しにけり朝日さすいはのかげぢにかもめむれる〔同、廿一、現、六、藤原孝氏〕「大鳥のなたのかげぢにしほみちてけはなるをたよりぬるか」〔新六、五、た笠内大臣〕「おみ迷ふ山のかげぢの丸木橋しちずながらも懸わたるを」〔千載、誹詠空入法師〕「おそつちまそのかけぢの丸木橋をみ見るたひにおそめなまかな」〔新勅、旅、西慶〕「都にていそぐかひなくもほほしものなたのかげぢはほみちけり」〔新撰古今、旅、藤原名院入道内大臣〕「こゝろてりていせりやねなし里はなほ山のかげぢの昔のむじつ」〔拾遺外、十〕「たはせはみんかごのたはせの下殿のかげぢをぬまむかけぢなるを」〔拾遺外、十〕「よしの山まよふ心のあなねば花のかげぢに風わたるなり」〔萬代、雜四、爲仲〕「よそののみまみしみるかば白雲の上まのほるかけぢ也けり」〔萬葉、二、下〕「みまの、山のかげぢをたふちたひおほむはこゝろなるを」〔萬葉集、下〕

「源明石、八」命つきたたしつちをたすけにかけりたまふをあはれにおぼすに〔同、常夏、五〕いとかけりこまほしげに思へるを〔同、藤原、十〕かけりありきていとねん頃に大方の御うしろみを思ひあつかひたるまにてついでせうしめりき給ふ〔同、源氏、廿一〕ふりみたれひまき空になき人のあまかけるらん宿ぞかなしき〔同、明石、廿〕「秋のよの月げの駒よ我こふるを去井にかけれ時のまもみん」〔萬七、四十五〕二上 mountain とびこきて雲がくり可氣理にいまを〔同、九、十一〕「あまはるかかけりかりわたるかも」

かかげかゝ 〔源、總角、五十八〕みすかかけかゝ、かじこかまはらひ

かかげかぬ 〔源、常木、廿九〕かかげかぬを心みにひきあげ給へればあなただよよりはる、さりけり〔同、權木、四十二〕こなたにかよらうじのはしの方にかげかぬ所にて穴のすこしあきたるを見おき給へりければ〔夫、廿一、新六、二、信實〕「世をそむく衆のあみ戸のかげかぬの思ひはづせば人ぞまたる。」

かかげかけし 心をかくるをいふ。心にカケクシキ也、大方男女のこころ云り〔源、藤原、上、百八〕一日はつれなし顔をなめめきしうらゆるし聞えりしを見するもあそびやあなかけくしちをほるりかたはしりかきて〔同、下、五十九〕院の上かゝあまたにかけくして女三人は人におぼれ給ふやうにてひりおぼれりのこもるよなくおほくつれつれたすくし給ふやうに人の奏しけるついでにこころおぼしたるけり〔同、權木、廿五〕いとあまめかにてひりつちけ給へはわか

御みかごの事はほほほしめかけす云々。大君詞いかにてかはかけくしけはの給ひつゝ中々聞えんことも覺侍らんと打笑ひ給ふるもさる物かゝり〔同、廿八〕かりそめの世の思ひしるゝ心ゆゑおぼれだしたる心しるゝもさる御事の思ひだしたる聞えはかけくしめさるなればさるゝかゝの御事あまたす聞え水さる〔同、廿八〕「同、藤原、一」「猶もさるかゝも見をさくさけいへつゝあつち心なまめさる人にもさるわがらも身なあり〔同、源氏、廿八〕尾にたり給ひぬむを聞給ひてかけくし筋にはあらぬ、猶もさる方の物をも聞えはせ人に思ひ聞えつるをかくもほほしにけり口をさし覺え給へは〔同、若菜、下、廿三〕今は北方もほほしはす、かの昔のかけくし筋思ひはなれ給ふにやさるも折もわたり給ひつゝ、對の上にも御對面ありす〔同、同、六、十二〕たゞはかり思ひつゝあたらはし聞えしちを中々かけくし筋はなかくもみかごを思ひしけり〔同、權桂、四〕ちをさし、ほらもあそび給へはさるゝ向かけくし筋なほこそ思ひださ給はめなほの給はせけり〔同、總角、廿〕「かじへつゝ筋はいつかたでも思ひ聞えし」〔新六、五、衣笠内大臣〕「またたのみあひみる中の玉だすもかけくし筋をいりかりける」〔源語、橋姫のち物にカサ、シて陰のこゝろ、ほほほほほほ〕

なんぢららほはなりつるはらみじうも侍りつる物かな

かかげつかま 兼官なり〔宇津保、田嶋の村鳥、十九〕右大辨かけつかま右近の少將式部省文章はかせ春宮の學士内春宮院の殿も猶いとなく早苗さるらん 〔新十、十八、雜下、兼盛上人〕「秋はつるひたのかげ繩たえしより山田のいほにける人もなし」

かかげなづ かげもかたぢもなまなつとも也〔後撰、秋下〕「友則集」身のなり出ぬことをなまなけき侍りける頃紀の友則もさるよりいかたぞ問ひおこせて侍りければかゝりことな菊の花を折てつかはしける藤原忠行「枝もほも」な、友「さつろふ秋の花見ればはほはかけなくなりぬもさるなりかへし友則」筆もてよほはひのおぞあ花なれば千代の秋こそかづはしげ〔みづ〕友「よと」

かかげの 陰野 〔新拾、雜一〕「夫、十三、秋雨、伊勢」秋おかき山の陰野の柴の戸に衣手うすく夕ぐれの雨〔空、新拾一〕

かかげのくちま 陰の朽木「實之、十九」後撰「新拾」「春やらの」〔後〕「秋をほべらちん」のまひん」後」「おほくかなかかげのくちまの」〔後〕新拾「世を過す身は

かけたる 次のかげの所に出す

かひつる 走るなり〔源、藤原、二〕此部屋のおたつをかせつゝ侍れんといふ、はほほほほほほほ

ななぢららほはなりつるはらみじうも侍りつる物かな

かひつつかま 兼官なり〔宇津保、田嶋の村鳥、十九〕右大辨かけつかま右近の少將式部省文章はかせ春宮の學士内春宮院の殿も猶いとなく早苗さるらん 〔新十、十八、雜下、兼盛上人〕「秋はつるひたのかげ繩たえしより山田のいほにける人もなし」

かひつなづ かげもかたぢもなまなつとも也〔後撰、秋下〕「友則集」身のなり出ぬことをなまなけき侍りける頃紀の友則もさるよりいかたぞ問ひおこせて侍りければかゝりことな菊の花を折てつかはしける藤原忠行「枝もほも」な、友「さつろふ秋の花見ればはほはかけなくなりぬもさるなりかへし友則」筆もてよほはひのおぞあ花なれば千代の秋こそかづはしげ〔みづ〕友「よと」

かひつの 陰野 〔新拾、雜一〕「夫、十三、秋雨、伊勢」秋おかき山の陰野の柴の戸に衣手うすく夕ぐれの雨〔空、新拾一〕

かひつのくちま 陰の朽木「實之、十九」後撰「新拾」「春やらの」〔後〕「秋をほべらちん」のまひん」後」「おほくかなかかげのくちまの」〔後〕新拾「世を過す身は

「宮人のする衣もたすきかけて心をたれたすすり」〔素性、五〕
 「君のため我はつる唐衣かけてならひそひびきたる」〔萬、一〕
 「入家なる妹をかけたのびつ」〔繪巻、四〕「そのかみちの社のゆ
 きたすかひてのみるは懸念と思ひて」〔朝恒、上、廿三〕「櫻古」ひあ
 ねてあるにあらは藤の花)なみの、(かひてのみこそ春をしのはめ
 「朝恒、廿六」かひてのみ見つ、そこの紫花らくし藤をあらし藤の花
 こそ「源、廿六」中納言のまをらふは年頃忍びおほし、かこ此
 御思ひの候は中々もなる筋にもかけ給はず「同、淨舟、廿九」
 やうのなはさればもかけ給はず「同、紅梅、十四」さるこそさかしま
 花にこそつても先かけ聞え給ふ「桑、木綿、四手、八」御めのもちかけ
 奉らぬ折なごひを奉る「萬、三、廿一」「栲ひれのかけまへはし
 妹が名を此せの山にかけはらかにあらん」〔後撰、戀一〕か「秋の
 田ののね、あこをかけたかと思ひ出るかうれしゆもな」〔源、葎木、
 四十二〕「よし今は見ゆをかけたて」〔古、戀五、贈人しす〕「それ
 だと思ふをわけて我情をまなかなかけそ人のまかへ」〔六帖、五、下〕
 「玉はまかひねはるるしかけたればあなつらはし人の心や」〔宇津
 保、樓の上、廿四〕ままされつづけても物思はせ奉りけんと思ふに
 くるしなれらるる昔の世の中の事をかけし給ふは「古、戀一、
 贈人しす〕「千はちあるかもの社のゆきたすひもひも君をかけた
 日はな」〔同、戀五、素性〕「秋の田ののね、あこをかけたかへに何
 うしてか人のかるらん」〔萬、八、五十二〕「わが宿をもみづるかんでみる

「さるるもかけつ、こひぬ日はな」〔附〕かけんも「源、玉葉、廿
 一」君の御まははかなき世を思ふたあなもちひはんとてかけ
 んも、しつてのひ出すかふる「大和物、二」内へな参るといひ
 おこせたりければ「玉すたれ内をかふるははるし、かひをみせじと
 思ふなかけり
 かひて 轉してイサ、カモと譯すれば穩に開ゆ、俗の氣にかゝる目
 にかゝるなをいひ、かなることたの同くや「源、夕顔、十七」し
 す顔にてかけて思ひよるまは「狭、三、上、廿一」尼君調常におびた
 だしかりし心おきてをも(姫君の孕まてありながら入水せんと思ふこと
 をいふ)問ひ侍りしかひかけてかふるなる事はほのかし侍らる
 し
 かひても 右に同じ「宇津保、嵯峨の院、三」まいてかけても聞給ひな
 はたつら人になり給ひな物を「源、末摘、廿三」かけても人のあた
 りにちかうるまもものこもし給はらかりけり「同、葵、四十六」かふる
 御心おほすまははかけつるおほしやうりかは「同、橋姫、廿八」年
 頃かけても聞及はらけるまの給ふは「同、葎木、五十九」あるまじ
 き心のかけても侍らばこそめまじかから「同、七十一」昔の御けは
 ひにかけたもれたらん人はしる國道も尋ねしをほしき心のあ
 るを「同、淨舟、五十七」さかたいたくもしたるかなかけても見及はら
 心はよまほほまされ給ふたたくしははとおほしはつねなり「新編
 日記、三」かけてもかへなまよふおほつらくしき事おほしよら物

と見をりつる人の御心を「大和物、六」此事をかけたもいは
 は女のみじと思ふ

かひなまらぬ 「新編、冬、公卿」はれくもらうまたつ雲の山
 のはなをたてたてたの月「月詠、十、無正」なる、かへ見れば
 ほろろとてつ、影をたてたはの月かな

かひの 妻の事か「狭、一、下、十九」候をまてたかへあておはせん
 よりは「同、同、三十」ななかての少將のかへあて道い人こには
 心おつていひて給はる「同、三、上、廿六」かひをさるるのまは
 ならのひひをたてて三河の守をたててつて筑紫ノノ出
 して、侍り

かひのつらさす 「源、櫻の後、十五」かひあもものこもつていひま
 だかひのつらさを給ふ

かひぬち 「和泉式部集、一」かひぬちる人もあらなつづみんよし
 の、山の岩のかけ道「古、秋下、贈人しす」世にされはらるるこそま
 られまよしの、岩のかけ道まなまらして「源、葎木、廿三」君がま
 岩のかけみちたえしより、極の雪を、何ぞかは見る「夫、一」師光、昔
 羽山に「同、廿一」爲家、箱根の山にまより「同、十二、建長八年、經家」お
 りまらるる谷のかけ道こけたさかよふ男鹿のあをあれにけり「玉
 葉、雜、一、康衡」跡をほろそほのかけみちたえくに霞をつたふ春の
 山人「續拾遺、光成」こえをたてはなへつてあしかひの山かひを
 ほろ山のかけみち

かひの かけ樋 「後拾遺、雜三、上東門院中將」思ひやれど人もなき山
 里のかけひの水のこゝろ候を「夫、廿三、永久四年百首、兼昌」あ
 お坂のかけひの水にながる、は音羽の山のみちなりけり「同、十
 六、後成」山里はかけひの水につら、もつれればをまらりぬ
 る「同、廿三、久安百首、兼輔」走り井のかけ樋の水のすし、たこえ
 るもられずあ坂の關「山家、上、四十三」かけひにも君がつ、やむ
 すおん心おそくたぬなるかな「拾遺、四」葎の谷より出る羽
 音はかけひの水をけ初むら

かひひも 「萬代」人にかひひもさつうかはすてて「ひて行かたしな
 ければかけひもつるもまははつたかははれる
 かひもちかほ 「夫、廿八」山家、下「みづ河にて西行」かひのこさみづ
 のまはにかへるてかけもち顔になく蛙哉

かひもの かけ物 「源、繪、四十九」かけ物まをまらひとになくつらみ
 あへり「同、竹川、十八」君たちはうちさし給へる若うち給ふ昔よりあ
 らそひ給ふ櫻をかけ物にて三はんに敷ひつうかち給はん方に花を
 よせてたてたははれはし聞え給ふ「宇津保、初秋、五十六」まうも
 のかけ給へ聞え給へは、おまを何をかかへんまをよりむすめひ
 とりかけんおまを何をか、け給はんとするかねまは侍るてしたか
 ひてなりた、まかけ侍らんまをこれかれ子まをまかひものにて

かひす 「抄」に度重ならぬ意「徒然、上」かたうち心ままよき人もま
 まなかりぬればしなたり顔にまはける人にも立交りてかけす

かぶき 「白文、廿四、廿」鸚鵡詩云々人憐ニ巧語、情雖重鳥憶高
飛意不同應、侶朱門歌舞妓深藏軍ニ閑後房中

かぶし 傾き伏したるを云「古事記、上、卅一」夜麻登のひまのす
すき宇那加夫斯(低顔傾也)うなれたかたよく也、物思ふ時のさ
まを薄の打傾くによそ(玉へり)「神代紀、下、十三」顔傾也此云
歌矛志「天智紀、八」垂穎而熟の文字をかぶしてあからりと訓たり
「散木」稻のかたよくを見て「おほつかたが袖のこにひきかゝるぬか
くし」ほろしこの稻かぶしそめけん「徒然、百五段」かぶしかたぢな
いさよしも見えて「四季物語、十一月」烏帽子うちかたよきたるかぶ
しかたぢなかしきものなるぞし

かぶし 合子。今の梳也「和名、十六、漆器部」朱合俗所謂朱漆合
子也「盛衰、卅三、十七」田舎合子の大に尻高く底深になま漆塗
るか所々剝たるに毛立したる飯の黒く糺交なりけるを堆く盛
あげて云々合子を筒給とかあれば義仲が随分の精進合子あた
にもしよにたはす云々猫殿たい掻給へくさす、あたり

かこ 水手 「應神紀、七十」數十鹿鹿浮海來之便入于播磨鹿
子水門云々至見皆人也唯以著角鹿皮爲衣服耳云々號其著
岸之處曰鹿子水門也凡水主曰鹿子蓋始起于是時也「古本
和名」水手日本紀私記云水手如古應神紀、十「喚淡路御原之
海人八十人」爲「水手」「延喜主稅式、五」水手功糧「萬、十五、十
二」月よみの光をさみゆゆなきにかの聲よひららるるかこ

「同、七、四十二」なごの海を朝こぎくれば海中に鹿子を鳴なるあ
はれその水手「夫、卅三、盛方朝臣」かこのおす音にしろしも、霧の間
にゆらのわたるるものすい舟「同、廿三」「同、廿三」にも喜多院入道二
品のまこ「目もはるにまきかけさかり行舟はかこの聲こそまじはま
けれ」萬、十五、十三「舟人も鹿子もこゑよひ」同、廿、廿八「なには
つにふねをうけすゑをそかぬきかここの入て

かこ 是は帶鉤にて銅のほかにて今のはせの如く合するやうに作
れる也、東帯の帶はかこにてひきかくるやうにしたる也「和名、十二、
廿一、腰帶具」鉸具、揚氏漢語抄云鉸具此問云賀古今按唐令所
謂玉鉤是也腰帶及鞍具以銅屬革也○歌にはかこも又か
こはかりにかけよめり「六帖、五、下」「下紐のしるしとよめるもと
けなくにかたるかこも戀すをあるまき」源、紅葉の賀、二十九、「中た
えはかこをささるあまのまはなだの帯はとりてたにみす」六帖、五
下「新古」東路の道のほたるひたち帯のかこもはかりもあひ見て
しかな「新神、戀三」「こははるな東路をさくひたち帯のかこもはかり
のあま坂の關「源、鏡角、四十五」「こよ衣まなれまははははははははは
こはかりはかけすしもあるじ」新撰古、戀二「めりあはん末をほし
らで常陸帯のかこもたになき戀もある哉「夫、卅三、第三のまこ」わ
が戀は神にのれる常陸帯のむすおかこもなだのむはかりぞ「源、夕
顔」ほのかたも軒の萩をむすは露のかこもを何にかかけし「同
夕顔、十八」わけゆかん草葉の露をかこに猶ぬれぬむかけんぞ

かこ 水手 「應神紀、七十」數十鹿鹿浮海來之便入于播磨鹿
子水門云々至見皆人也唯以著角鹿皮爲衣服耳云々號其著
岸之處曰鹿子水門也凡水主曰鹿子蓋始起于是時也「古本
和名」水手日本紀私記云水手如古應神紀、十「喚淡路御原之
海人八十人」爲「水手」「延喜主稅式、五」水手功糧「萬、十五、十
二」月よみの光をさみゆゆなきにかの聲よひららるるかこ

かこ 水手 「應神紀、七十」數十鹿鹿浮海來之便入于播磨鹿
子水門云々至見皆人也唯以著角鹿皮爲衣服耳云々號其著
岸之處曰鹿子水門也凡水主曰鹿子蓋始起于是時也「古本
和名」水手日本紀私記云水手如古應神紀、十「喚淡路御原之
海人八十人」爲「水手」「延喜主稅式、五」水手功糧「萬、十五、十
二」月よみの光をさみゆゆなきにかの聲よひららるるかこ

かこ 水手 「應神紀、七十」數十鹿鹿浮海來之便入于播磨鹿
子水門云々至見皆人也唯以著角鹿皮爲衣服耳云々號其著
岸之處曰鹿子水門也凡水主曰鹿子蓋始起于是時也「古本
和名」水手日本紀私記云水手如古應神紀、十「喚淡路御原之
海人八十人」爲「水手」「延喜主稅式、五」水手功糧「萬、十五、十
二」月よみの光をさみゆゆなきにかの聲よひららるるかこ

かこ 水手 「應神紀、七十」數十鹿鹿浮海來之便入于播磨鹿
子水門云々至見皆人也唯以著角鹿皮爲衣服耳云々號其著
岸之處曰鹿子水門也凡水主曰鹿子蓋始起于是時也「古本
和名」水手日本紀私記云水手如古應神紀、十「喚淡路御原之
海人八十人」爲「水手」「延喜主稅式、五」水手功糧「萬、十五、十
二」月よみの光をさみゆゆなきにかの聲よひららるるかこ

かこ 水手 「應神紀、七十」數十鹿鹿浮海來之便入于播磨鹿
子水門云々至見皆人也唯以著角鹿皮爲衣服耳云々號其著
岸之處曰鹿子水門也凡水主曰鹿子蓋始起于是時也「古本
和名」水手日本紀私記云水手如古應神紀、十「喚淡路御原之
海人八十人」爲「水手」「延喜主稅式、五」水手功糧「萬、十五、十
二」月よみの光をさみゆゆなきにかの聲よひららるるかこ

ら給ふるのみならずか「萬、三、十五」のちの行すまはては
 おもひ心懸してか「古、夏、太則」「夜もくち道や
 せし時鳥が宿をせしむるか「後拾、雜」「すまはてに覺
 ゆる物はあしき哉降り江のほほはほほなるよ「源、夕顔、十一」前
 栽のころくみだれたるをすまはてに給ふるもまはてにたぐひ
 な「同、花散里、三」すまはてに給ふるも「古、秋上、讀人不知」「秋
 萩の下葉色づくよりちひよりある人のいねがてにする「萬、五、卅
 八」「あらたへの布衣をたにせ難にかくちかかんせんすをなみ
 「入丸集、七」「夕されは君をせしむるもすまはてのちりぞ今もいねが
 てにすまはてに「源、三、十五」はかなくて春ひと月は過にけり花のさかりはすま
 てにせよ「伊勢」「神無月しとればかりはちりして行かてにのみな
 かなるらん「大伴家持」「春山はちり過れぬ二輪山はちりたつほ
 り君まはてに「藤清正」「月影を待程はかり立をせる君が爲には
 いでかてにせよ「同」「夏の夜の月待ほは時鳥我をせはかり過か
 てにせよ「伊勢、二」「鳥をきて吹風をみかから衣君待かてにすま
 夜なまは「源、三」「足曳の山邊の道はちりかたれも行をみれぬ過か
 てにすま「伊勢、下、廿」「ちる雪を花をみはたのめけんかかわか
 身のちりかてにする「萬、五、廿一」「春をればわづの里の川にはは
 あかかてに「源、三、十五」後集、二」「ほくかてにたれぬを「哉か
 ら衣かてに「古、四」「山崎より神なひの森はち
 くりの人々まはてにちりかてにたれぬをみはるるか「萬、二

十一「梓弓ひかたまはくよちめも後の心をしりかてぬか
 かてかね合する義也。俗にかて、くはてとらなり「萬、十六、十八」
 「ひしほすにひるつきかて、たひねがふわれにみせそなきのあつもの
 「伊勢集、廿五」調書云々初雪のふるに「後集、冬、題しらす」「神無月
 しとれ計はちりしてしきかてにのちり「後」「なをかなるらん」「夫、
 延喜廿一年三月廿七日京極御息所歌合」「雪がてにゆく春風ははちけ
 れを春山なれば寒からなくに「推古紀、二」沉水漂、著於淡路島、
 其大一團島人不知「沉水」以交、新燒、於竈「蜀都賦」椶以
 積葉
 かて「續紀、四、十五」敗軍、糶、糶「和名、十六、十四」糶、考、勝
 切韻云糶和名加天行所糶米也又儲、食也「新六、五、光俊」「
 まなみおこなりのりをとてしてつひの道にはかてはおもは
 かてり 是も意は同じ「萬、一、卅」「山ののみをながてら神風の
 いせのさてもあひ見つるかも「元輔」「夫」「のほりゆけ、く、夫」位の
 山の茶までいほほにおふる松も見かてら「源、帯木、廿」「いかい思
 うさけし見かてら雪を打はひつ、」「古、春上、時恒」「我宿の
 花見かてらちる人はちりなん後を戀しかるべき「源、梅、廿九」人わ
 ろくつれくにおほほるれば秋の野も見給ひかてら雲林院にま
 て給り「古、講義」「ありぬを心みかてらあひみねはたはわれに
 き途を戀し「中務、廿」「花見にほひかてらてに人しれす折を
 も風にちりかてら源、推木、廿六」「つちちち駒あみしたく山川

をてるもかてら「萬、七、十八」「吾丹は沖にちるるな
 ちり舟かたかてら「源、三、十五」かてら「萬、下、十」「まなみのみら
 はひかてら「源、三、十五」かてら「萬、下、十」「まなみのみら
 斷「源、三、十五」かてら「源、三、十五」かてら「源、三、十五」かてら
 「萬、下、十四」帖「新古、離別、其之」「玉鉢の道の山風のちり
 はちりかてら「源、三、十五」かてら「源、三、十五」かてら「源、三、十五」かてら
 がてら「源、三、十五」かてら「源、三、十五」かてら「源、三、十五」かてら
 給りか「源、三、十五」かてら「源、三、十五」かてら「源、三、十五」かてら
 濱つちの方にはちりかてら「源、三、十五」かてら「源、三、十五」かてら
 は物し給はてら「源、三、十五」かてら「源、三、十五」かてら「源、三、十五」かてら
 ちり給はてら「源、三、十五」かてら「源、三、十五」かてら「源、三、十五」かてら
 ひくかてら「源、三、十五」かてら「源、三、十五」かてら「源、三、十五」かてら
 まひひけり「萬、十八、七」「梅花をたるとに我ゆかん君が使をか
 たまかてら「同、十九、十二」かてら「源、三、十五」かてら「源、三、十五」かてら
 ほに染てもちた衣のさそを「源、三、十五」かてら「源、三、十五」かてら「源、三、十五」かてら
 田のほほを見我底利わかてら

かてら 今もいねがてに「源、三、十五」かてら「源、三、十五」かてら「源、三、十五」かてら
 か所はわれはた、白き御をひかてら「源、三、十五」かてら「源、三、十五」かてら「源、三、十五」かてら
 まつたてならは「源、三、十五」かてら「源、三、十五」かてら「源、三、十五」かてら「源、三、十五」かてら
 か「源、三、十五」かてら「源、三、十五」かてら「源、三、十五」かてら「源、三、十五」かてら「源、三、十五」かてら

十二笠和名加佐所、以禦、雨也「伊勢物、百七段」みのもか
 あらでしに濡て「源、三、十五」かてら「源、三、十五」かてら「源、三、十五」かてら
 して「源、三、十五」かてら「源、三、十五」かてら「源、三、十五」かてら「源、三、十五」かてら
 古、旅、信經「み山ちにはちる出づる旅人のかさ白たに雪つちり
 つ」「新六、五、衣笠内大臣」「ちりかてら雪の梅のつちりかてら心
 のちりかてら「同、同、行家」「ちりかてら事なすつちりかてら
 ぬをちりて君はちりかてら「同、同、光俊」「なをちりてに我かてら「源、三、十五」かてら
 がの下の涙雨をちりける「源、三、十五」かてら「源、三、十五」かてら「源、三、十五」かてら
 させて「延喜式、十五」内藏寮二十箇笠四十六枚和泉國調「源、三、十五」かてら
 九「脚半にあみかてら「夫木の抄書の部に」「新六、五、爲家」
 「雨すくるとまの道の木かけよりしかさ笠をみかてら「源、三、十五」かてら
 蓬生、廿二「みかてら「源、三、十五」かてら「源、三、十五」かてら「源、三、十五」かてら
 大歌所「みかてら「源、三、十五」かてら「源、三、十五」かてら「源、三、十五」かてら
 り「源、三、十五」かてら「源、三、十五」かてら「源、三、十五」かてら「源、三、十五」かてら
 か「源、三、十五」かてら「源、三、十五」かてら「源、三、十五」かてら「源、三、十五」かてら
 身にかてら「源、三、十五」かてら「源、三、十五」かてら「源、三、十五」かてら「源、三、十五」かてら
 り時も「源、三、十五」かてら「源、三、十五」かてら「源、三、十五」かてら「源、三、十五」かてら
 か「源、三、十五」かてら「源、三、十五」かてら「源、三、十五」かてら「源、三、十五」かてら
 案上「雪を見てかけにちりかてら「源、三、十五」かてら「源、三、十五」かてら「源、三、十五」かてら

かきり 飾馬。伊勢物語五十二段。人のちよりかきり。粽をかきせたりける。〔拾遺賀〕五月五日ちひさしきかきりちまきを出すけのこにいつて

かきりたろす 〔類古、雜下〕東北院大皇太后宮かきりおろさせ給ひける日云々。〔同、同〕上東門院かきりおろさせ給ひける時よめ赤染衛門

かきりくるま 飾車。〔夫、廿三、權僧正公朝〕年ごとにみるもめづらしみあればのちひかけたるかきりくるま。〔同、七、爲家〕「葵草かきり車のけしきまきかきりくるまなるもの見をま〜」

かきりむま 飾馬。〔江次第、五、廿二〕春日祭條、酉日朝宮人等。戲設二飾馬。一馬爲以、蓬爲三雲珠。一以三土器爲三李葉。一

かきり 飾。〔續後紀十九、廿〕帝之御世萬代爾重爾飾也。〔同、同、十三〕伊須賀志態遠添飾利。〔源、平木、六〕我は顔にて家の内をかきり人におもらじと思ふ。〔同、柏木、十二〕おとしいとよ人目をかきりおほせ。〔夫、十九、曉、爲家〕「たをめのかきり朝日のよまほひにまづおほひみる玉くしげ哉。」〔千載、真、仁和寺法親王〕「玉川と音にまじはらうの花を露のかきりれる名にこそありけれ。」〔山家、上、七〕君がすむ宿のつばには菊をかきりる山人の宮をいふかきり。

かきり 花。〔夫、四、基後一代、雜一〕「み山には椎のかきりなればはけれ。かきり花のこころはさかへり。」〔曾井集〕「み山には山のちりちりあふかりしひかきりなればはけれ。」〔夫、廿九、西行〕「老いけは末

かきり 風。〔三、抄〕「こころのちかきりなるのはほろ〜くついでて。」

かきり 加麻。〔萬、三、四十九〕加麻。〔カセ、ヤ〕「風早のちののち〜。じみれ〜。しなき人思へは。」〔権通世記〕「風早乃伊勢乃海。」〔萬、七、廿二〕「風早之三種乃浦廻乎と舟の舟人。」〔源、平木、十五〕「〜。しなき人のてう〜。かきり。」〔同、總角、五十九〕紅葉をかきりたる舟のかきり錦と見ゆる。〔同、匂宮、八〕世中〜。かきり花をかきりなる御身のかきりも心にいつかすのみ思ひし〜。給ふり。〔同、佛、廿九〕佛の御かきりは〜。かきりひなき〜。の極樂思ひゆる。〔夫、廿四、後撰〕「〜。かきり雲のはたてをかきりて入日よまの光りなる。」〔源、平木、廿八〕佛のみそ花のかきりも〜。行ひ給ひけり。〔同、孟、續〕「〜。かきり也。」又花盛なり。〔山家、上、十〕中々〜。かきり。

かきり 飾。俗と同一。〔延喜正式、九〕凡金銀薄泥、不得爲三服用井雜器飾。但五月五日諸術府甲冑飾不。在三製限。〔源、平木、十五〕「〜。しなき人のてう〜。かきり。」〔同、總角、五十九〕紅葉をかきりたる舟のかきり錦と見ゆる。〔同、匂宮、八〕世中〜。かきり花をかきりなる御身のかきりも心にいつかすのみ思ひし〜。給ふり。〔同、佛、廿九〕佛の御かきりは〜。かきりひなき〜。の極樂思ひゆる。〔夫、廿四、後撰〕「〜。かきり雲のはたてをかきりて入日よまの光りなる。」〔源、平木、廿八〕佛のみそ花のかきりも〜。行ひ給ひけり。〔同、孟、續〕「〜。かきり也。」又花盛なり。〔山家、上、十〕中々〜。かきり。

に身こそかきりけれ。かた山はたの松のかきりなれば

かきり 風隠。〔夫、十八〕延喜六年云々。依雪波心寒。カキる雪に波の〜。かきりなれば。〔玉葉、春下、花山〕「木立は〜。かきりて櫻花風か〜。かきり。」〔源、平木、中〕「宇治の院に〜。かきりて見ゆる風は〜。かきり吹〜。かきりて見ゆる風は〜。かきり。」〔宇治拾遺、四、四〕藤原氏の條に「來て見ゆるに井か〜。かきりて見ゆる風は〜。かきり。」〔源、平木、中〕「宇治の院に〜。かきりて見ゆる風は〜。かきり。」〔源、平木、中〕「宇治の院に〜。かきりて見ゆる風は〜。かきり。」

かきり 今カサツ。〔源、平木、上、一、廿六〕「〜。かきり。」

かきり 女房。〔源、平木、上、一、廿六〕「〜。かきり。」

かきり 今カサツ。〔源、平木、上、一、廿六〕「〜。かきり。」

かきり 重。年、月、日、衣、紙、萬、萬にわたりて。〔源、平木、上、一、廿六〕「〜。かきり。」

かきり 春風はのちか〜。かきりて見ゆる。〔源、平木、上、一、廿六〕「〜。かきり。」

かきり 同、若葉、四十八。庭の〜。かきり。

かきり 飾。〔夫、三十三〕此のたはり〜。白妙の衣は〜。かきり。〔伊勢物語、九段〕「〜。かきり。」

かきり 金葉。〔源、平木、上、一、廿六〕「〜。かきり。」

かきり 人。〔源、平木、上、一、廿六〕「〜。かきり。」

かきり 山家。〔源、平木、上、一、廿六〕「〜。かきり。」

かきり 我昔の人。〔源、平木、上、一、廿六〕「〜。かきり。」

かきり 二度の意。〔源、平木、上、一、廿六〕「〜。かきり。」

かきり 何かかきり。〔源、平木、上、一、廿六〕「〜。かきり。」

かきり 衣紙。〔源、平木、上、一、廿六〕「〜。かきり。」

かきり 史記音義云衣之單複相具謂之製。〔源、平木、上、一、廿六〕「〜。かきり。」

かきり 紙の〜。かきり。

かきり 今い〜。かきり。

かきり 後拾遺。〔源、平木、上、一、廿六〕「〜。かきり。」

かきり 石清水。〔源、平木、上、一、廿六〕「〜。かきり。」

かきね

かきの

七百八十

「かきね」は五献をばりてかきねかはらけの事あり

かきねり 大方衣にいり「源、頼朝、十一」にびたる御をこそなれど

袖口のかきねなりおちたてり「同、頼朝、廿八」たれもくまやらをつくし

もあるかきねの巻りつらひたるかたちあり「源、頼朝、廿四」女房をこ

もあかきねの巻りつらひたるかたちあり「源、頼朝、廿四」女房をこ

もあかきねの巻りつらひたるかたちあり「源、頼朝、廿四」女房をこ

かきねり 「頼朝、廿二七」日月重 奴「後撰、卷下」「一とせにかきね

る春のあらはこそふた、び花をみんとたのめ 「頼朝、上」山吹や

菊もかきねる敷はあれどまきりて見ゆる九重の秋「源、明石、廿八」

花はあきくみ、かきねはに月日かきねなり「同、頼朝、廿五」こかくま

るもあかきねの巻りつらひたるかたちあり「源、頼朝、廿四」女房をこ

かきねがれ 風流「夫、廿七」清輔集「たか山にはなれし鷹のかみ

「た」ながれし鷹の懸る哉「夫、廿七」散木、中、五十六

「同、頼朝、後撰」みかり野にかきねがれしは鷹の聲にも

「同、頼朝、後撰」みかり野にかきねがれしは鷹の聲にも

かきねの巻 風風「夫、廿五御集、中務卿のまこ」出雲なるさくみの

濱のかきねの巻出てゆけばははきの島みゆ

かきねの巻 風波「土佐日記下」海の上ののらへ風波みよみ

「同、同」風に風波たかればははきの島みゆ

かきねの巻 俗には崇の字を用いて増し加はることをいふたかきねの

かきねの巻 風間「夫、廿三、兼盛」あら波のかげ「よせ」萬代（く）け、兼

盛「る岸の遠ければかきねの巻かきねの巻かきねの巻」

九、讀人しらす「よるよるなみ風をまきし舟よりよもよとこかきね

れぞかきね「新六、三、衣笠内大臣」あはち鳥かきねわたるし舟

のかきねの音を沖にきこむる「小町集」かきねの巻かきねの巻

もあかきねの巻かきねの巻かきねの巻かきねの巻

かきねの巻 風祭「散木、下、廿」西の宮に神民の舟にほこき

かきねの巻かきねの巻かきねの巻かきねの巻

かきねの巻かきねの巻かきねの巻かきねの巻

かきねの巻 笠間の神「東方朝臣集」あににまき笠間の神の

なかりせはふりにし人をいかにまき「拾芥抄」宮内祭文といふに

云々「掛巻毛畏支宮内四柱笠間乃廣前仁云々」〇篤胤云

大宮降神に配せ祭る神三柱ありて其を總て笠間神と申す

聞たり云々此考玉なき六之卷二十四のひらにはし

かきねの巻 風越「夫、廿九」新六、光俊「かきねの巻たる山木のう

はなは花の紅葉もある時ぞかきね「新六、二、衣笠内大臣」あまのは

らはるは空もかきねの巻かきねの巻かきねの巻かきねの巻

かきねの巻かきねの巻かきねの巻かきねの巻

かきね

かきの

七百八十一

「かきねの巻」は五献をばりてかきねかはらけの事あり

かきねり 大方衣にいり「源、頼朝、十一」にびたる御をこそなれど

袖口のかきねなりおちたてり「同、頼朝、廿八」たれもくまやらをつくし

もあるかきねの巻りつらひたるかたちあり「源、頼朝、廿四」女房をこ

もあかきねの巻りつらひたるかたちあり「源、頼朝、廿四」女房をこ

かきねの巻 契沖云笠の内に輪の如き紐してささるその輪を

借手といひり扱輪の語につけたり「堀太、初戀、公實」まきねけよ

き笠のかりでのわらみの打きてのみあ過（戀）わたるべき「夫、廿

二、衣笠」かきねの巻のかりでのわら（ほ）を、まきねでなせるかきねに

かきね白玉「萬、十一、廿五」わらみのかりでのわらみのにわ

れは入りねといもにつげさせ〇堀書入れ奥義抄云かりては笠

をつくる物也それをは笠の筒にある輪につくる也云々〇此歌は

童蒙抄の説によりてよめる也萬葉にマサニとあるは美乃地名

也

かきねの巻 「夫、十九」新六、二、光俊「霜かきねの巻」夫（野中

の岡の風おきてなら出さくかきね我身かきね

「草根集、寄車戀」手にてははさなたよりかきね風車

かきねの巻かきねの巻かきねの巻かきねの巻

かきねの巻 「龍馬集、妹之門」妹が門をまきねかきねの巻

かきねの巻かきねの巻かきねの巻かきねの巻

かきねの巻かきねの巻かきねの巻かきねの巻

かきねの巻 推古六年四月 自新羅獻鶴二隻 「夫、一、立春、季

能「けさよりは深きの氷とけぬらん春風かよかきねの巻」後

撰、夏、讀人不知「かきねの巻の山とびこそなまきねけは夏のよわたる

月ぞかきね、「新拾、秋下、鳥家」天原ひかりささるかきねかき

みと見ゆる秋のよの月「同、同、宗尊親王」更ゆけば月影さきかき

ねのよわたるはしに霜さきかきね「同、雜上、後鳥羽院」夏山のみね

とびかきねの巻かきねの巻かきねの巻かきねの巻

事也源氏宇治の巻にかきねかきねの巻は今のしらすかきねの巻なり

かきねの巻 鶴の橋「新古今家持」かきねの巻わたるはし

にさき霜のしらすを見れば夜ぞかきね「大和物、忠孝」かきね

のわたる橋の霜の上をよはにかきねかきねの巻にこそ〇眞淵云、

大内の御橋をいへるなり唐詩に鳥橋橋邊敵御遊「また織女

橋邊鳥鶴起さきかきねかきねの巻かきねの巻」

かきねの巻かきねの巻かきねの巻かきねの巻

かきねの巻かきねの巻かきねの巻かきねの巻

かきねの巻かきねの巻かきねの巻かきねの巻

かきねの巻かきねの巻かきねの巻かきねの巻

かきねの巻 「和名、十九、九二」推朝和名加敷女似「蟹色黄其一整偏長

三寸者也

かきねの巻 「和名、四、七」挿頭花、漢語抄云鈔頭花賀佐之「推古紀、

かきねの巻かきねの巻かきねの巻かきねの巻

かきね

七百八十一